
異世界下克上物語

豚割

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界下克上物語

【Nコード】

N95410

【作者名】

豚割

【あらすじ】

主人公、有沢累ありさわるいは、ある日好きな女の子に告白し、見事にフラれた。自棄になった累は、急に叫びたい衝動に駆られて港へ行ったのだが、不慮の事故により、冬の海へと落ちてしまった。そして、目覚めるとなんとそこは異世界だった！

異世界に着いて早々、累は奴隷商に拾われてしまったのだが…

異世界補正によりトンデモ能力を手に入れた（若干ヘタレな）主人公が、奴隷達を救うために奔走する物語です。

電車通学or通勤時など、暇な時にでも読んでやって下さい！

第1話

唐突だけど、皆さんに尋ねたい。

皆さんは、神様というものを信じているだろうか？

なに？

なんでそんな事を聞くのかって？

それはもし神様なんてヤツがいるとしたら、今すぐ俺の目の前に出てきて欲しいな、とか考えているからである。

何故かと言つと

「じつ、どこだよ……」

事もあるつか、俺は現在見知らぬ土地、しかも荒れ果てた荒野で途方に暮れ、散々彷徨い歩いた末に、遂に空腹で力尽き倒れてしまったのだ。

今すぐこの状況を俺に説明し、なぜこんな事をしたのか聞きたい。

事と次第によっては、神様だろうが何だろうが、ぶん殴ってやろうかと思っっている。

さて、こんな事を言っても、皆さんには何が何やらって感じだろう。

とりあえず、俺がこの見知らぬ荒野に放り出された経緯について説明しよう。

とある冬の日。

俺はこの十八年間の人生で、初めて出来た好きな人に告白をした。矛盾するようだが、初めてと言っても、今まで好きになった人がいないってわけではない。

小学校の頃に、隣の席の元気でチャームिंगな女の子に興味を持った事もあれば、近所に住む大人な面倒見の良いお姉さんが気になった事もある。

要は自他共に認める奥手な自分が、初めて自分で告白するほど、好きになったという事だ。

まあ1週間後に控えたクリスマスと一緒に過ごしたいから、という理由でこの時期に告白したのだが、結果は…

「…「じめんなさい」

これである。

正直、泣いたね。

いやもう比喩とかじゃなくて、リアルに枕を濡らしました。

で、その告白の翌日。

俺は何とかいつもの様に学校に行き、少し落ち込みつつも、つつがなく授業を受けて下校をしたんだが…

その下校途中、俺はふと海に行つて叫びたい衝動に駆られて、近くにある港まで行つたのだ。

学校からも自宅からもさほど遠くない場所にある港には、冬という理由もあつてか、周りには他に人が見受けられなかった。

「ちょうどいいか。誰にも迷惑が掛からなくて済むしな…」

と呟き、俺は海の方を向いて港の淵に立ち、大きく息を吸い込むと…

「ばっかやろおおおおおー！ー！ー！」

と叫んだ。

ああ、青春時代…

これが青春か、甘酸っぱいどころかメチャクチャ苦いぜチクショウ！

とか思いつつも、叫んで若干スツキリした俺は、踵を返しこの場から去ろうとした。

しかし

ズルツ

「　　っ!？」

気持ちが悪くなる前に出るあまりか、俺は港の淵から爪先がはみ出る程の位置に立っていたのだが、それが悪かったのだらう。あるう事か、足を滑らせてしまったのである。

ドボオオン!

物凄い量の水しぶきをあげて、俺は冬の海に真っ逆さまに落ちていった。

あまりに突然の出来事と、真冬の冷たい海に浸かったせいか、俺の体はパニックになって全くと言っていいほど体が動かなかつた。徐々に強くなる水の圧力に、自分はなんの抵抗もできずに奈落へと吸い込まれてゆくのであった。

自分の人生は、これで終わるのか…

ただの一度も恋人が出来ることもなく、十八年という短い歲月しか生きられずに。

チクシヨウ…

こんなのってねえよ、チクシヨウ…

そんな悲観を抱きつつも、自分の意識は奈落へと落ちた。

とかがだ！

「…ん、んう………」

深い深い海の底へと落ちていった自分は、なぜか陸の上で目を覚ました。

「……………あれ？」

一瞬誰かに助けられたのかとも思ったが、そんな考えは目の前の景色に消し浚われた。

一面の荒野

どこを見回しても建物一つない。

はてさて、こんな広い土地が日本にあったかな？

とか考えつつ、自分は先ほどまでの事を思い出してみた

バツ！

慌てて自分の身体を触る。

これはホントに自分の身体なのか、自分は生きているのか、まさか透けていたりしないか、足はちゃんとしているか？

「いちおう生きてる…んだよな、どうなったんだ？」

そう呟きつつも、自分は辺りに誰か人はいないか、歩いて探してみることにしたのだ。

だいぶ長くなっただが、そういう事だ。

ふらふらと宛もなく彷徨った自分は、ただ闇雲に体力だけを消費し、今に至る。

いちおう昔から体力には自信があったのだが、昨日の失恋のショックにより全く食事を取っていなかったのが仇になったらしい！

全くもって間抜けな話である。

「はらへった…」

そうして俺が地面に倒れ込んでいると、何やら遠くの方から大きな馬車を引き連れた不思議な格好をした集団が近づいてきた。

「なんだあれ、見た事ない服装だな。やっぱりここって日本じゃないの?」

もしかして…

もしかしてだけどさあ…

まさかコレって、異世界トリップとかいうやつ?

おれ異世界来ちゃった?

いやいや、まっさかあー!

……

マシロ?

第1話（後書き）

一人称って書きやすいですね。

とりあえず、これからよろしくお願いします！

第2話

見た事もない格好をした、数名の男達がこちらに近づいてくる。

「なんだ、行き倒れか？」

「珍しい格好をしているな…」

などと言って、自分を値踏みする様な目で見ている。
すると男の1人が、馬車の方へ向かって呼び掛けた。

「ボス！行き倒れの男です。どうしますか？」

すると、馬車から如何にも裕福そうな、煌びやかな装飾品を沢山身に付けた肥満体質の髭男が出てきた。

どうでもいいが、そういえばこいつらの格好、ハ○ナプトラとかで見た砂漠の民みたいな格好してるな。

ターバンみたいなのしてるし。

……

ハ○ナプトラって、けっしてエロい隠語ではないからね？

とにかく、そんな格好なのよ。

で、そのボスとか言われた髭オヤジがこちらに近づいて来て、倒れてる俺の横で止まった。

俺は空腹と疲労、そして極度に喉が乾いているせいで、動くことも喋ることも億劫だった。

そんでもって、その髭オヤジは俺に手を伸ばして…

「！？」

何を考えてるのか、髭オヤジは俺の尻をギュツと掴んだのだ。そして、太もも、腕、肩と順に触れていく。

「なるほど、いい肉付きをしてるな。それに珍しい格好をしてやがる」

そしてうつ伏せで倒れてた俺を足で転がして、仰向けにした。

「怪我はしてないみたいだな。見たところ病気でもなさそうだ」

そう呟くと、髭オヤジは近くにいた男に指示をだした。

「おい、コイツを馬車に積み」

そして、俺は男達の手によって馬車の中に入れられた。

大きな馬車の荷台の中には、これまた大きな鉄格子の牢屋が2つあった。

牢屋の中には、手枷や足枷を付けられた人達が虚ろな表情で座っており、俺はその牢屋の一つに放り込まれた。

「お前も運がいいんだか悪いんだかな」

「行き倒れたうえに奴隷商に拾われちまうたあな」

そう言って、俺を牢屋に放り込んだ男達は離れて行った。

牢屋に放り込まれた俺はというと、未だに動けずに馬車の床に伏せている。

するとそんな俺の方に、手枷を付けた壮年の男性が、膝立ちで歩いて近付いて来た。

「おい君、大丈夫か？」

心配そうな目をして俺の顔を覗き込む男性に、俺は力を振り絞って答えた。

「み、みず……」

「水が欲しいのか？分かった、ちよつと待ってくれ」

男性はそう言うと、牢屋の奥の方へ行き、水の入った桶から、柄杓の様な物で水を掬って持って来てくれた。

「ほら、水だ」

そう言って差し出された柄杓を見ると、その中には若干濁った水が入っていた。

「……」

それはちよつと……

飲み水じゃないじゃん。

とか考えていると、男性は俺が”動けないので飲まない”と思ったのか、俺の首を器用に膝で持ち上げ、口に柄杓を宛がった。

「！？」

「慌てるな、ゆっくり飲むんだ」

いやいや

っていうかなんつーもん飲ませるんですか!？

こんなの飲んだらお腹壊すって!

せつかくの親切も空回りだよオジサン!

うげっ、けっこう飲んじゃったし

あ、でも喉は幾分かマシになったかな

「さっきのヤツらじゃないが、君も運が悪いな、奴隷商に拾われるなんて…」

そう言つて、空回り親切オジサンはそつと俺の頭を下ろしてくれた。

「どれい…しよう?」

さつきから飛びかつてる、この単語はなんだろうか…

奴隷シヨール?

危ないプレイか何かですか?

そんな事を考えていたら、空回り親切オジサン…空オジサンさんでいいや、が俺の疑問に答えてくれた。

「奴隷商というのは、貴族や金持ちの商人などに奴隷を売つて商売をするヤツらの事だ。ようは人身売買だな。俺達は、これから売られるんだ…」

「…え?」

どれいしようつて…

奴隷商?

人身売買つて…

俺つてば売り物になつちゃうの!?

ちよつ、ええっ!?

俺どんだけ運が無いんだよ!

好きな人にフラれて、海に落ちて、目覚めたら見知らぬ異世界の何も無い荒野で、拳げ句の果てに行き倒れたところを奴隷商に拾われるとか

…おれ今年厄年だっけ?

「この…馬車は、ど…こに向かつて…るんですか?」

水を多少飲んだとはいえ、未だに喉も身体も思い通りにいかない自分は、途切れ途切れに喋る。

「ヤツらのアジトだよ。これから俺達はそこで、奴隷としての作法を叩き込まれるんだ。俺達男はまだ良い方さ…。若い女の子達は、夜伽の仕方なんかも無理やり教え込まれるんだから…」

「そんな…」

俺はそこで初めて、自分が入っている方とは違う牢屋を見た。

男女で牢屋が分けられていたのだろう。あっちの牢屋には見たところ十〜三十歳位の女性、主に若い女の子達が沢山いた。

…ひでえ

人を売る商人達は、よく忘七とか言われてるけど、アイツら本当に血も涙ねえ…

俺は人身売買という、平和な日本にいた時は漫画やテレビなどでしか知らなかった事柄を初めて目の当たりにし、激しい怒りを覚えた。そして、それを目の前にして何も出来ない自分にも、怒りを覚えるのだった。

数時間後、馬車が停まり、先ほど自分を牢屋に放り込んだ男達が荷台に入ってきた。

「おい、着いたぞ。全員降りろ」

その言葉を聞くと、虚ろな表情をしていた人達が、皆一様に絶望の表情へと変わった。

だがしかし、誰一人抵抗する事なく次々と馬車から降りて行く。

俺がまだ動けずに倒れていると、男が1人此方へやって来て、俺を担いで馬車から降りた。

馬車の外の景色は、まさに壮観だった。

煉瓦みたいな物で舗装された綺麗な道。

その道の横には大きくて綺麗な豪邸が三々五々に散らばっている。そして何よりも凄いのが、映画や漫画でしか見た事のない、真っ白

で大きな西洋の城が遠くに聳え立っていたのだ。
見たところ、恐らく3キロ以上は離れているのだろうその城は、この距離から見ても結構な大きさだった。

「でけえ…」

そんな俺の呟きなど気にも止めず、男は俺を担いで何やら煌びやかな建物の中へと入って行く。

建物に入った俺達奴隷は、その後1人1人医者に検査を受け、地下にある牢屋へと入れられた。

「また牢屋かよ…」

牢屋に入るやいなや、商人は俺達に食事を与えた。

まあ食事と言っても、ボソボソのパンと水みたいなスープなのだが…

しかしそこで、俺にとって不可解な事が起きた。

「……………アリ？」

取りあえず食える時に食っておこう！

と思って差し出されたパンを食べたのだが、一口食べて飲み込むと先ほどまで殆ど動けないほどの状態だった身体が、急に軽くなったのだ。

「なんで？…ハッ、もしかしてこのパンって、特別なパンとか？」

いやいや、ないか
だってそれが証拠に、他の人達はさっきまでと何ら変わった様子はないし。

「ガフツガフツガフツ！」

とりあえず、味わうなんて事は無視し、食事を胃に流し込む。
このパンとスープ、正直言ってゲロマズいし…

「ゲフウー…、おつと失礼」

誰に言うでもなく、俺は口を押さえて言う。

「…さてと、ここはいつたいドコなんだ？」

床から立ち上がって周りをキョロキョロ見回してみる。
三方を壁に囲まれ、正面は出入り口のある格子がある。窓は無いみたいだ。

「牢屋に入るとか初めてだよ。まあ当然だけど…」

だってお兄さん人畜無害な一般ピーポーだもの。

あ、なんだろう。

不謹慎だけどちょっと新鮮。

俺は格子に近付き、その頑丈そうな鉄格子に触れようとしてみる。
周りの人達は俺の行動を訝しげに見ていたが、やはり見ているだけだった。

「おお、本当に鉄格子だ。牢屋だよ牢屋…」

いや、不謹慎なのは分かってるんだけどさ。色んな物に興味を持つお年頃なのよ。

「んー、顔は通らないかー。あつ、やっぱり抜けなくなった!！」

格子の間に顔が入らないかなー、とかぐりぐり入れていたら、途中で入った顔が抜けなくなってしまった。

「ぬぐぐぐぐう〜…」

俺は必見で顔を抜こうと、力を入れる。
すると…

ガキンッ!

「はっ?」

単純に言おう。
格子が外れた。

しかも、俺の顔が嵌ったままで…

「……………」

なんともシュールな光景だった。
顔に大きな鉄格子を付け、呆然と佇む俺。

「なっ…!?!?」

「て、鉄格子が!」

今まで虚ろな目で俺を見ていた人達が、驚愕の表情を浮かべる。
そりゃ驚くよね。
俺だってビックリなものさ。

「なんだ今の音は!」

「こつちから聞こえたぞ!」

鉄格子が外れる時にワリと大きな音がしたせいか、男達が此方へ
走って来る音が聞こえる

「こ、格子が外れてる!」

「貴様、何をした!」

「はい?」

ブォン!

後ろから声が聞こえたので振り返ると、当然格子も一緒に回るわけ
で、男達に当たりそうになった。

「うわっ、危ない！」

「貴様、脱走する気か!？」

格子を躲し、すかさず持っていた槍を構えてきた。

「その、顔が嵌っちゃって。この牢屋建て付け悪いんじゃないの？」

「何をワケの分からん事を！」

「いや、本当なんだってば」

「大人しく牢屋に戻れ！」

「んな事言われても…」

嵌ったままじゃ戻れないし。

ってというか格子が無いんだから、もう牢屋の意味なくね？

「ええい！早く牢屋に戻れ!!」

そう叫ぶと、男の1人が俺に向け槍を突いてきた。

「うわっ、アブナッ!!」

俺は身体を捻って槍を躲そうとするが、当然格子も一緒に回るわけ
で…

カキン!

槍は俺に当たる前に、格子に阻まれた。

「貴様つ、抵抗するか!！」

「おい、応援を呼べ!！」

あれ、なんか拙い展開になってきたぞ。

そんな事を考えていると、俺の前と後ろから、うじゃうじゃと槍やら剣やらを持った男達が出てきた。

「さあ大人しくしろ!！」

「……………はい」

俺はそう言って両手を挙げて、男達に降参の意を示した。

第3話

剣や槍を持った男達に囲まれ、降参してから数十分後。

俺はさつきより頑丈な牢屋に入れられ、直径六十センチ位の大きな鉄球に両手両足を鎖で繋がれていた。

まあ頑丈な牢屋と言っても、鉄格子がちょっと太くなっただけなのだが…

「なんでこう事態が悪い方にくかなあ…」

ども、絶対不幸美少年 有沢累ありさわるいです。

あれ、名前言うのって初めてだっけ？

まいつか、案内ページに乗ってるし。

なんの事かって？

俺も知らない。

閑話休題

とりあえず、俺は今言った様な状況にあるのだ。

ちなみに、顔に嵌ったままの格子はどうしたかと言うと。

顔を挟んでる二つの棒を掴んで両端に引っ張ったら、くにやっとならぶ曲がって取れました。

なにこれ、相当モロい格子だったんだね。

とか思ったら、それを見ていた男達に更に警戒されて、この扱いです。

しかしこの格好不便なのよね、鎖短いからロクに手足動かせないし。

あ、ちなみに牢屋の位置は、さっきまでの男性用のところから少し離れました。

俺の牢屋は女性用の牢屋の通路を挟んだ向かいにあります。

「ハア…」

つつい溜め息が零れる。

本当にもう、何でこんなコトなっちゃうのかねえ。

誰かに説明して欲しいよ。

そんなこんな考えていると、牢屋の前に槍を持った男とキラキラ肥満髭オヤジがやってきた。

「ボス、コイツがさっき言った、信じられない怪力のガキです」

「ほう、コイツが…」

そう言つて、髭を弄りながら俺を観察するキラキラ肥満髭オヤジ。

「おい小僧、年は幾つだ？」

「あ？十八だけど？」

「ほう、見た目より上だな…。武術の経験はあるか？」

「そんな事聞いてどうすんだよ」

「いいから答える！」

俺が不機嫌そうに言うと、槍を持った男が叫んだ。

「…剣道と空手」

まあいいか、減るもんじゃないし。

ちなみに、剣道は小学1年から中3までやっていて、小1から小6までは道場で。

中学からは、道場に通いつつ部活でもやっていた。

空手の方は、入った高校に剣道部がなかったたので、とりあえず武道系の部活がいいかなー、と思ってやってみた。

両方とも戦績は結構良い方だ。

閑話休題

俺が質問に答えると、キラキラ肥満髭オヤジ…（メンドイ、髭オヤ

ジでいいや）が、首を傾げる。

ウエツ、気持ちワル…

「ケンドー、カラテ…、聞いた事ない武術だな」

あれ？

そうなんだ？

まあどうでもいいか。

「ふむ…、小僧、ついて来い。おい、開けてやれ」

「はい」

すると、槍を持った男が牢屋の鍵を開けて近付いてきた。

「変な真似はするなよ？」

そう言うと、鉄球から鎖を外し、その間にもう一本鎖を繋げていく。両手の鎖を繋げ終わると、短かった鎖は一メートルくらいの長さになる。

まあ立ち上がるのに支障がなくなった感じだ。

髭オヤジと槍男に連れられてやって来た場所は、兵士の訓練場みたいな場所だった。

なぜ一目で分かったかった？

だってなんか敵ついニイチヤン達が剣やら槍やらで訓練してるんだもん。

ん？

よく見ると全員、ビー玉みたいなのが嵌った首輪してるぞ？
なんだろあれ？

「全員手を止める！」

俺が訓練場の人達をボーッと眺めていると、横で槍男が大きな声を出した。

言われた通り手を止め、訝しげな顔で一斉に此方を睨んでくる。

ひいっ！

ちょっと怖いんですけど！

「誰でもいい、この小僧と手合わせをしる」

そして急に、髭オヤジがそんな事をのたまいやがった。

ザワザワと騒がしくなる訓練場内。

しかし、名乗りを挙げる者は一人もいなかった。

「何だつまらん…。よし、この小僧に勝った者は特例として、奴隷身分からの解放を約束してやろう」

その言葉を聞き、より一層騒がしくなる訓練場内。先ほどとは違い、何人もの人間が手を挙げていた。

「俺だ！俺にやらせろ！」

「いや、俺だ！」

「俺にやらせればそんな小僧一瞬でぶっ殺してやるぜ！」

と、喧々囂々となる訓練場内。

「ふむ、誰にするか…」

と、満足げな顔で思案する髭オヤジ。

そして、訓練場内の一角を見て目を細めた。

「ディアス！此方へ来い」

瞬間、ピタリと静かになる男達。

全員がある一方へと注目した。

「おいジジイ。俺はいま手を挙げていなかったんだが？」

そして全員の注目するその男が、不機嫌そうに喋る。

ディアスと呼ばれた男、見た目は身長百八十くらいで、黒のタンクトップみたいな服に麻色のズボンを履いており、青色の髪を短く切り、元の世界でいうスポーツ狩りの様な髪型をしている。細いながらも筋肉はしっかりと付いており、その端正な顔立ちは誰が見てもイケメンと言うようなものだった。

「貴様！ボスに対してその言い草はなんだ！」

「よい。…ディアス、この私に何か不満でもあるのか？」

騒ぐ槍男を諫めると、髭オヤジは静かにそう言った。

「別に。ただ気乗りしねえだけさ」

「なるほど。ならばこうしよう。貴様が勝ったら、貴様の指定した奴隷を一人解放してやる」

ピクッ

ディアスと呼ばれた男が、僅かに反応した。

それを見て、髭オヤジはイヤらしい笑顔を浮かべる。

「さあどうする？貴様が嫌だと言うならこの権利、別の者に譲るが？」

「……分かった、受けよう。ただ、その小僧の命は保証しねえぞ」

「いいとも」

いやいや、良くないし！

あんた等なに勝手に人の生殺与奪を握ってるんですか!?

そんな俺の心の叫びなど露知らず、訓練場内の男達は俺とディアス
の間の道を避けて空間を作った。

そして、槍男は俺の手足に付いた鉄球の鎖を外すと武器が大量に置
いてある所を指差して言った。

「あの中から好きな武器をえらべ」

いやだから、俺の意見は聞いてくれないんですか？

「：俺、戦うなんて一言も言っていないんだけど？」

「ふむ、勝手にしろ。ただ、戦わなければ確実にディアスに殺され
るぞ？」

俺がそう言つと、髭オヤジは詰まらなそうな顔で、前を指差して答
えた。

髭オヤジの指差す方向を見ると、ディアスと呼ばれた男がいつの間
にか剣（西洋剣としか分からない）を構え、此方を睨んでいた。

「さあ、どうした。早く始めないか」

イヤらしい笑顔を浮かべ、俺達を催促する髭オヤジ。
そして次の瞬間

「フッ！」

ディアスと呼ばれた男が此方に駆け込み、俺目掛けてその剣を横に
一閃した。

「わわっ！」

慌ててしゃがみ、剣を躲す俺。

そしてフツと後ろを見ると、いつの間にか髭オヤジと槍男が離れて
いた。

はやっ！

ブオン！

「ちよっ、あんた危ないっつて！」

今度は縦に剣を振り下ろしてきたディアス。

俺は横に半歩踏み出し、剣を躲した。

「死にたくないのなら、お前も手を出してこい！」

そう言つて、俺の顔目掛けて突きを繰り出す。

「アブネッ！」

俺は突きを右に避けて躲すと、反射的に左足で回し蹴りを出して
いた。

「ツッ！！」

蹴りはディアスのわき腹に当たり、蹴られたディアスは一瞬よろめ
いた。

「ツク…、なんだ今の蹴りは。真横から飛んできたぞ」

ん？

真横から？

…もしかして

俺はとある事を考え、確認のため少し攻撃を試みる。

「シッ！」

「！？…グウッ」

思った通りだ。

俺がディアスに放ったのは、空手の中段突き。

膝を曲げ、腰を落として相手の腹部に真っ直ぐに拳を突き出す、空手では割とオーソドックスな突きだ。

ただ、他の格闘技からすれば珍しい形式で、知らない人からすれば空手の技は対処し辛いらしい。

それが、ここでも当てはまってみたいだ。

どうやらディアスは空手特有の蹴りに戸惑ったらしく、それである言葉が出てき様だ。

「またもや不思議な攻撃を…。小僧、キサマ何者だ」

「小僧じゃない。俺には有沢累っていう親から貰った名前があるんだ…よ！」

今度は上から打ち降ろす下段回し蹴りを放った。

「ッー」

しかしホントに面白いくらい当たるな。
いくら珍しい型の攻撃だからって、当たりすぎだろ。
それにそんなに強く当ててないのに凄いダメージだし。

「クソッ!」

「おっと」

躍起になって、剣を振るうディアス。

しかし躍起になっているとは言え、その剣筋は正確なものだった。
そう、正確ではあるのだが…

「ほっ、よっ」

「くっ、ちょこまかと!」

その剣はただの一撃も当たらないのだ。

…しかし、うゝんコレは…

「あのーもしかして、手加減してますか?」

「なにっ!?!」

「いやだって、遅いから…」

そう、ディアスの放つ剣撃は確かに正確無比なものだが、その速さはあからさまに手加減している様にしか見えないスピードなのだ。

「っ!……小僧お!」

その俺の言葉で怒ったのか、ディアスはもの凄い形相で俺を睨み付

けると、その場から一気に後ろへ跳んだ。
そして右腕を俺の方へ真っ直ぐと突き出して、なにやらブツブツと
言い始めた。

「我契約の名の下に汝が力を求めん、求めるは水球、我が敵を押し
潰す水球…」

すると、今まで嬉々として傍観をしていた他のヤツらが、ザワザワ
と騒ぎ始めた。

「ディアスのヤツ、契約魔法を使うつもりだ！」

「精霊魔法なんかとは威力が比べ物にならないぞ！」

「離れるっ、巻き込まれるぞー!!」

はい？

まほう？

…魔法！？

「…聖霊の力を持って、我が敵を打ち砕け！」

瞬間、俺の頭上に直径3メートル程の水球が現れた。

「あ、きれい…」

…じゃなくて！

やっぱーい！

何がヤバいか分からないけど、とにかくヤバい！

俺は本能的に危機を感じ、水球の下から逃げようとする。
が…

「遅いつ！」

ドンツ！！！！

直後、水球が俺目掛けて落下した。
水球が落下した瞬間、とても水が落下したとは思えない音が響いた。
そして落下した水球は…

「あれ？まぼろし？」

跡形も無く消えていた。

「なっ！？バカな！！」

右腕を此方に突き出したまま、驚愕の表情を浮かべ硬直するディアス。

「隙アリッ」

俺はその一瞬を好機と見て、地面を蹴り込み一気に駆け出す。

それに気付いたディアスは慌てて剣を振り上げ、俺に向かい振り下ろそうとするが…

「だから遅いんだって」

俺は左手でディアスの剣を持つ腕を取り、右手で腕のツボに指突を放つ。

「がつ…」

腕に電流が走った様な衝撃を受けたディアスは、手にしていた剣をつい落としてしまう。

「フッ」

そして、丸腰になったディアスを背負い投げの要領で投げ飛ばす。

ドサツ！

「グハツ！」

勢い良く背中から落ちたディアス。

そして先程まで、俺達の戦いを離れて傍観していた髭オヤジが出てきて、高らかに宣言する。

「そこまで。この勝負、小僧の勝ちだ」

第4話

「ふざけるなっ、俺はまだ戦える!!」

俺に投げ飛ばされた後、すぐさま立ち上がり、髭オヤジに続闘を訴えかけるディアス。

その顔は必死のモノだった。

「ふん、見苦しいわディアス。下がれ」

「ジジイ！俺はまだ戦えるって言ってるんだろ！」

「奴隷風情が、この私を煩わせるな」

そう言い捨て、ディアスに背を向け帰ろうとする髭オヤジ。

「…っ！キサマア!!」

すると、ディアスは傍に落ちていた自分の剣を拾い、髭オヤジに襲いかかった。

しかし

「ぐあっ！」

髭オヤジの近くにいた部下達により、取り押さえられる。

数名の男達によって地面に押さえ付けられるディアス。

しかし、それでもなお足掻く。

「待ちやがれジジイ！！おい小僧お、今すぐ俺と戦え！俺はまだ戦えるっ、まだやれる！！」

取り押さえる男達を引き剥がし、髭オヤジに迫ろうとするが、更に強く押さえ付けられ、横っ面を地面に押し付けられる。

「ぐっ……」

「無様だなあディアス。そこまでしてあの小娘を助けたいか」

髭オヤジがディアスに近付き、立ったまま見下して言う。

「クソオオオオ！」

「そうかそうか、ならばキサマに1つ良いことを教えてやるっ」

そう言うつと髭オヤジはしゃがみ込み、ねっとりとした嫌な喋り方でディアスの耳元に囁く。

「あの女の調教は、三日後の夕刻からだ」
「っ！」

瞬間、ディアスの目が先程までよりも見開き、髭オヤジを見た。すると髭オヤジはその視線を躲すかのように立ち上がり、再びディアスを見下ろす。

「もちろん、何の調教かは言うまでもないだろう」
「アルネオ貴様あ！！」

更に必死の形相で叫ぶディアス。
それを見て髭オヤジは満足げな顔を見ると、卑俗な笑いを浮かべ、もう一言付け足すように言う。

「そうそう、あの女の調教だが、私も立ち会う事になってな。奴隷の身でありながらあの美貌、私も今から楽しみだ」

「あゝあゝ、ああアアアア！！！離せえ！！アルネオきさまあ、リーシャに指一本触れてみる、殺してやる！塵も残さず消し炭にしてやる！！」

「ふん、よく吠えるわ。おい、小僧に枷を」

「はい」

髭オヤジは最後にディアスを一瞥すると、近くの槍男に声を掛けた。槍男は返事をする、俺に近付き例の鉄球の鎖を取り付けていく。

「行くぞ小僧」

「…え？あ、ああ」

俺はディアスのあまりの狂乱ぶりに息を呑み、しばし茫然としていた。

しかし槍男が後ろから槍をギラつかせて急かすので、半ば強制的にその場を後にした。

俺達が訓練場を離れてしばらくしても、訓練場からはディアスの叫び声が聞こえていた。

その後先程の牢屋に戻された俺は、槍男によって再び鎖を短いの
に付け替えられた。そして牢屋の外で満足げの笑みを浮かべる髭オ
ヤジ、アルネオが俺に言ってきた。

「これから小僧は普通の奴隷ではなく、奴隷剣闘士として育てよう」
「奴隷…けんとうし？」

なんだそれ。

なんか嫌な予感がするぞ。

「なんだそんな事も知らんのか。剣闘とは奴隷同士を戦わせ、観覧
や賭事を行う王族や貴族、大商人達の娯楽だ。奴隷剣闘士とは、そ
こで戦う奴隷のコトだ」

ああ、グラディエーターみたいなやつね。

うん、それで？

誰がなるって？

……

「は？俺が！？」

いやいや、ないって。

なんで急にこんな事になっちゃってるのさ！

勝っちゃったから？

勝っちゃったからなの？

何やってんだよ俺！

ちよつと誰かタイムマシン持って来てー！
過去の俺をぶつ飛ばして来るから！

「まあ本格的な訓練は明日からだ。それまでにこれからの身の振り方を考えるんだな」

そう言い残すと、アルネオは槍男と共に去って行った。

さて！

時間は進み、今は夜 外が見えないので時間的感覚で だが、
ここで一つ、とある問題が起きた。

まあ問題と言っても、危機的状況に陥るような問題でもないのだが…

いま俺の目の前には、美味しそうな食事が、トレーの上に並べられ、
床の上に置かれている。

これから有能な奴隷剣闘士として活躍してもらうため、栄養はしっかりと取ってもらわないと困る。との事なのだが…

「……………」

「後で食器取りにくるから、早く食っちゃえよ」

「あ、ちよつと」

俺は咄嗟に声を出し、食事を出しに来た男が帰ろうとするのを止めた。

「なんだ？」

面倒臭そうな顔で此方を振り向く男。

早く帰らせろ、と言外に言っているようだった。

いやいや、なんだ？じゃなくてさ…

「これじゃ食えないんだけど？」

俺はそう言っつて、鉄球に繋がれた自分の両手を見せる。

そう、早く食えとか言われても、これじゃ食えないって。

まあ手を動かさせないってコトはないけど、筋トレしながら飯を食うなんてメンドイ事はしたくない。

つてワケで

「外して」

「バカかお前は？外せるワケないだろ」

むかつ

ナニコイツ、メチャクチャカンジワルイ

「いやいや、いくらなんでもコレじゃ食えないじゃないですか」

必死ににこやかな顔を作っつて言う俺。

怒っつたら負けだよな。

「…チツ」

チツ、て！

チツて言つた今！

何よこいつ！

「いやホント、お願いしますって」

「…めんどくせえな。おい」

男は渋々といった感じで振り向くと、向かいの牢屋に声を掛けた。
牢屋の女性達が一斉に此方を向く。

「誰かこいつに飯を食わせてやれ」

あ、そういう手に出るのね。

っていうか、食わせる？

あーん、ってやつですか？

……

それもそれでイヤだなあ…

「あれって、もしかしてディアスさんを倒したっていう…」

「暴れて牢屋を壊したんですって」

「やだ、野蛮そうな顔してるわ」

「牢屋に入った瞬間食べられないかしら」

俺に飯を食わせると言われた女性達は、ヒソヒソと何やら話している。
まあヒソヒソ話してるつもりなんだろうが、聞こえてますよあなた。たがた。
っていつか最後のやつ、食わないって。

「私がやります」

すると1人の女性が立ち上がり、名乗り出た。

「ふん、お前か。いいだろう、出る」

男は偉そうに言うと、向かいの牢屋を開けてその女性を通した。そうして通路に出てきた女性を見ると、その女性が真っ直ぐに此方を見据えているのが窺えた。

「あ、どうも」

「……」

俺はその女性に、首だけ下げて軽く挨拶をする。
しかし綺麗な人だな。

女性は青い綺麗な長い髪をかき上げると、ふんつと鼻を鳴らしてヒタヒタと此方の牢屋に近づいて来た。

なんかプライドの高そうな感じの人だな。

よくこんな人が俺に『はい、あーん』なんてする気になったもんだ。

あ、もしかしてツンデレとか？

『別にあんたのために食べさせてるんじゃないからね！』とか、
ほら、冷ましてあげるから早く食べなさいよ』とか言ったり？

はい、そんなワケないですね。

すいません。イタい子ですいません。

だからそんな蔑んだ様な目で俺を見ないで下さい…

つて、なんでそんな目してるの？

およ？もしかして心の声が漏れてた？

「……」

無言のまま、男が俺のいる牢屋を開けるのを待ち、ひたすら俺を見つめてくる女性。

しよ、正直気まずい…

「ほら、入れ」

女性は男に促され、牢屋に入ってきた。

そして男は牢屋を閉めると、また後で来ると言い残しそそくさと行ってしまう。

「私は…」

すると、先程まで沈黙を決め込んでいた女性が口を開いた。

「私はディアス・ハーネスの妹、リーシャ・ハーネス。私は、貴方

を許しません」

第4話（後書き）

メインで書いてる『神々の唄』より、暇潰しに書いてるこっちの方がアクセス数が高い…

第5話（前書き）

今回つじつま合わせ？のお話です。
説明が多いので、あしからず。

第5話

カチャカチャ

食器のぶつかり合う無機質な音が牢屋の中に響く。

「どござ」

「あ、はい…」

俺の口へと、淡々と食べ物が運ばれる。

肉、パン、スープ、野菜と、順番も気遣ってくれたりしている。

「モグモグ…、んぐっ」

「……………」

先程から俺にご飯を食べさせてくれているこの女性。名前はリーシヤ・ハーネス、この場所に来て早々、俺が戦わせられた男性、デイアス・ハーネスの妹だそうだ。

綺麗な青髪と青い瞳で、見たところ年は二十歳くらいだろうか。すつきりとした目鼻立ちをしており、誰が見ても美しいと言える様な容姿をしている。

さて、なぜ俺がこんな女性にご飯を食べさせて貰っているのかと言うと…

簡単に説明すると、両手に重い鉄球を付けられたままでは食事をし辛いので、牢屋番の男がこの女性に食べさせるよう命令したのだ。

まあ男はその作業すらも面倒臭そうだったが…

で、今こうしているワケである。

しかし、気まずい…

このリーシャという女性。牢屋に入って名を名乗るやいなや、俺の事を許さない、と言いだしたのだ。

しかもその後は何を言うでもなく、ただ黙々と俺の口へ食事を運んでいる。

しかしまあ、恨まれても仕方ないか。

もしあそこでこの人のお兄さんが俺に勝っていたら、この人は奴隷から解放されていたんだから。

「本当は…」

すると、今まで淡々と動かしていた手を止め、リーシャさんが口を開いた。

「本当は、貴方を恨むなんて事が間違っているのは分かっているんです。でも…」

そこまで言うと、リーシャさんはキツと俺を睨み、芯の通った声で続きを喋り始めた。

「貴方のせいで兄は肋骨を骨折し、左足の骨にヒビが出来るという大怪我を負いました。これで兄は数ヶ月の間、剣闘士として戦う事が出来なくなりました。今まで兄はこの街一番の奴隷剣闘士という事で、奴隷主であるアルネオに優遇されていたんです。しかし、ア

ルネオにとって兄は商品。戦えなくなった商品には、もう用はありません。下手をすれば、兄は……」

初めは凜とした態度で喋っていたが、段々と弱々しくなっていくリ
ーシャさんの声。

最後には目が潤んでできてしまった。

ちよっ、リーシャさん泣きそうだよ！
どうしよう！

「すみません。こんな事、貴方に言ってもしょうがないですよね。
貴方だって、アルネオに命令されて戦っただけなのに……」

ぐっと目尻を手首で拭い、謝ってきたリーシャさん。
こんな時、俺はどうすれば良いのだろう。

大丈夫ですよ、なんて根拠も無い事は言えない。

「……」
「すみません、続きをどうぞ」

そう言って、再び手を動かし始めるリーシャさん。
俺は結局、彼女がこの牢屋を出るまで、何も言うことが出来なかつた。

誰もが寝静まった、その日の夜。
俺の牢屋に、1人？の珍入者が現れた。

「やあ、有沢累くんだね。やっと見つけたと思ったたら、キミなかなか面白い所にいるね」

「……だれ？」

他の牢屋の人達もみんな寝たので、俺もそろそろ寝よつかなー、と思つて横になつた瞬間、急に後ろから「あ、いたいた！」という声が聞こえてきたのだ。

ビックリして声の方を振り返ってみると、そこには、ワンピースを着た金髪の女の子が立っていた。
見たところ十四歳くらいだろうか、クリクリした大きな目をしており、その瞳はルビーの様な綺麗な赤だ。

まあ要約すれば、美少女だ。
とんでもない美少女が、いま俺の目の前にいる。

「え？やだもう美少女だなんてえ〜。ほめても何も出ないぞ〜」

あれ、俺いま喋つたっけ？

もしかして心の声だだ漏れ？

無意識に口に出しちゃつた？

「へ？あ、違う違う。ゴメンね、勝手に心を読んじゃった」

そう言うと、美少女はペロツと舌を出して、頭をコツンと叩いた。

なにこの仕草、キュンキュンくるんだけど。

ツと、それは今は置いて…

「心を…読む？君はいつたい…？」

俺は先程の美少女の発言が気になり、そう呟いた。

すると、美少女はスカートの裾をクイツと両手で摘み、お姫様の様なお辞儀をして

「初めまして、有沢累くん。ワタシはキミの世界を管理する神の1柱、名前は…そうだね、イオって呼んで」

と名乗った。

「…は？カミ？」

「そ、神さま」

そう言うと、美少女イオは俺に近付き、スツと額に手を触れてきた。

「実はキミを元の世界に連れ戻しに来ただけど…、ちょっと遅かったみたいね」

ハア、とため息を吐き、残念そうな顔をするイオ。

なんかそんな顔も可愛いな…

いやいやっ、じゃなくて！！
神様って！

あの神様！？

本当に？

連れ戻しに来たって…

え、じゃあ帰れるの！？

あ、でも遅かったって言うってた。何が？

「その質問には順番に答えていくから、ちょっと待って」

そう言うと、イオは俺から手を離し、俺の前に座った。

あれ、そこ椅子ないけど？

空気椅子？

「まず、ワタシが本当に神様かどうかだけど、本当だよ。証明しろって言われたらちよっと難しいけど…。とにかく、ワタシは八百万の神の1柱なの。でもまあ、下っ端も下っ端なんだけど」

「はあ、八百万の神様ねえ。じゃあ日本の神様なんだ。…ん？ ならなんで金髪なの？」

「そこは…ほら、なんて言うか…、神様だってお洒落したいじゃない？ チカラを使って、ちよいちよーいって自分好みのルックスにさ」

ああ、なるほど。

ミィハーだな、神よ。

っていうか詐欺だろ、これ。

「詐欺じゃないよっ。変えたって言うても、ベースは変えてないも

んっ

「ふーん、まあどうでもいいや」

「…キミ、女の子にモテないでしょ？」

「は？なにそれ」

なんで知ってるの？

「はいはい、次の質問いくよー」

「いやいや、今の気になるんだけど。もしかして、俺がモテない理由とか知ってるの？」

「自分の胸に手を当てて聞いてみなさいな。…さて、次の質問だけど」

イオは俺の言葉をバツサリ切り捨てると、話を次に移した。

「そつだ、俺を連れ戻しに来たって。俺帰れるの？」

「それがねえ、出来なくなっちゃったの」

「は？ なんで？」

なぜにホワイ？

「キミがこの世界と契約しちゃったから」

「契約？なにそれ、した覚えないけど」

「それがしっちゃったの。まあキミは無意識だらうけど…」

うん、知らないもん。

「キミ、最初この世界に来た時、凄く体がダルくなかった？そんなに動いてないのにすぐ疲れちゃったりとか」

「ああ、うん。でもあれは何も食べてなかったせいで、体力が無く

なつてたと思つただけど？」

そう、失恋のショックだね。

「それが違うの。キミは元々この世界の住民じゃないから、だから、キミの魂自体がこの世界から反発を受けて、その影響で体が弱つてたの」

「へえー、そうなんだ。じゃあなんで今は元気なの？」

「だから、それがこの世界と契約したからなの。キミ、この世界に来て初めて食事をとつた瞬間、何か違和感を感じなかった？」

そういえば…、あつたな。

パンを一口食べた瞬間、やたら元気になった。

「うん」

「キミがこの世界の物を体内に入れて、それを受け入れた瞬間、キミはこの世界で生きていくという契約をってしまったの。だから、元の世界には帰れないってワケ」

「……クーリングオフを」

「出来るワケないでしょ」

なあああにいいいい！？

じゃあ俺はこれから一生この世界で暮らしていかないとならんのか！
冗談じゃない！

帰して！おうちに帰してえ！

つて、あれ？

そういえば…

「ねえねえ」

「しかしキミの心は起伏が激しいねえ…。ん、なに？」

「って、また人の心を勝手に読んでたんかい。じゃなくて」

「この世界の物を体内に入れたら、って言うってたけど。俺その前にたしか水を飲んだんだけど？　なんであの時は何も起きなかったん？」

「さつきも言ったでしょ。体内に入れて、それを受け入れたらって。さつきキミの記憶を見たけど、キミの水は飲み水じゃないとか贅沢なコトほざいてたじゃない。そのせいよ」

ほざいて、って…

なるほど、だからか。

しかし…

「ねえ、ホントに俺帰れないの？」

「うーん、残念ながら。たぶん最高神の力でも無理だと思う」

うっそーん。

「まあなんとかなるって。幸いキミは、この世界と契約した時に特殊な能力を貰ったみたいだし」

「は？　能力？」

「そ、能力。あ、ちなみにこれ、便利だと思って作っておいた。能力説明書」

そう言つて、イオはポントと掌にB4サイズの紙を取り出し、俺に差し出してきた。

いまだっつから出した？

俺はイオから差し出された、その能力説明書を読んでみた。

有沢累の能力説明書

能力は、用法・容量を守って正しくお使い下さい。

身体強化

- ・効果 自身の身体能力の強化
- ・制約 無し
- ・常時発動

分解

- ・効果 物質を元素レベルで分解出来る
- ・制約 触ったモノだけ
- ・分解したものは元に戻せない（能力、還元以外では）

還元

- ・効果 物質を元あった状態に戻せる
- ・制約 死滅した生物は戻せない
- ・死んでいなければ、死ぬ寸前から元気な状態に戻す事も可

魔法無効化

- ・効果 自身に影響を及ぼす全ての魔法を無効化する
- ・制約 自身も魔法を使えなくなる

能力お問い合わせセンター
01201#\$-&:*¥

…おい

薬の取り扱い説明書かよ。
ってゆうか最後のなんだ。

「ってなワケで、それちゃんと読んでおいてね。…あ、ワタシそろそろ行かないと！」

「え？元の世界で仕事とか？」

「ん〜ん、そろそろ好きなドラマの放送時間だから」

さいですか。

この現代っ娘神様め！！

「ゴメンねえ、明日の夜にまた来るから。それまで死なないでね〜」

なんて縁起の悪い事を言いながら、何やら光の中に消えて行くイオ。

っていうか牢屋の中に置き去りとか、貴様それでも神様か！

とか心の中でツツコミを入れつつ、今日1日だけで本当に色々な事があつて疲れた俺は、その後すぐに横になって寝たのだった。

第5話（後書き）

イオの本名ですが、そのうち出てきます。
ちなみにヒロインの1人にしようかなー、とか考えてたり。
未定ですが…

第6話(前書き)

今回はちょっと退屈かも…

第6話

俺の目の前に、現代っ娘ミィーハー神様イオがやって来た次の日の朝。俺は牢屋の床の寝心地が悪いせいと、両手両足に鎖を付けて寝づらかったせいで、ワリと早く目覚めていた。

「ふゝむ、分解と還元ねえ…。なんつー化学的な能力なんだ」

そして今は、特にやる事がないので昨日貰った能力説明書を読んでいた。

つていうか、これ電話したら出てくれるのかな？

まあ携帯は海に落ちた時に壊れたみたいだけど。

「原理は分かったけど、どうやって使うんだ？ 触って念じればいいのかな？」

俺は何か適当な物がないかと思案し探していると、ふと鉄球が目に入ってきた。

「物は試しだ…」

そういえば、鉄球って何の元素が合わさって出来てるんだろ？ 知ってなくても出来るのかな？

とか考えながらも、俺は右手側の鉄球に触れ、ぶんかいゝ、と頭の中で念じた。

が、鉄球には何の変化もなし。黒々としたまん丸さんがそこにある。

「あれ？ 何も起きない。なんだよー……って、うわっ!？」

何も無いじゃん、とか思ってた右手を持ち上げた瞬間、鎖に繋がっていた鉄球がポロっと崩れたのだ。
そして粉状の物が辺りに散らばった。

「これって…、成功したのか？」

俺は先に何も無くなった鎖をブラブラしながら、粉状の物が散らばる床を、茫然と眺める。

「すっげー、ホントに分解したよ。俺ってば能力者になっちゃった」

そして、再び説明書に目を落とす。

「えーっと、元に戻すには還元を使えばいいんだよな」

いちおう元に戻さないと、誰か来た時に怪しまれるしな。

そして、俺は粉状の物が散らばった辺りに手を翳し、元に戻るよう念じた。

「還元…。うおっ、すげー！　っていうか重っ」

すると今度は、何も無かった鎖の先に鉄球が復活した。

急に戻ったズシツとした感触に、つい声をあげる。

むむむ…

凄いなこの能力。

考えようによっては色んな事に応用出来るぞ。

異世界補正さままだな。

そういえば、この前の戦いするとき、ディアスさんの魔法が効かなかったのは、魔法無効化のおかげだったのか。
ますますチートだな。

とりあえず、俺は自身の能力を把握するために、牢屋中で色々な物を分解したり還元していた。

そこで分かったのが、どうやらこの分解という能力、自分の体が触れていれば、手だろうが足だろうが尻だろうが構わないらしい。

そして、分解するには触っていないといけないが、還元するには触る必要はないみたいだ。

そんなこんなとやっているうちに結構な時間がたち、牢屋番の男が朝飯を持って来た。

男は料理の乗ったトレイを床に置くと、向かい側の牢屋を開けて、昨晚と同じようにリーシャさん呼び出した。

「…おはようございます」

「あ、おはようございます」

昨日のように睨まれる事はなかったが、うつむき加減で元気の無い挨拶をしてきたリーシャさん。

「さっさと食っちまえよ。食い終わったら訓練場に来てもらっからな」

そう言って、牢屋番は早々に去って行った。

「…今日から訓練なんですね」

リーシャさんがパンを食べやすい大きさに千切りながらそう言ってきた。

「よく分かんないですけど、多分」

…そういえば。

俺はふと気になった事があり、リーシャさんに聞いてみる事にした。

「あの、ちょっと聞いていいですか？」

「…何でしょう？」

「貴方や他の人が首に着けてるそれって何ですか？」

そう、ずっと気になっていたのだ。

奴隷の人達全員が首に巻いている、ビー玉みたいな物が付いた首輪。たぶん奴隷とそうでない人を分けるための物なのだろうが、他に何か意味があるのだろうか。

「これは、私たち奴隷を縛る枷です。コレがある限り、私達は逃げる事が出来ません。もし奴隷主から逃げたり、反抗しようものなら、魔石が反応して、首から上が吹き飛びます」
「そんな…」

俺はリーシャさんの首に着いたソレを見る。

「多分あなたも、今日あたりに…」

「そか…」

沈黙の時間がしばし続き、リーシャさんは気づいた様に手を動かし始める。

その後は、お互い何も話すこと無く黙々と食事を終えた。

それから数十分後。

食事を終えた俺は、迎えに来た牢屋番によって訓練場に案内され、リーシャさんの方はまた牢屋の中へ戻って行った。

そして訓練場に着いた…

のだが。そこには、昨日のように訓練している人達の姿が無かった。代わりに、奴隷主のアルネオと槍男、さつき知ったが、槍男はアルネオの側近らしい。そして、何だか白と銀色の混じった高そうな服と帽子を着けた、眼鏡の兄ちゃんがいた。眼鏡の兄ちゃんは、何だか薄らと優しそうな笑いを浮かべており、何か腹の中に色んな事を秘めていそうな感じだ。

…なんていうか、ハラグロそう。

しかしこの人、なんかどっかのゲームで見た、神官みたいな格好だな。杖も持ってるし。

まあキラキラ加減は違うけど。

この兄ちゃん自分で眩しくないのかな？

なんて考えていると、眼鏡の兄ちゃんが俺に近付いて来た。その手にはあの首輪が握られていた。

そしてアルネオが口を開く。

「今日から小僧は、正式にウチの奴隷剣闘士となる。だがその前に、手続きをしておかねばな」

そして、眼鏡の兄ちゃんが俺の首に手を伸ばす。

俺は反射的にその手を躲そうとするが、眼鏡の兄ちゃんが俺に釘を刺す。

「抵抗はするなよ。俺の魔法で傀儡にされたくなければ、大人しくするんだな」

「……」

俺はその言葉のあまりの冷たさに、一瞬自分の心が凍ったような錯覚を覚えた。

俺が抵抗の動きを示さないのを確認すると、眼鏡の男　兄ちゃん
ってレベルじゃねえ　は、ニツコリと笑顔を浮かべながら、俺に
首輪を着ける。

はっ！

いま気付いたけど、おれ魔法効かないじゃん！

…うっかりミス

あれ？

ってコトはもしかして、この首輪も？

俺に首輪を着け終わった眼鏡の男は、首輪の魔石に手を翳し、何やらブツブツと唱え始めた。

「契約と戒めの精霊ヴァーユよ、汝が力をもって、この者に戒めを
与えよ」

すると、首輪に着いた魔石がパァーっとひかり…

パリンッ！

割れた。

「なに！？」

「あ…、やっぱりね」

予想通り、魔法は失敗したみたいです。

「貴様つ、何をした！」

眼鏡の男が叫び、槍男が矛先を俺に向けてきた。

「いや、あの一、どうも俺魔法が効かない体质みたいでして」

「「「っ！？」「」」

あ、驚いてる驚いてる。

槍男とか槍落としてるし。最早ただの男だよ。

そして何やらヒソヒソ話し合う三人。

あー、俺どうなるんだろ？

拘束しようにも魔法は効かないし、枷とか付けられてもその気にな
れば引き千切れるし。

しかし奴隷じゃなくなったところで、行く宛もないんだよな…。

元の世界でいう、生活難で刑務所に入りたがる人の気持ちがあると

なく分かるわ。

「おい小僧」

すると、三人での話し合いが終わったのか、アルネオが話し掛けた。
きた。

「小僧じゃない。俺の名前は有沢累だ」

「アリアシャー・ルイ？ 変わった名前だな」

「アリアシャーじゃなくてっ、ありさわるい！ 何だそのやっっちゃった感のある名前は！ 有沢が性で、累が名前だ！」

何となく予想はしてたけどね！

っていうか、変なところで外人っぽいな。

異世界翻訳機能も万能ではないらしい。

「名前が後にくるのか、容姿といい名前といい、キサマこの大陸の生まれではないな？」

「まあな」

大陸どころか世界違うけどね。

「ふむ…」

そして再び思案するアルネオ。

今度は他のヤツらと話さずに、1人で考えている。

「ディアスを倒したあの實力、魔法無効というレアスキル、そして

「この容姿……。おい小僧」

「だからっ、…はあ、もういいや。で、あんだよ?」

「奴隷ではなく、普通の剣闘士として雇われるつもりはないか?」

「え?」

雇う? 俺を?

なるほど、そうきたか。

奴隷として縛りつける事も、力で抑えつける事も、ましてや誰かを人質にして言う事を聞かせる事も出来ない俺を、どうやって軍門に下させるか。

金、もしくはそれに見合うモノをチラつかせるのが一番だからな。しかし…

「うーん、今すぐ答えなきゃダメ?」

「今すぐだ」

……どじりどじり

どうする…!

オレ…!!

第6話（後書き）

早く累を暴れさせたくてウズウズしてます。
次回か次次回に期待して下さい！

もともと期待してない？
イヤン！

第7話（前書き）

累、決意する！

第7話

「明日同じ時間にまた来る。それまでに必ず決めておけ」

俺を牢屋に入れた後、槍男はそう言い残すと、この場から去って行った。

さて、訓練場でアルネオに選択を迫られた俺が、どんな答えを返したかと言つと…

『あのー、やっぱ少しだけ時間くれないっすか？　せめて明日まで』

……。

チキンと罵るがいいさ。

ええ、それに優柔不断ですとも。

いや、別に決めるのが怖いとか、そういう理由じゃないからね？
ちよつと相談したい方がいたんです。あの現代っ娘ミーハー神様に
ね。

あんなんでも一応神様だから、相談ぐらいには乗ってくれるかな
ー、とか考えてたり。

それに日本の神様だからね、同じ日本人（？）の方が相談しやすい

し。

…見た目は日本人離れしてるけど。

とにかく！

俺は、昨日また来ると言ったイオを信じて、夜になるのを待つことにした。

まあ夜まで待つと言っても、それまでに結構時間はあるワケで。晩飯を挟む事になるワケで…

「どうぞ…」

「あぐ、んぐんぐ…、ゴクン」

俺は再びリーシャさんのお世話になっていた。

あ、ちなみに昼飯はありませんでした。

奴隷のクセに一日三食とか、贅沢言っな、というコトです。自分達は毎日贅沢三昧なクセして、よく言っよねまったく。

「もっきゅもっきゅ…」

しかし気のせいかな、このパン昨日より固いな。それでも最初のあれよりマシだけどね。

「あの…」

俺が一生懸命固いパンを咀嚼していると、リーシャさんが恐る恐る話し掛けてきた。

「着けられなかつたんですね。首輪……」

「え？ ああ、ちよつと色々あつて……」

「……すみません」

「何がです？」

「さっきの言い方です。まるで、貴方が首輪を着けられる事を、私が望んでるみたいで」

「あ、ああ。別に気にしてないですよ」

「……」

そして黙りこくつてしまつたリーシャさん。

えーとえーと、他に何か話題を！

「……累でいいですよ」

「え？」

「貴方とか呼ばれるの、なんかムズかゆいんで。だから累でいいです」

「……？」

先ほどとは違う沈黙。

ポカーンとした顔になるリーシャさん。

キョトンとした目が、俺を見つめる。

「……っ！」

その顔に見つめられて、一瞬ドキリとしてしまった。

なんて言うか、今まで綺麗な人だとは思ってたけど、この顔は…

「可愛い…」

「っ!？」

やっべ!

つい心の声が漏れてしまった。

ああああ…

なんかリーシャさん真っ赤になって俯いちゃってるし。

それさえも可愛い…じゃなくて、落ち着けオレ!!

俺がワタワタと慌てていると、まだ若干顔を赤くしたリーシャさんが顔を上げた。

「あの…」

「は、はい!」

「私も、リーシャでいいです。あな…ルイさんも、私の事を貴方と呼んでましたよね? ですから」

「はいっ、わきやりましちや」

…噛んだ。

ああもう! 落ち着け!!

「え、えーと、あああああの、そのっ」

「…プツ、クスクス…」

「…え?」

笑った?

「っ、ごめんなさい。その、ルイさんが、あまりにも慌てるもので

すから」

「あ、あうえ、えと、申しわけない」

「クスクス…いえ」

そう言いながら、目尻を拭うリーシャさん。

涙が出るほどおかしかったの!?

でも…

「えと、その…、そっちの方がいいですよ」

「え?」

「こんな言い方もあれですけど…、リーシャさん、ずっと怖い顔してましたから。やっぱり貴方みたいな人は、笑顔の方がいいですよ」

「……」

「その…、こんな状況で、笑顔でいろって言うのも、無理な話しかと、思いますが…」

ああもう、何を言ってるんだろう俺は。

でも、自然と口が開いてしまうのだ。言葉を紡いでしまうのだ。

何となく、この人には笑顔が一番似合うと思ったから。

「あの…そんなに、怖い顔をしてましたか?」

「ええ、そりゃもう。こんな風に眉間にシワ寄せて」

俺はそう言って、自分の眉間を人差し指で抑えて、悪戯っぽく言うてみた。

「…失礼な人ですね」

そっぽを向いてしまった。

しかし、それでも本気で怒ってる様子は無く、プイツと拗ねた様이었다。

か、可愛い。

えと、話題を…

「あの、それから」

「はい？」

あ、振り向いてくれた。

「敬語も使わなくていいですよ。リーシャさん、俺より年上でしょ
う？」

「まあ、女の子に対して年の話しですか？」

「す、スイマセン（汗）。でも、十八の若僧に敬語なんて必要ない
ですから」

「……………」

あれ？

どうしたんだろう。

急にリーシャさんの顔が固まったぞ？

「…ルイさん？」

「は、はい」

気のせいかな、リーシャさんの声のトーンがやたらと低いよつな。

「いま、幾つって言いました？」

ひい！

なんですかその顔！

メチャメチャ怖いんですけど！

ほ、ほらっ。笑顔でいましょって言ったばかりじゃないですか！

「貴方は、私の事を、幾つだと思ってたんですか？」

「えと…、え？」

な、何をお怒りであらせられますのでしょうか？

「ワタシノコトヲ、イクツダト、オモツタンデスカ？」

「その、二十一・二歳かと…」

ピキッ

ん？ 何の音？

「ワタシは…」

わなわなと震えながら声を絞り出すリーシャさん。

…あ、今更きづきました。

でも、遅いよね？

「じゅうはちです…！…！」

「ごめんなさー…！」

その日、俺は生まれて初めて宙を舞いました。

その後俺は、何とかしてリーシャさんの機嫌を直そうとし、リーシャさんは怒りながらも俺の口に飯を運んで いつの間にか食事を終えた。

そして、目的の夜がきた。

「こんばん…ゴメンナサイ」

とりあえず軽く挨拶を、と思ってこんばんはと言おうとしたのだが、会って早々なぜか機嫌の悪いイオに、俺はつい謝った。
なんか凄くムスツとしてるんだもん。

「なんで謝るの？」

「いや、機嫌の悪そうな女性を見るとつい…。っていつか何かあった？」

「そうなの！ ちょっと聞いてよ！」

「な、何だなんだ？」

急に身を乗り出して、喚きだしたイオ。

「昨日あのと天界に帰ったらさっ、上司に『なんでこんなに早く帰って来てるんだ！ ドラマなんて見てないで仕事しろ！』って言われてさ！」

いや、その通りだよな。
仕事しろよ。

「そういえば、イオが好きって言ってたそのドラマってなに？ 天界でしかやってないやつとか？」

ちよつと気になってたんだよね。

天界ってどんな番組流れてるんだろー、とか。

「ん〜ん、下界でもやってるよ。狂気的な彼氏ってやつ」

え？

それってもしかして、彼氏がひたすら彼女にドメスティックでヴァイオレンスな事をする、あのクソドラマですか？

「クソドラマじゃない！ 確かに物語はアレだけど、主人公は最高じゃん！」

「主人公って…、あのDV男の事？ アレのどこがいいのさ」

「全然DVなんかじゃないし〜、あれくらい強気の方が男は良いんです〜」

「…イオって、もしかしてDM？」

「違うよっ、失礼な！ でもさ、私もあんな風にビシバシやっても

らったり、叱って欲しいな〜とか思うんだよねえ…ハアハア」

…ああ、ドMじゃなかったか。

ド変態でしたか。

現代っ娘でミーハーでド変態な神様が…

口クでもねえな。

「…キミ、本当に失礼な事考えるよね」

「人間いつでも腹の中は混沌としてるんだよ。人の心をそうポンポン覗くな」

「あ、そうゆう事言うんだ。私帰ろっかな。せつかく良いモノあげようと思ったのに」

「え、なになに良いモノって？」

ゴメンナサイ、スイマセン、調子に乗ってました、許して下さい。

「手のひら返すの早っ！」

「ふっ、男とは時に下げたくない頭を下げるものだ」

「…まあその台詞は分かるけど、キミのは違うよね」

「そんな事より、良いモノってなに？」

俺は目をキラキラとさせながら聞いた。

「うっ…。ああ、ちょっと待ってて」

そう言って、肩に下げたポーチをゴソゴソするイオ。

そして、綺麗な彫刻が施された、白金色の指輪を取り出した。

「はい、コレ」

「ん？ 指輪？」

「ただの指輪じゃないよ。コレは千刃の指輪と言って、高位神が作った伝説級の武器なんだから」

「武器？ これが？」

俺の掌に乗せられた指輪を見つめる。

単なる指輪にしか見えないけど？

「ふっふーん。ちょっとはめてみ？」

「…？」

とりあえず、右手の人差し指にはめてみる。

「…で？」

何も起きないよ？

「指輪に念じてみて。剣になれと」

「は？」

「いいからっ、念じるの！」

「…？」

えらく不親切な説明だな。

とりあえず、剣になるよう念じればいいんだな。

……なんの剣？

「キミが知ってる剣でも刀でもなんでもいいから」

「…じゃあ」

俺は頭の中に、シンプルな日本刀をイメージし、それを指輪に念じた。
すると

「うおっ!？」

いつの間にか俺の右手にイメージ通りの日本刀が握られており、代わりに指輪が無くなっていた。

「え、これってもしかして…!」

「そう、その千刃の指輪はね、持ち主の空想した武器を具現化するアイテムなの」

「……まじで?」

「マジマジ」

うおおおおお!

すげえ! なんじゃそりゃ!

夢のアイテムじゃん!

中二病男子のロマンじゃないっすか!

「ふふっ、喜んでくれたみたいだね。苦労して手に入れた甲斐あるよ」

「え、もともと持ってたんじゃないの? どうして?」

「いや、異世界に飛ばされたうえに帰れなくなっちゃったキミに、せめてもの救いを思っただけね。本当は新しい能力を付与してやれっ
て言われたんだけど、ワタシその方法知らなくてさあ、だから代わりにそれをね」

「ふーん。まあ能力は今の十分だったから、コレは普通に嬉しい

よ

「そ、そう？ 喜んでくれて良かったよ」

「うん、ありがと」

そう礼を言っつて、イオの頭をポンポンと叩く俺。

「コレっつて、元に戻す時はどうすればいいの？」

「ああ、元の指輪をイメージすれば戻るよ。ちなみに、別の武器をイメージするとその武器に変わるから」

俺は元の白金色の指輪をイメージし、戻るよう念じた。

すると、右手にあった日本刀は消え、人差し指に指輪が戻った。

「ほえー、すっげえー」

「むふふんっ、そうでしょそうでしょ。あ、いちおう説明書も渡しておくね」

あるんだ、説明書。

伝説のアイテムに説明書とか、なんかシユールだな。

俺は受け取った説明書を、取り敢えずズボンのポケットにしまう。

そして、今日イオに話したかった一番の本題を切り出す。

「…あのさ、イオ」

「ん、なに？」

「ちよっと、相談があるんだけど」

俺はイオに、今日訓練場で起こったコトを事細かに説明し、俺が選
択を迫られている事、それについて悩んでいる事を話した。

「 という訳でして。どうしよう? 」

「 どうしようって…、キミはどうしたいのさ 」

「 うーん…。アルネオに雇われるのは癩に触るし、雇われたとしても、他の奴隷の人達に目の敵にされそうだし 」

「 じゃあ断つたら? 」

「 いやでも、うーん…。衣食住は手に入れたいし、このまま奴隷っていうのも嫌なんだよね 」

「 …… だったら雇われればいいじゃない 」

「 だからー、アルネオに雇われるのも癩だし、他の 」

「 (イラッ) ああもうっ、面倒臭い男! ウジウジウジウジ悩んでないで、さっさと決めちゃいなさいよ! 」

うおっ、イオがキレた! ?

…… どうして?

「 どうして? 今どうしてって言った? 」

「 いやいや、言ってない。思っただけ 」

「 どっちでも同じよこのアンポンタン! 」

「 ええ! ? 」

理不尽!

そして何でそんなに怒ってるのさ。

「 キミがどっちつかずで、さっさと決めないからでしょうがっ 」

「 だ、だから俺は、どっちにしようか悩んでるからイオに相談してるんじゃない 」

「 相談? 相談ですって? キミのはただ、他人に自分の選択肢を委ねようとしてるだけじゃない 」

「 それは… 」

俺は反論しようとして口を開きかけるが、言葉が思い付かなかった。

「じゃあ聞くけど、もしワタシが奴隷のままではいなさって言ったから、キミはこの世界で死ぬまで奴隷でいるつもり？」

「ち、違っつ…」

「……………」

俺は反射的にそう反論した。

イオはそんな俺を、じつと無言で睨んでくる。

「……………」

するとイオはハァー…、と大きな溜め息を吐き、額に手を当てた。

「キミは…、キミにはその二つの選択肢しかないの？」

「え？」

イオが呆れた様な、否、呆れた声でそう言った。

『二つの選択肢しかないの？』

つまり…

「えと、自分で選択肢を作り出せ、…ってコト？」

俺は半ば自信なさげにそう聞いた。

ムスツとした顔をして腕組みをしながら、コクツと頷くイオ。

「確かに、キミはこの世界の事は右も左も分からない。でも、キミ

にはこの世界で自力で生きていけるだけの力がある、能力がある。もし何かに躓いたり、立ち止まりそうになったら、ワタシに相談すればいい。でも、自分が進む道を選ぶのはキミでしょ？ 道を作り出すのはキミでしょ？」

「……」

イオの言葉が、胸の奥深くに突き刺さった。頭をハンマーで殴られた様な衝撃が走る。

「……俺はこの世界に来て、この世界の理不尽さに触れて、物凄い苛立ちを感じたんだ」

「……」

半ば無意識に、なぜか唐突にそんな事を語り始めた俺。

しかし、イオはそんな俺の言葉を黙って聞いてくれている。

「でも、そんなこの世界の理不尽に苛立ちながら、それを目の前にして何も出来ない自分に、もっと強い苛立ちを感じたんだ。力があれば、この理不尽に立ち向かえる力があるばって。でも……」

そこまで言うと、俺は拳をギュツと握り、言葉に力を込めた。

「いざ力を手に入れても、何もしなかった。ただ流されるがままに自分さえ良ければって、そんな汚い事を考えてたんだ」

「……自分を守ろうと思うのは、人間の性さがだよ。だからああは言ったけど、キミの葛藤は人間として仕方のないものだ」

「でも、俺は……」

握っていた拳を緩め、目を瞑んで深く深呼吸をする。

そして頭の中をクリアにし、体中に自分の意識を張り巡らせる。

…大丈夫だ。

俺にはこの能力がある。

イオから貰ったこの指輪がある。
背中を押してくれる神様がいる。

そして、目を見開き、再び拳を、今度は決意を込めて強く握る。

「ありがとう、イオ。俺は決めた」

「そ、どうするの？」

フワリと微笑み、優しい声で聞いてくるイオ。

…ほんと、かなわないなあ。

俺は真っ直ぐにイオの目を見つめ、自らの決意を言霊にのせる。

「俺は、この世界の…」

この世界に来て、色々な人に出会った。

無償の優しさをくれた人、必死で生きようとする人、必死で家族を守ろうとする人、生きる事に絶望してしまった人。俺は、この人達を守りたい。

エゴだと言われてもいい。

俺は、あのアルネオの様な男から、不幸な人達を嘲り貶めるヤツらから、あの人達を守りたい。

だから…

「この世界の、救世主になる！」

第7話（後書き）

なんだか、書きたいを事つらつらと書いていたら、今までよりだいぶ長くなりました。

最後まで読んで下さってありがとうございます。

あ、この言い方だと最終回みたいですね…

まだまだ続きますので、異世界下克上物語を今後ともよろしく願います!!

第8話（前書き）

累、準備する！

第8話

「では、答えを聞かせてもらおうか」

ディアスさんとの戦いの日から二日。

つまり、俺がこの世界の救世主になる！ と、イオに向け決意表明した晩の翌日。

俺は再びアルネオに呼び出された。

現在俺がいるのは昨日の訓練場ではなく、書類やら机やらがたくさんある、執務室のような場所だった。

朝食を食べた後、早々に槍男が牢屋に迎えに来たのだ。

余談だが、リーシャさんは今朝も機嫌が悪く、朝食に付いていた芥子の様なものを大量にパンに付けて食わされました。

しかも笑顔で口に突っ込んできたため、拒否出来なかった。おかげでまだ口の中がヒリヒリする…

話は戻り。俺の目の前にはアルネオが居り、その後ろに槍男が控えている。

そして神官みたいな魔法使いみたいな格好のメガネの男が、部屋の端のソファで優雅に茶を飲んでいる。

んで、アルネオに昨日の答えを聞かれたワケだが。

「…結論を出す前に、もう一ついいますか？」

俺は、昨日の夜から密かに考えていた事を行動に起こす事にした。

この話を受け入れられなければ、これからの行動が難しくなる。

未だに結論を渋る俺に、面倒臭そうな顔で理由を聞くアルネオ。

「なんだ」

「…ディアスさんに、会わせてほしいんだ」

「ディアスにだと？」

「ああ」

「ふむ…」

俺を観察するように、ジッと睨んでくるアルネオ。

何か企んでいるのでは、と疑っている様子だ。

「……」

「……」

沈黙が重い。

冷や汗が背中を伝っていくのが感じられる。

顔に汗はかいていないだろうか？

「……」

「……（ゴクリ）」

つい音を出して唾を飲み込んでしまう。

それさえも聞こえてしまうのでは？　と思うほどの沈黙が続いた。

そして、とうとうアルネオが口を開く。

「…いいだろう、会わせてやる。ザック、連れて行ってやれ」

ホッ…、どうやら了承してくれたようだ。

アルネオはザック 槍男の名前らしい に、俺をディアスさんの所へ連れて行くよう指示を出す。

「しかし、よろしいのですか？」

「よい。どうせ会ったところで何も出来んだろう。精々が、アヤツを殺すくらいだろう」

サラツとなんてコト言いやがる。

どうやら、このオッサンにとってディアスさんを殺されるのは、全くもって痛手にならないらしい。

まあ殺さないけどね。

「おい、付いて来い」

そして俺は、あの戦いの日以来初めてディアスさんに会う事になった。

ディアスさんが居るのは、奴隷用の牢屋ではなく、奴隷剣闘士用の個室だった。

どうやら奴隷剣闘士というのは、奴隷の中でも特別扱いらしい。

その中でも、この街一番の奴隷剣闘士であるディアスさんは、特に優遇されていたみたいだ。まあその地位も、俺のせいで危ういみたいだが。

「5分だけだぞ」

そう言って扉の前で止まるザック。

どうでもいいが、この世界でも時間単位は一緒なのか？

もしかして、異世界翻訳機能がこんなところまで働いてるとか？

まあいいや。

とりあえず…

コンコン

部屋の扉をノックする。

さっきアルネオの居る部屋に案内された時、ザックも扉をノックしていたので、恐らくそこは元の世界と同じなのだろう。

「だれだ？」

扉の向こうからディアスさんの声がする。

アルネオの許可を取ったとは言え、ディアスさんにはアポ無しだ。

自分に大怪我を負わせた相手がノコノコと訪ねて来たりしたら、どんな反応を示すだろうか。

…いきなり斬りつけられるとか？

俺は若干緊張しつつも、恐る恐る声を出す。

「有沢累です。二日前にあなたと戦った」

「……」

「……」

「…入れ」

しばしの沈黙の後、ディアスさんから入室の許可が降りた。

「失礼します」

扉を開け、部屋の中へと入る。

部屋の中は、とりとめて特徴もない、質素な内装だった。

「何をしに来た」

俺が部屋の中を見回していると、ディアスさんがトゲトゲした物言いで話し掛けてきた。

「貴方に、提案があってきました」

「聞かん。帰れ」

バツサリ

もうちょっと聞いてくれるかと思ってたけど、こんなに嫌われてい
るとは…。

なら、初っ端から本題に入るしかないか。

「リーシャさんを助けたくはないんですか？」

ピクッ

反応した。

「リーシャさん…だと？ 貴様、妹とどうゆう関係だ？」

そっちですか!？

いや、普通助けるの方に反応しない？

「妹さんには、牢屋の中で食事の世話をしてもらってます」

「食事の世話？」

んん？

さっきから眉がピクピクいってるぞ？

「えと、手枷を付けられて一人で食事が出来ない状態なので、妹さんに食べさせてもらっているんです」

「よし、殺す。そこに直れ」

ギャー!!!

ディアスさん怪我してるんでしょ!？

剣なんか持ち出さないで!

「ちよつ、落ち着いて下さって! 俺はこの皆を助けるために…」
「助ける？」

あ、止まった。

つていうか今大声で言っちゃったけど、部屋の外に聞こえなかったかな？

「そ、そう。助けるんです」

「……話を聞こう」

……。

「なるほど。しかし、そんな事が本当に可能なのか？」

「ええ、可能です。ただそれには、ディアスさんの協力が必要です」
「なるほど。いやしかし、俺はこの通り戦えない状態だぞ」

「それも考えてあります」

「…？」

俺はベッドに横たわったままのディアスさんに近づき、わき腹に手を翳した。

「何を……！？」

「どうです？」

「…これは」

そう、ディアスさんの折れた肋骨を還元的能力を使い、折れる前の無傷の状態に戻したのだ。

「驚いたな。…これは、魔法ではないな？」

「ええ、これは自分特有の能力です。魔法はちよつと理由があつて使えないので。ただその代わり、自分に魔法は効きません」

「なるほど。だからあの時俺の魔法が効かなかつたのか」

「まあ、反則的な能力ですけど…」

「まったく、その通りだ」

鼻頭を人差し指で掻き、苦笑しながら言うディアスさん。

「足の方も治しておきましょう」

「ああ、頼む」

そう言っつて、足を此方に向けようとするディアスさん。

「いや、動かなくて大丈夫ですよ。そのままです」

「手を翳さなければ使えないのでは？」

ああ、そういえば肋骨を治す時には手を翳してたな。
でも

「この能力はイメージさえ出来れば、離れた所からでも使えるんです。ただし、自分が壊した物質だけみたいですけどね。それ以外は、手を翳さないと出来ませんけど…」

これも昨日の実験で知った事だ。

まったく、説明書に書いていてくれよ。

まあ実際にやって知った方が、理解は早いんだけどね。

「あ、それから…」

「ん？」

俺は今回の行動を成功させるべく、5分という短い時間内にディアスさんと作戦を練るのだった。

……。

「それで？ 答えは決まったのだろうか？」

「ああ、しつかりと」

「ほほう、ならば聞かせてもらおうか？」

満足げにふんぞり返って、俺の答えを待つアルネオ。

俺が雇われるのを確定している様な態度だ。

どこからその自信が出てくるのやら。

まあその自信も……

「俺は、今のままでいい」

「よし分かった。今すぐこの書類にサインを……は？」

……一瞬で碎かれるのだが。

「……プツ、クスクス」

部屋の端で優雅に茶を啜っていた眼鏡男が、何故か吹きそうになつていた。

「……小僧、今なんと」

書類を片手に持ったまま、此方を睨むアルネオ。

「だから、このままでいいって言ったんだよ。俺はあんたに雇われもしないし、奴隷剣闘士にもならない。普通の奴隷でいい」

「な……に？」

目を見開いて固まっているアルネオ。
シヨック過ぎて頭が回らないのか？

「…クツ、ハハハハッ！」

そして何故か吹きそうになってた眼鏡男が、遂に我慢出来なくなつて、盛大に笑つた。

「け、ケスト！ 何を笑うか！」

「…ククツ、いや失礼。貴方の顔が余りにも面白かったものですか
」

「なに！？」

眼鏡男、ケストの言葉を聞き、一瞬で茹でダコのように真っ赤になるアルネオ。

「ああ、失礼。今のは忘れて下さい。…少年？」

ん？俺か？

「はい？」

「何故、そちらの道を選んだ？ 君ならば、最高の待遇で持て成されてきた筈だが？」

ソファから立ち上がり、此方を真っ直ぐに見てそう問うケスト。
その目は、まるで俺の腹の底まで見透かす様だ。

「そのオッサンの役に立つのが気に入らない。それだけだ」

途端、目をまん丸にして驚くケスト。
なんか、表情豊かな人だな。

「あつはつはつは！ ファビイ氏、これは無理だ、諦めた方がいい。この少年は、貴方の器では御しきれない」

「ぬぐつ、な、なにを…」

そう言われて、若干たじろぐアルネオ。

つていうか、オッサンのファミリーネームってファビイだったのか！？

あの鳥擬きとは似ても似つかねえ！

「ザック！ この小僧を牢屋にほうり込め！ 今すぐだ！！」

「は、はい！」

そして、槍男に伴われて部屋を出て行く俺。

「ああ、少年」

すると去り際に、ケストが話し掛けてきた。

「なんです？」

「何をするつもりかは知らんが、とりあえず楽しみにしているよ」

「っ…!!」

ヤバッ、もしかしてバレてる？

いやでも、何をするつもりかは知らんが、つて言ってたし。
とりあえず、知らん振り。

「はあ、なんの事です？」
「ククツ、頑張りたまえ」

そう言いながら手を振って、部屋から出る俺を送り出した。

俺が部屋から出た後、アルネオがケストに向かって叫びまくってる
声が聞こえてきた。

あの人、大丈夫か？

まあいいや、今の俺には関係ない。
とりあえず、種は一通り蒔いた。

後は今夜の準備を終えれば、明日に備えるのみだ。

…いよいよ明日、俺はこの世界で、革命を起こす。

第8話（後書き）

いつの間にかPVが一万を超えていました。
これもひとえに皆さんのお陰です！

お気に入り登録していただいている方、ありがとうございます。

いよいよ次回、累が大暴れ？ します！

第9話（前書き）

近ごろ腰痛が…

あ、第9話です！

第9話

満月。

月の満ちる夜というのは、古来より人の欲望を駆り立てると言うが、しかしそれは国や地方によって様々だ。

累の住む国では、月が満ちる事によって、人に高揚感を与えるのだと言われている。

そしてそれは、現在累がいるこの世界でも、当てはまるかもしれない。

現在累は、明日の計画を控え、気持ちが高ぶっていた。

この作戦が成功したら、間違いなく俺はお尋ね者だろう。いや、俺だけじゃない。

この館にいる奴隷全員がお尋ね者なるだろう。

もしかしたら恨まれるかもしれない。

奴隷のままの方がまだ幸せだったと言われるかもしれない。

これは俺の単なるエゴだ。

俺が助けたいから助ける。それだけ。

…コワイ

「ははっ、直前になってこれかよ…」

累は牢屋の中でただ一人、押し寄せる重圧に耐えながら、皆が寝静まるのを待っている。

「随分と緊張してるみたいだね」

すると、不意に累に話し掛ける声が聞こえた。

「…イオか」

「ふあん？」

心配そうに聞いてくるイオ。

その顔は、いつになく優しい。

「……怖いんだ」

「他の人達に、どう想われるか怖い？」

「ああ」

自分でも驚くくらいに弱々しい声が出た。
すると、急に体を暖かい何かに包まれる。

「…!?!」

「大丈夫、だいじょうぶだよ」

イオが俺を優しく抱きしめてくれていた。

見た目は少女だが、何故か母に抱かれているような暖かさがある。

「キミは一人じゃないから。たとえ誰に何と思われようと、私だけはキミの味方だよ」

「……」

不安と恐怖で押し潰されそうだった心が、しだいに和らいでいく。

「…イオ」

「ん？」

「ありがとう」
「…うん」

そして、俺の頭をポンポンと撫でる。

…なんだか、急に恥ずかしくなってきた。

「…イオ」

「なに？」

「ムネ…」

「ていつ」

バシッ！

「ぶべっ！」

ムネが、とは続かなかった。

イオに両手で顔を挟まれる様に叩かれたのだ。

「どうせ小さいですよ！ 仕方ないでしょっ！ こればかりは力を使ってもどうにもならなかったんだから！」

「いや、っていうか、力使って大きくしたらそれこそ詐欺だろ。むしろその見た目できよぬーだったら引くぞ」

「あーヤダヤダ。やっぱり男は大きければそれで良いのね」

「いや、小さいは小さいなりの魅力が…」
「最低っ」

今度は頭をはたかれた。

「まったく、さっきまでの落ち込み具合は何処にいったのやら」
「ねっ」

「ねっ、じゃない！」

「いやいや、イオのお陰だよ」

穏やかな笑顔で答える。

「…なっ、またそんな事言っつて」

「本当だつて。イオのお陰で、心の重圧が和らいだ。これで、思う存分暴れられる」

先ほどまでプンプンと怒っていたイオが、真面目な顔になる。

「…やるんだね」

「ああっ」

一切の憂いが無い、決心の籠もった顔で頷く。

「そ、頑張つて」

そう言つて、笑顔で俺を勇気付けるイオ。

そうして、俺は今夜やるべき、作戦前の最後の準備に取りかかった。

翌朝。

俺は、屋敷内を騒がしく走り回るアルネオの部下達の声によって目を覚ました。

「見つかったか!？」

「いや、何処にも無い!」

「クソツ、アレだけの量が一晩で一体どこに消えたって言うんだ…」

「まさか奴隷の手に渡ってるって事は…」

「それはない、牢屋も個室も全て調べた」

「とにかくっ、急いで探すんだ!」

どうやら何かを探している様だ。

ってまあ他人事みたいだけど、探してるのは、十中八九昨日おれが盗んだ物だろう。

実は昨日の夜、この屋敷内の武器庫から、全ての武器を盗み出したのだ。

そして今はとある場所に隠してある。

まあまず見つからないだろう。

「チツ、このクソ忙しい時に奴隷共の飯なんて…。おら、飯だ」

俺が遠くのそんなやり取りに気を取られていると、いつの間にか牢屋番の男が食事を運んで来ていた。

そしていつもの様に、リーシャさんを向かいの牢屋から出し、此方の牢屋に入れる。

「……………」

何やら浮かない顔で俺のいる牢屋に入ってきたリーシャさん。

「こんにちは」

「……………」

…反応無し。

「…？ リーシャさん？」

「あつ、はい。こんにちは」

慌ててぺこりと頭を下げ、挨拶をする。

「どうしたんですか？」

「いえ…、何でも、ありません」

むう、そうは見えないのだが。

しかし本人が何でもないと言っているのだから、無理に聞くことも無いのかな？

「あの、本当に何でもないですから…」

俺が首を傾げて思案していると、リーシャさんにそう言われてしまった。

あちゃ、逆に気を使わせちゃったか。

「すみません、いま食事を…あら？」

気をそらそうと、食事に手を伸ばすリーシャさん。
しかし、その手も途中で止まった。

「どうしました？」

「いえ、あの…。食事が…」

「ああ、それですか」

ふと床に置かれた食事に目をやると、その食事の質が昨日までと違う事に気付く。

昨日アルネオに「俺は普通の奴隷でいい」と言ったために、奴隷剣闘士用の食事から、また前の質素な食事に戻っていたのだ。

「もう俺は期待の奴隷剣闘士でも何でもない、ただの奴隷ですから」

「そう…ですか」

…本当に元気が無いな。

今の話も、なんか心此处に有らずって感じで聞いてたし。一体どうしたんだか。

「……」

「……」

黙々と、作業の様に食べ物を口に運ぶ。

まるで最初の時に戻ったようだ。

「…ちそうさまでした」

「…はい」

何も話さず坦々と食事を進めていたので、いつもよりかなり早く終わってしまった。

この分だと、牢屋番が来るまでに1時間くらいあるだろう。まあ、偶にもっと遅いけど。

「このまま何も話さずに1時間近く待つのか…」。

とか考えていると、食器を部屋の隅に片付け終えたリーシャさんが、俺の目の前に座り、悲愴漂つ目で俺を見つめた。

「ルイさん……」

「はい？」

「……」

「どうしました？」

話を切り出したは良いものの、何故か次の言を出そうとしない。

「お願いが……あるんです」

「お願い？」

「こんな話、ルイさんにしか頼めなくて。あのでもっ、もし……お嫌でしたら……」

只ならぬリーシャさんの様子に、俺も居住まいを正す。

「なんでしょっつ？」

なるべく話しやすいように、優しい声で聞く。

「……あの、わたし、今日なんです」

「今日？」

何がですか？ とは聞かずに、自然に次を話すのを待つ。

「……夜伽の……調教です」

「えっ？」

夜伽の調教……

そういえば、ここに連れて来られる時に聞いた。

若い女性の奴隷は、夜伽の相手をするための調教も施されると。

そうか、ディアスさんとの戦いの日、アルネオがディアスさんに言っていたのはこうゆう事だったのか。

「夕方になれば、わたしは…、好きでもない殿方に、体を…純潔を捧げなくてはいけません」

「……」

「ですから…」

そこまで言うと、涙目になったリーシャさんが俺に撓垂れ掛かってきた。

「ルイさん、お願いです。私の…、私の純潔を…貴方に…」

「っ…!」

…ヤバい。

何がヤバいって、いま一瞬頷きそうになってしまった。

そんな事したらディアスさんに殺されてしまう!

じゃなくて…!

「…?」

俺は体を擦って、撓垂れ掛かるリーシャさんから離れる。

「…やっぱり、私なんかでは、嫌ですか?」

「っっ…、いや、そうじゃなくて。リーシャさん、諦めちゃダメだ」

「あきらめ…?」

すると、不意にリーシャさんの目に力が入る。

「諦めるなって、何を諦めるなって言うんですか？ 諦めなければ、何か変わるとでも言うんですか!？」

俺の襟首を掴み、凄い剣幕で叫ぶ。

「希望があるとしても？ そんなモノ、親に奴隷商に売られた瞬間に捨てました。私には、希望なんて……!？」

そこまで聞くと、俺の襟首を掴むリーシャさんの手を、優しく包んだ。

ちよつと鉄球が重いが、そんなのは無視だ。

「ありますよ。希望は」

「え？」

「希望はあります。俺が、作ってみせます」

「なにを言つて……」

「俺が貴方を救います。ここの奴隷商達から、貴方を護ります」

「でも……」

「ですから、リーシャさん。自分を…心を、棄てようとししないで下さい。…ね？」

「あ……、うう……」

涙目だったリーシャさんの目から、ついに涙が零れた。

「う…、あああああ……」

涙をせき止めていた心のダムが、一気に崩壊した様に溢れる涙。

俺は泣きじゃくるリーシャさんの体を、ただ優しく抱き締めていた。

……。

数十分後。

「ごめんなさい！」

リーシャさんは泣き止んだかと思うと、急に何度も俺に謝ってきたのだ。

「いや、もういいですから」

「いいえ、そんな。私は、自分を無理やり納得させるために、ルイさんを利用しようとしたんです。しかも、そんな私を諭してくれようとしたルイさんにあんな事を言うなんて……」

「いえ、本当に気にしてないですから。頭を上げて下さい」「でも……」

うーん、なかなか引き下がりそうにないな。

仕方ない、ここはイチかバチかの強硬手段。

「あんまりしつこいと、お兄さんに報告しますよ？」

ビクッ！

「……あ、兄にですか？」

おや？

何だか凄い反応。

「わ、わわわわ分かりました。ルイさんが、そろそろここまで言つなら
いや、ドモリ過ぎでしょ。
まさかここまで効果があるとは…。」

「そうですね。良かったです」

「あ、あのルイさん」

「はい？」

「ぜ、絶対に兄には言わないで下さいね」

「いや、まあ言いませんけど」

「絶対ですよ？ もしこの事が兄に漏れれば、ルイさん、兄に地獄
の底までも追われますよ？」

ああ、そっちですか。

リーシャさんじゃなくて、俺の危機になるワケね。

「…肝に銘じておきます」

俺がリーシャさんにそう言つと、牢屋の外に、人の近付く気配を
感じる。

牢屋番か？ 今日はいつもよりヤケに早いんだな。

などと思つてそちらに目を向けると、案の定牢屋番の男がこちらに
歩いて来ていた。

「リーシャ・ハーネス、出る。これから調教部屋に来てもらう」

「…!？」

これから？

夕方からじゃなかったのか？

「あ、あの、夕方からの筈では？」

「アルネオさんの気が変わったんだよ。いいから来い」

「……」

男にそう言われ、不安げな表情で俺を見つめるリーシャさん。

それに対し、俺は男に聞こえない声で、優しく言う。

「大丈夫、俺が助けますから。ここはひとまず、男に従って下さい」

「……はい」

そうして、リーシャさんは牢屋番の男について行く。

「……さてと」

牢屋番とリーシャさんがある程度離れると、俺は両腕と両足の枷に意識を集中し、枷を分解した。

「アルネオの場所に案内してもらいますか」

第9話（後書き）

なんて言うか、ごめんなさい。

累が暴れるとか言っとして、かなり大人しい話になりました。
無計画でごめんなさい！

第10話(前書き)

大暴れ!!

…って感じじゃないかも。

第10話

有沢累は怒っていた。

彼は元の世界では、かなり温厚な性格であると周囲から言われていた。

しかし逆に怒らせると、手をつけられない程の暴れっぷりを見せる。

彼自身もそれが分かっているので、なかなか怒らないように心がけている。

しかし今、有沢累は今までにない怒りを覚えていた。

リーシャさんは賢く優しい、芯の通った人だ。

そのリーシャさんが、あそこまで追い詰められていた。

好きでもない自分に、自らのカラダを預けようとするほどに。

あの時のリーシャさんの顔が、頭から離れない。

「……」

牢屋の格子を分解し、外に出る。

まだリーシャさんと牢屋番の男の気配は感じる。

当初の予定では、牢屋を抜けた後にそこら辺のアルネオの部下を捕まえ、アルネオの居場所を吐かせる段取りだった。

しかし、これからリーシャさんが行く場所にはアルネオがいる。

なら、二人の後をつければ良いだけだ。

誰かに遭遇した時は…

その時に考えよう。

今はあまり頭が回らない。

「おい貴様、何をしているっ」

さっそく出会ってしまったようだ。
運の悪い。

「止まれ！」

男が腰に差した剣を引き抜き、此方に向け振り抜いてきた。

「分解」

しかし、男の剣は累を切り裂く事はなく、累の体に触れた瞬間に粉と化す。

「なっ、っ……」

男が驚く暇も与えずに、男の鳩尾に蹴りをいれる。
男は呻き声すら上げずに、床に倒れ伏す。

幸い、前に行く二人には気付かれなかったようだ。

「っ！？ キサ」

曲がり角を曲がったところで、また敵に遭遇した。
今度は剣を抜く隙も与えずに、相手の男の頭を掴み、壁に叩き付ける。

「……」

男は壁に顔を付けたまま、ズルズルと崩れ落ちる。

「あそこか」

リーシャさんと牢屋番の男が、どこかの部屋に入ったようだ。

扉に近づき、部屋の中の会話を聞いてみる。

「……噂に……の……だ。……ほど……くしい……」

「……はり……奴隷……もったい…………だな」

途切れ途切れだが、会話が聞き取れる。

二人の男が、何やら話しているようだ。

そして、一人の男の声には聞き覚えがあった。

アルネオだ。

「……見つけた」

扉に手を触れる。

「分解」

扉が分解され、部屋の中の景色が目飛び込む。

そこで真っ先に目にしたのは、一糸纏わぬ姿の……

「な……に？」

アルネオだった。

えーと、とりあえず。

「なんつーもん見せやがる!！」

床に落ちていた水晶のような物を、アルネオの股間に向け全力投球。

「はあっ!」

水晶のような物は、真っ直ぐに飛んでゆき、アルネオのゴニョゴニョにクリーンヒットした。

「ルイさん!」

「やほ、リーシャさん。助けに来ましたよ」

リーシャさんは、アルネオの近くで椅子に座っていた。

ああもう!　なんかアルネオの素っ裸を見た瞬間に、怒りとか色んなのがぶっ飛んだわ!

「っ、小僧…、貴様なぜっここに…」

アルネオが股間を抑えて、蹲りながら言う。

「なぜって、そりゃありーシャさんを助けに来たに決まってるんだろ」
「この…小僧！ このワシに刃向かうとどうなるか分かっているのか！」

「ん？ どうなるの？」

「この糞餓鬼が！ ザック、その小僧を殺せ！！」

アルネオの命令を受け、ザックが槍をこちらに向け突進してくる。

「オオオオオ！！」

「猪じゃないんだから…、っと」

千刃の指輪を盾に変え、攻撃をいなす。

そして即座に盾を鉄甲に変え、ザックの横っ面に拳を叩き込んだ。

「ガッ、ハ……」

ザックは床に倒れ伏し、ピクリとも動かなくなる。
さらばモブキャラ、名前だけでもあつて良かったな。

「さあ、リーシャさんをこっちに渡すんだ」

「ぐっ…、えええい！もの共出会え！」

時代劇でしか聞いた事のないようなセリフを叫び、部下を呼ぶアルネオ。

そして部屋の中に、十数人の武器を持った男達が雪崩れ込んで来た。

「その餓鬼を殺せえ！ 生かしてここから出すな！」
「ダメ！ ルイさん、逃げて！」

リーシャさんの声と同時に、男達がそれぞれの武器を振りかぶる。

「…分解」

しかし俺の能力の前に、武器など無意味。

男達の武器は、俺の体に触れた瞬間、全て粉と化した。

「なっ、武器が…」

「何が起こったんだ!？」

空になった自分の手を見つめ、ざわめく男達。

「悪いけど、俺に武器は効かない。俺を倒したかったら、素手でくるんだな」

「く…っそお！」

ヤケクソになった男達が一斉に殴りかかってくる。

「えっと、こつゆう場合は…」

四方八方から襲い掛かってくるコイツ等を一掃出来る武器はないかな？

と、一瞬考え…

「よし、やってみよ」

千刃の指輪にイメージを送り、指輪を武器に変える。

「じゃじゃーん！」

出来た武器は、1mくらいの鋼鉄柄の先に、真四角の鋼鉄の網が付いたもの。

まあ所謂、スゴく大きな鋼鉄の蠅叩き。

「ソイツ！」

それを360°振り回し、周りにいた男達をなぎ倒す。
なにこれ、めっさ気持ちいい。

「な、バカな…。一瞬で十数人を…。しかも何だ、あの武器は？
変幻自在の武器など聞いた事がないぞ」

驚くアルネオ。

つていうか、いい加減に服を着れ！

「さ、リーシャさん。こっちに」

「…あ、はい！」

アルネオが驚いている隙に、リーシャさんをこっちに引き寄せせる。

「くっ…、小僧！ 動くな！」

先ほど俺が投げた水晶のような物を手に取り、そう叫ぶアルネオ。
なんだあれ？

「？ なにそれ？」

「ふ、ふふ…、コレは奴隷達に着けた首輪を管理するための魔石だ。それ以上抵抗をすれば、その女の首を吹き飛ばすぞ」

「…！」

クソツ！ まさかあの水晶のような物がそんな道具だったなんて。俺が投げなければアルネオの手に渡る事はなかったのに。この距離じゃ分解は間に合わない。どうしたら…」

「ル、ルイさん…」

怯えた目で俺を見るリーシャさん。
くそ、どうしたら…」

「……」

「さあ小僧、大人しく投降しろ」

手に持った魔石をチラつかせながら、下卑な笑みを浮かべるアルネオ。

…魔石？
そういえば、あれって魔法で制御してるんだっただよな。
そして俺の能力…」

…もしかしたら。

でも、コレは一か八かのカケだ。

「早くしろ小僧。その女の首を吹き飛ばしたいのか？」

「……リーシャさん」

「は、はい」

「俺を…信じてくれますか？」

「え？………はい」

一瞬俺の言葉の意味を理解出来ず、疑問の表情を浮かべたリーシャさんだったが、俺の表情から何かを感じたかの様に、覚悟を決めた顔で頷く。

「ありがとう、リーシャさん…」

自分の命が危ういというのに、俺のことを信じてくれるリーシャさんに感謝の言葉を述べる。

「アルネオ、やるならやってみろ。ただし、他人を呪わば穴二つ。

それ相応の覚悟はするんだな」

「く…、何をワケの分からん事を！ えええい、もういい！ 死ぬがいい！！」

そう言って、魔石に魔力を込めるアルネオ。

その瞬間、俺は四歩ほど離れた場所にいるリーシャさんの所まで跳び、首輪に手を伸ばす。

カッ！！

リーシャさんの首輪の魔石が、強い光を放った。

第10話（後書き）

馬鹿デカイ蠅叩き。

- ・ 鋼鉄だから頑丈
- ・ 当たると痛い
- ・ 柄が長い
- ・ 網もデカイ
- ・ 人を叩くのに最適
- ・ でも網目がデカイから、蠅は叩けない…

蠅叩きじゃねえ!!

第11話(前書き)

せしとじやー区切ら？

第11話

リーシャさんの首輪の魔石が、強い光を放った。
そして…

パリンッ！

魔石は音を立て、派手に割れた。

「ふう、何とか間に合ったか…」

俺の手は、リーシャさんの首輪に触れている。

「え、あれ？ なにが…」

何が起こったのか理解出来ていないリーシャさん。

「な、バカな…、なぜ魔法が発動しない！？」

アルネオもリーシャさん同様に驚いている。

「簡単な事だよ。俺の能力は、魔法無効化。俺に影響を及ぼす全ての魔法を無効化する能力だ」

「ならば何故その女が生きている！ ワシはその女に対して魔法を使ったのだぞ！」

「だあかあら、言っただろ。」俺に影響を及ぼす全ての魔法”って。

この魔法は、首輪に付いた魔石を小爆発させ、首輪を着けた者の首を吹き飛ばすって聞いた。ならもし、その首輪に俺が触れた状態で魔法が発動したらどうなる？」

「あ、まさか…」

リーシャさんはその意味に気付いたようだ。

しかし、アルネオは未だに分からない様子。

バーカバーカ。

「もしルイさんが首輪に触れた状態で魔法が発動すれば、ルイさんの手も吹き飛ぶ。でもルイさんは、その身に影響を及ぼす全ての魔法を無効化する。だから…」

「そ、だからその首輪の魔法は無効化されたってワケ」

そう言って、俺はリーシャさんの首輪を分解で外してあげた。

「あ…」

そしてリーシャさんを体の後ろに置き、アルネオの方に向き直る。

「アルネオ、お前の負けだ。もうお前には何も手はない」

アルネオを睨み付け、降伏を促す。

しかしアルネオは、まだ諦めてはいない表情だ。

「ふっ、ふふふ…、その女の首輪は無理だったか。…ならば！」

魔石を持った手を前に突き出し、俺達に見せる様に掲げる。

「その女の兄、ディアスの首を吹き飛ばしてくれよう！」

「ああ、それは無理だな」
「な…に？」

意気揚々と言うアルネオであったが、あっさりとそれを無理と言われ、勢いも止まる。

「コレ、なあ〜んだ？」

ポケットの中からとある物を取り出し、目の前でヒラヒラさせる。

「まさか、それは!？」

「そ、ディアスさんの首輪だよん」

こんな事もあるつかと、昨日会った時にこっそり外しておいたのだ。

「くっ、おのれ…」

ワナワナと震え、怒りを露わにするアルネオ。

『ボスツ、ボスツ!』

すると突然、机の上にある、電話みたいな機械（昔のヨーロツパとかで使われてそうなオシャレなやつ）からアルネオを呼ぶ声が聞こえた。

向こうの声聞こえるから、無線みたいな物か？

アルネオは俺を警戒してか、それに出ようとしなない。

「出てやれよ。待っててやるからさ」

「く…」

悔しそうな表情をしながらも、受話器たぶんを取る。

「なんだ！」

『ボス、大変です！ 屋敷にいる奴隷達が、暴動を起こしました！』
「なに！？ なぜ奴隷共が牢屋から出ているんだ！ 誰が鍵を開けた！」

『そ、それが、全ての牢屋の鍵が破壊されておりまして』

あ、それやったの俺。

「えええい！ とにかく、早く鎮める！ そんなクズ共に手間取るな！」

『あの、それが…』

「なんだ！」

『奴隷達は、何故か全員武器を所持しておりまして。しかもそれらは、昨晚何者かによって武器庫から盗み出された物かと思われまます』
「なんだと！？」

それやったのも俺。

実は昨晚盗んだ武器は、全て分解で粉々にした後、全ての牢屋の中にバラまいておいたのだ。

そして俺がアルネオの部屋に入った時、遠距離から念じて、全て還元的能力で戻した。

「ぐつ、くうう！ 殺せ！ 奴隷共を全員殺すのだ！！」

『む、無理です。我々はほぼ全員が丸腰の状態です』

「ならばケストを出せ！ 魔法士達を総動員させる！」

『それが、ケスト殿は昨晚から行方が知れず…。しかも、暴動の先

頭に立っているのは、あのディアスでして、並みの魔法士では相手になりません」

「バカな！ ディアスは小僧との戦いの怪我で、動けない状態の筈だ」

『いえしかし、どうも見たところ、怪我は完治しているようです……』

俺が治したからねえ。

「ぬうう！ どんな手段を使っても構わん！ とにかく、暴動を直ぐに治める！」

そう吐き捨てて、電話を机に叩きつけるアルネオ。

ハアハアと息切れして、だいぶお怒りのようです。

「八方塞がりだな。さあどうする、アルネオ」

「お…のれ、おのれおのれおのれおのれ！ 小僧！！ これも貴様の仕業かあ！」

「その通り」

「貴様……」

俺を怒りの形相で睨み付け、右手に持った魔石を握り締める。

しかしそこで、アルネオは手に持った魔石に気づき、ハツとする。そして、不気味な笑みを浮かべた。

「フツ、そうか。暴動を鎮めるのに、わざわざ部下共の手を借りるまでもない」

そう言って、右手に持った魔石を目の前に翳す。

「こいつさえあれば、暴徒など一瞬で皆殺しだ」
「なっ！ そんな…」

リーシャさんが驚きの声を上げる。

しかしそれでも尚、俺は余裕の表情を崩さない。

「やってみるよ、アルネオ。ただし…」

俺は服のポケットに手を突っ込み、中からとある粉末を手取る。
そしてそれを、アルネオの顔目掛けて投げつける。

「ブハツ！ な、なんだコレは！」

そしてその粉に還元を念じ、分解される前の状態に戻す。
するとあら不思議、アルネオの首に奴隷用の首輪が装着されまし
た。

「…自分も死ぬ覚悟があるなら、の話だが」

「な、なんだコレは！ なぜワシの首にこんな物が！？」

「ああそれねえ、とある人から外しておいた首輪だよ」

昨日の夜、ある人に協力してもらい、その首輪を分解させてもら
ったのだ。

「さあやってみるよアルネオ。でもそれが誰の首輪か分からない以
上、不用意に魔法を発動すれば、お前の首も吹っ飛ぶぞ」

「く…そ、小僧おお！」

遂に怒りでプツンいったのか、アルネオは落ちていた部下の武
器を取り、俺に斬り掛かって来た。

「無茶すんなよオッサン」

俺は千刃の指輪にイメージを送り、棒状の武器…所謂スタンロッドに変えた。

「そんなオモチャで！」

そう言っつて斬り掛かって来たアルネオの剣を往なし、スタンロッドをアルネオのむき出しの腹部に叩きつけ、スイッチを入れる。

「あべばっ！」

奇妙な悲鳴を上げ、床に倒れ伏すアルネオ。

ひっくり返ったカエルの様な体勢で、ピクピクと痙攣している。いや、全裸でこの体勢はだいぶ厳しいものがあるな。

「ルイさん…」

リーシャさんが両手を胸の前で組み、涙目で俺に近付いてきた。

「はい？」

「ルイさん！」

「おわっ！？」

そして急に俺に抱きつき、わんわんと泣き始めた。

「えーと、あの…。リーシャさん？」

「ありがとうございます、ありがとうございます。私…本当に、怖くて。ルイさんがいなければ、私…あのままアルネオに…」

そう言って、更にギュッと強く抱き付くリーシャさん。

お、おう！

なんだか柔らかかな感触が！

「ありがとうございます。本当に…ありがとうございます」

「そ、そんな、お礼なんて。俺はただ、そうしたかったから行動しただけです…」

アワアワと慌てながら答える。

彼女いない歴〃年齢の自分には、このシチュエーションは正直言っただけかなりくるものが…

「あの、それは…」

すると、リーシャさんが俺に抱き付いた腕を少しだけ緩め、顔を上げて俺を見つめてきた。

えと、あの、その、顔が…ち、近いです！

「それはもしかして、アルネオから私を助けたかったから、っていう事ですか？」

「うへっ!？」

クソッ、テンパリ過ぎて変な声が出てしまった。

「私の…ために？」

若干顔を紅潮させ、ウルウルした瞳で俺にそう聞く。

…ヤバい。
なんか、理性の籠たがが外れてしまいそうだ。
いや、っていうかもう、外していいんじゃない？
外そうぜ、俺。

…うん。
っていう事で、さらば理性！

「り、リーシャさん！」

俺はリーシャさんの肩を掴み、リーシャさんの顔に自分の顔を近づ
け…

「リーシャ！ 助けに来たぞ！」

…ようとした所で、部屋に勢いよくとある御方が飛び込んで来た。

「……………」
「……………」
「……………」

空気が止まった。

「あ…、兄さん…」

「デイ、ディアスさん…」

部屋に入った瞬間、フリーズしたディアスさん。

そして無表情のまま、抜き身の剣を携え、こちらに近付いてくる。

「あ、あの…お兄さん？ け、剣を収めませんか？」

「……」

俺達の目の前まで近付くと、ニコツと微笑み、剣を振り上げた。

「誰が…」

「ルイさんっ、逃げて！」

真っ青な顔でそう叫ぶリーシャさん。

「へっ？」

「お兄さんだあああああ！！」

「ひきやあああああ！」

般若のような顔で剣を振りかざし、俺を追いかけるディアスさん。

「兄さんっ、やめてえ！」

「撲殺滅殺斬殺惨殺！」

「ちよつ、ディアスさん！ かんべん！ ごめんなさい！」

結局その後、ディアスさんは俺をさんざん追い掛け回した後、リーシャさんの跳び蹴りによって、やっとこさ理性を取り戻した。

恐るべし、シスコン兄貴。

しかし真に恐ろしいのは、そのディアスさんを跳び蹴り一発で止めたリーシャさんだなんて、口が裂けても言えませんでした。

第11話（後書き）

最後まで服を着る事はなかったアルネオ…

次回更新は遅くなるかもです。

第12話(前書き)

今話より新展開!

新キャラも登場です!

第12話

真っ白でまっさらな世界。

地面も空も真っ白で、この世界には俺以外誰もいない、何も無い。

「ん〜と…、どっ?」

確か俺はアノ後、アルネオの屋敷を占拠して、アルネオとその部下達を追い出し、解放された奴隷の人達と、屋敷中の酒や食べ物で祝勝会的なものをやりたいはずだ。

そうそう、奴隷の人達は皆生き生きとした顔をしていて、俺とデアィアスさんは感謝の言葉攻め、酒攻めになった。

これから皆に降りかかるであろう困難に、俺は負い目を持っていたのだが、その件で俺が謝ると、皆口々に「気にするな!」「望むところだ!」などと言ってくれた。

リーシャさんも、「今まで自分達は、ただ自分の運命を呪う事しか出来なかった、いえ、しなかった。でもこれからは、自分で運命を切り開く。自らの足で立ち、自らの足で進む。それを教えてくれたのは、ルイさんです。だから、あなたは謝る必要はありません」と言ってくれた。

嬉しかった。

自分のやった事が、皆を助け、皆を勇気づけ、皆に元気を与えた。初めて人の役にたった気がした。

そうそう。話は変わるが、アルネオに着けたあの首輪。とある人に協力してもらい…と言ってたいたそのとある人。実は、この異世界に来て一番最初に親切にしてもらったオジサン。俺が奴隷商の馬車に放り込まれた時、俺に汚水（あれでも貴重な水らしいです。ゴメンナサイ）を飲ませてくれたオジサンだ。名前はマーカスさんというらしい。

アルネオがああの行動に出るのを予想し、誰かに協力してもらい首輪を…と思つて協力者を探していたら、偶然マーカスさんに会つたのだ。

マーカスさんに事情を説明し、協力をお願いしたところ、快く了承してくれた。

さて、話がだいぶ逸れたな。

つまり俺は、ディアスさんやその他大勢に無理やり酒を飲まされた後、酔つ払つてダウンしてしまつた…つて事なのかな？

うむう…、酒を飲まされてからの記憶が曖昧だ。

ええと、あまり頼りにならない記憶を総合すると…

うん、これは夢だな。

だって、俺はさっきまで屋敷の中で色んな人達とワイワイガヤガヤやっていた筈なのに、ここには誰もいないし。

こんな真つ白で何も無い世界見た事ないし。

ここがさっきまでいた異世界とは、また別の異世界でもない限り…

……

……

ぐおおおおおっ、ちよつと待てえ!!

え？

まさか！

そのまさか!？

なに？ 俺また飛んじやつた!？

世界間跳躍とかしちやつた系!？

寝てる間にバビューンと世界跳躍!!!？

神さまああああ!!

あ、そうだ！

イオ!!!

イオ助けてええええ!!!

こんな何も無い世界イヤだよおおお!!!

「やれやれ。二人きりで話をするために、わざわざこの場所に案内したというのに、1人でも騒がしいな君は」

「……………ほわい？」

「間の抜けた顔だな。こんな少年がこの世界の神達に対抗できるのやら…」

えくと…、だれ？ この渋いオジサマ。

「ふーあーゆう？」

「おや？ そういえば顔を合わせるのは初めてだったかな」

そう言うと、渋いオジサマは右手を胸に置き、キザったらしく挨拶してきた。

「初めまして。私はこの世界の神の石柱、ヒカードだ。君のことは、この世界に来た時からずっと見ていたよ」

「ああはん？」

「…日本語を話したまえ。せっかく私も日本語で話しているのだから」

どうやら混乱しすぎて頭がおかしくなっているらしい。

なんか神様を名乗るビジネススーツを着た渋いオジサマが見える。

しかも話し掛けてくるし。

まぼろし？ 幻見ちゃってる？

それともやっぱりインマイドリーム？

現在進行形でインマイドリーミング？

「こらこら、幻でも夢でもないぞ。私は真正正銘の神だ。先程まで君がいた世界…、君がああ男、アルネオと戦った世界のね」

「え、あー、んと、ここは？」

「ここは私が作り出した空想世界だ。君と二人で話がしたかったの
でね、悪いが無理やり連れて来た」

あ、そすか。無理やりですか。

「んで、その神様が自分に何の用ですか？」

「いやなに、君にこの世界の神を敵に回す覚悟があるか否か。それ
を聞いておきたくてね」

「この世界の世界の神を、敵に回す？ どういう意味だ？」

話が突飛すぎて理解できない。

どういうことだ？

「…君は、神というのがどうやって生まれるのか知っているかね？」

「え？ いや、神様って最初っから居るもんじゃないのか？」

っていうか、そもそも神様って何者なのか。それすら考えた事も
なかった。

だって今時の普通の日本人なら、神様なんて存在信じてないだろ？
神様の存在を知るところか、考えた事さえないよ。

まあつい最近、特殊な性癖を持った神様とお知り合いになりました
が。

「まあ、普通は分からないだろうな。なら今ここで、君に教えよう。
我々神が生まれた由縁を」

そして、自称この世界の神様、ヒカードは語り始めた。

「神というのは、人々の思念の集合体。つまり、人の想いによって生まれるモノなのだよ。」

こうあってほしい。こうであってもらいたい。こういうものだろう。そんな人々の想像や理念、思念が我々神を作る。我々は人の創造物であり、想像物でもあるのだ。

君の世界…というより、国には、沢山の神が居るだろう？
八百万の神と言ったか？

あれも、人々の想像による産物なのだよ。」

「じ、じゃあ、イオも、あんたも？」

「そうだ」

そんなまさか。

あのイオが、人々の想像から生まれた存在？
あんなにしっかりとした意思があるのにな？
あれも作りものなのか？

「まあ彼女の場合は、元になった人間がいるがね。彼女は、人々の願望によって神になった。」

しかし、この世界の神は違う。この世界の上位神達は歪だ。歪んでいる。穢れでいると言ってもいい。それだけ、この世界の人々の思念は酷いものなのだよ。

奴隷が欲しい。奴隷が出来た。神よ、奴隷とは斯くも良き物なのか。感謝する。

奴隷になりたくない。奴隷になった。神よ、何故自分を奴隷にした

のか。

この世に神がいるとしたら、私は恨む。私をこのような運命の歯車に乗せたのは神だ。奴隷にしたのは神だ。

神は酷い。神は憎い。神は無慈悲だ。

そんな勝手な想いから、この世界の神達は生まれた。かく言う、この私もな」

そんなバカな…

じゃあもしかして、この世界がこんなになったのは…

「そう。この世界に住まう人間達の思想を、神が具現化した為だ。だから、この世界には奴隷が溢れている。奴隷とそうでない者の違いが大きく出るのだ」

「えっと、つまりさっきあんたが言った、この世界の神達と戦う覚悟があるか否かっていうのは、この世界の奴隷達を救うっていう事は、この世界の神様と戦うっていう意味になるから…ってワケか？」
「そういう事だ」

おお、ジーザス。
なんてこったい。

「じゃあつまり、あんたも俺の敵？」

「いや、私は違うよ。というより、まだ説明していなかったな。君がこの世界と契約するに当たって、この世界との仲介を行ったのはこの私だよ」

今度こそ本当にほわい？

え、つまりなんだ？

俺がこの世界と契約して、元の世界に帰れなくなったのは、このオッサンのせい？

「君ならば、この世界の乱れた歯車を修正してくれるかと思ってね」
「……………ツハアー、まあいつか、今さら怒ったってしょうがないしなあ……………」

「おや？ 予想外だ。てつきり恨み言を言われると思ったのだが」
「そりゃまあ、最初はそうだったよ。自分をこんな目に合わせた運命を呪ったし、元の世界に帰れなくなった事も悔やんだ。でも」

そう、でも…

「俺はもう、決意しちまったからな。リーシャさんやディアスさん、そして、この世界の奴隷の人達を助けると。この世界の救世主になると」

そう言つと、ヒカードは目をまん丸にして驚いた顔をし、ふうとため息を吐いた。

「やれやれ、どうやら君の決意は本物らしいな」

「まあな。たとえこの世界の運命を操る神様が相手だろうと、俺は戦う。そんな馬鹿げた運命なんて、この俺がぶっ壊してやるよ」

そうだ。

何が神様だ。

何が運命だ。

そんなもの関係ない。
他の誰かが決めた運命なんて、他の誰かが敷いたレールなんて、誰が走ってやるものか。

俺は俺の信じた道を行く。

誰かの言いなりになるなんて、まっぴらゴメンだ。

「それが困難で、険しい道だとしても…、いや、道すら無いとして
もかい？」

「関係ないね。道が無ければ自分で作る」

「…そういえば、彼女が君にそんな事を言っていたな。君が進む道
を選ぶのは君だ、道を作り出すのは君だと」

「ああ、そうだとも。これは、イオが俺に教えてくれた事だ」

あの日、俺がこの世界の救世主になると決意したあの夜。
イオが俺に言ってくれた言葉だ。

あの言葉のおかげで、俺は決意できた。
自らの足で進む事ができたんだ。

「全く、うらやましいな。君の世界には素晴らしい神様がいるよう
だ」

「ああ、最高の女神様だよ」

自慢するようには、ヒカードに言っただけ。

するとヒカードは苦笑し、やれやれといった風に両手を持ち上げる。

「そんな事で惚気られてもなあ…」

「は？ 何言っ」

「しかし、君の決意が本物だと分かった以上、私ももう何も言うま
い。君に助力する事は出来ないが、応援はしているよ。なにせ私も、

「この世界の運命とやらを嫌っているからね」

「そうなのか？」

「おや？ 今までの会話で気が付かなかったのかい？ 私はこの世界では珍しい、奴隷反対派の神だよ」

「なんか政治家みたいだな」

「似たようなものさ」

そう言って、ヒカードはスーツのポケットに手を突っ込み、海中時計を取り出した。

「そろそろ時間だな。私が君をこの場所に留めておけるのも、ここまでが限界のようだ」

「やあゝれやれ、やっと現実に戻れるのか…」

「あ、そうそう。いま君の肉体は睡眠状態にあるが、精神はこの世界で活動していたから、疲れはあまり取れていないのだが、私という神様との貴重な対面のためという事で、悪しからず」

「無理やり連れて来たくせして…」

「まあそう言うな。では、さようなら。頑張りたまえよ、少年」

そう言ってやたらあっさりとした挨拶を済ませると、自称神様ヒカードは、笑顔で手を降った。

そうして、俺の意識は暗闇へと落ちていく。

「はっ」

目が覚めると、そこは床の上だった。

周りには酒瓶を抱えゴウゴウと眠る人や、ソファやクッションでスヤスヤと眠る人。

皆一様に、幸せそうな顔をしている。

その顔を見て、穏やかな気持ちになると、俺はまた眠くなり（ヒカドのせいで疲れが取れてない）、欠伸をし、再び目を閉じようとした。

すると突然、部屋の扉が勢いよく開き、ディアスさんが駆け込んできた。

「ルイ！ 起きろ！」

「ほへ？ ディアスさん？」

その騒がしさに、周りで眠っていた人達も「何だ何だ」と言っ
て起きだす。

「どうしたの兄さん、そんなに慌てて？」

おっと、リーシャさん？

なんで、俺の真横で寝てたの？

おにーさんの顔が怖くなってるよ？

…俺、何もしてないからね？

ディアスさんは一瞬俺を睨んだが、直ぐに真剣な顔に戻り、部屋の皆に聞こえる声で叫んだ。

「騎士団が…、国が俺達を討伐するために、騎士団を送り込んできた！」

第12話（後書き）

今回の新キャラ（片方は名前だけおにゆう）は、二人共オジサンでした。

…べつに自分、オジサマ趣味とかないですから。
自分、男ですから。

第13話(前書き)

だいぶ遅くなりましたが、やっとUPできました。

第13話

かの奴隷商アルネオが、奴隷達の反抗によつて屋敷を奪われた。

このニュースは、瞬く間に国中に広まった。

奴隷が奴隷商に逆らうという前代未聞の事件。しかもその首謀者は、不思議な力を持つ異国の少年で、魔法も武器も効かない。

この知らせを受けたクルジア国国王は、彼らを討伐するために、国家正規騎士団一個中隊を投入した。

「そんな…」

「まさかこんなに早く国が動くとは…」

俺達は現在、アルネオの屋敷にある執務室の様な場所にいる。

今朝ディアスさんから受けた、国が正規騎士団を派兵したという話により、急遽ここに集まったのだ。ちなみに現在この場にいるのは、俺、ディアスさん、リーシャさん、マーカスさんの四人だ。

俺とディアスさんはこの屋敷にいる元奴隷の皆からリーダーの様に扱われているので、こうしてこの場にいるのだが、リーシャさんとマーカスさんは、『大勢いた方が色々と案も出るだろう』という事

で俺が呼んで、来てもらった。

しかし話し合いは一向に進まず、ただ重い空気だけがこの場を支配していた。

「おしまいだ。騎士団が相手では、いくら俺達が束になろうと…」

ソファに座り両膝に肘を寄せ、両手で頭を抱えるディアスさん。

「兄さん…」

そう呟きディアスさんの肩に手を置くリーシャさんの顔にも、絶望の色が見て取れる。

「終わりって…、何とかありますって！ こっちは百人近くいるんですよ？ 昨日だって、アルネオの手下や衛兵相手に戦えたじゃないですか！」

俺はディアスさんを勇気付けるように、明るく振る舞って言った。

「今度の相手は戦闘の訓練を受けた国の正規騎士団だぞ！ それにアルネオの手下達は殆どが丸腰の状態だったんだ！ しかも俺達の中でちゃんと戦えるのは奴隷剣闘士だった二十数人だけ。どう考えても不利だ！」

「兄さん、そんな怒鳴らなくても…」

リーシャさんに窘められ、ディアスさんは大きく息を吸い、ゆっ

くり吐いた。

それである程度落ち着いたのか、ディアスさんは俺を見て小さく「すまん…」とだけ言っただけ俯いた。

「しかし、ディアス君が言うのも尤も（もつとも）だ。今の我々の戦力では、正規騎士団一個中隊には歯が立たない」

「気まづくなっちゃったディアスさんを気遣ってか、マーカスさんが落ち着いた口調でそう言った。

「今の我々に取れる選択肢は投降するか、玉砕覚悟の抵抗か…。この二つだけでしよう。しかし投降したとして、その先にあるのは再びの奴隷生活か、処刑台行きがせいぜいと言ったところでしょうな」

「そんな、マーカスさんまで…」

「私だって本当は諦めたくはないさ。しかしこればかりはどうにも…。相手は剣や槍で武装し、頑強な鎧まで着込んだ騎士だからね。」

アルネオの手下達とは文字通り、桁が違う」

「桁が…違う……………？」

そこで俺はふと、マーカスさんの言った言葉を思い出した。

剣や槍で武装し、頑強な鎧を着込んだ騎士…。

そういえば、昨日の戦いで分かったんだけど、俺って武器での攻撃が一切効かないんだよな。触れた瞬間に分解できるから。

ただ頭の中で『俺の身体に触れた敵の武器を分解』とだけ念じていれば、剣だろうと槍だろうと矢だろうと、恐らく銃弾だろうと、俺の身体に傷を付ける前に粉と化してしまう。

そしてイオから貰った、空想の武器を現実化する、この千刃の指

輪。

……………あれ？

「ねえねえディアスさん」

「…なんだ？」

ディアスさんは顔を下に向けたまま、ぶつきらぼつに返事した。

「もしかしたらただけど、何とかなるかも」

「そんな気休め…」

「いやいや、気休めとかじゃなくてさ。その騎士団一個中隊？ 俺一人で撃退出来るかも」

「ああ、そうか……………はあ！？」

またぶつきらぼつに言ったかと思うと、数秒間止まった後にガバツと顔を上げた。

あ、驚いてる驚いてる。

「それはえっと……………どういう意味ですか？」

リーシャさんは驚いているというよりも、不思議そうな顔で首を傾げている。頭の上にいっぱい”？”マークが浮かんでそんな感じだ。

マーカスさんは静かに俺の次の言葉を待っている。

「そのまんまの意味ですよ、リーシャさん。その騎士団一個中隊、俺が相手をお願いします」

「しかしルイ、一体どうやって？」

「いやほら、俺って武器による攻撃が一切効かないんだよね。こんな風に……」

そう言つて、俺は床に落ちていた空の酒瓶を手に取り、酒瓶を分解して見せた。

「触れた物を粉々に分解できちゃったりするからさ。敵の武器も、俺に触れた途端に粉々に出来るんだよね」

「あつ！ そういえば、たしか昨日も……」

リーシャさんが昨日のアルネオの手下との戦闘を思い出したのか、そう呟いた。

「昨日……どうしたんだ？」

その呟きを聞いたディアスさんが、リーシャさんに訪ねる。

「昨日アルネオの手下と戦闘した時なんだけど。敵の武器がルイさんの身体を貫いたかと思つたら、あんな風に粉々になっていたの。あの時は何が起こつたか分からないでいたけど……」

そう説明し、「そういう事だったんですか」と言つて俺の方に振り向きリーシャさん。

「しかしルイ君、敵の武器は剣や槍だけではない。騎士の中には、ディアス君の様に魔法を使いながら剣を振るう、魔法剣士もいるのだよ？」

これまで静かに聞いていたマーカスさんが、冷静に言った。

「いや、マーカスさん。それが、ルイには魔法が効かないんだ」

「なんだって!？」

「俺も最初は驚きましたよ。なんせ普通の精霊魔法どころか、俺の聖霊魔法ですら打ち消したんですから」

ん？

なんか分からない単語が出てきたぞ？

普通のせいれい魔法？

ディアスさんのせいれい魔法？

…どう違うの？

「あの一…」

真面目な場面ながらも、俺はその単語が気になって恐る恐る手を挙げて聞いてみる事にした。

だって分からないままだとなんか嫌だし。

「今のってどうゆう意味？ せいれい魔法って？ 魔法って二種類あるの？」

すると、俺の言葉を聞いた三人が同時に止まった。

なんで？

「えっと、その一…」

「なんと言うか…」

なんか気まずそうな表情を浮かべるリーシャさんとマーカスさん。

「ルイ、一般常識だぞ……」

「!? 兄さん!!」

「な、なんだリーシャ?」

呆れた様な顔で言ったディアスさんに対し、急にリーシャさんが怒った。

そして俺の方をチラツと見ると、そつとディアスさんに耳打ちした。

『そんな呆れた様な顔で言わないで。世の中には文字を書けない人もいれば、そういう常識を教えてもらえずに育った人だっているんだから!』

『そ、そつか! いや、すまん……』

聞こえてますよー。

なんか俺かわいそうな人になってる?

そしてディアスさんはゴホンツと一つ咳払いすると、俺の方を向き「まあ、世の中色々あるよな」とか言った。

「フンツ!」

「ぐふつ!」

今度は腹に肘打ちを喰らうディアスさん。

オツチヨコチヨイな人だな……

「すみません。えっと、魔法の事でしたね……」

そう言って笑顔で話を続けるリーシャさんの横で、悶絶している

ディアスさん。

南無…

「先ほどルイさんが言われた通り、この世界には大きく分けて、二つの魔法が存在します」

リーシャさんはそう言いながら、ソファの前にあるテーブルの上に、紙とペンを出した。

「一つは、魔力を持っている人なら誰もが使える、精霊魔法」

そう言って、紙に漢字で「精霊魔法」と書いた。

…つて、漢字!?

俺はこの国（世界共通かはまだ分からない）が日本と同じ文字文化だという事を驚きつつも、リーシャさんの話に耳を傾けた。

「この精霊魔法は、この世界の至る所に満ちている精霊の力を借りて使います。ただし力を借りる代わりに、自らの魔力を対価として支払わなければなりません。」

そして「精霊魔法」と書いた文字の周りに、なんか可愛らしいチビキャラ（精霊？）を描いていくリーシャさん。

「力貸すよー」とか「魔力ちょうだい」とか吹き出しを付けてる。

…リーシャさん？

「そしてもう一つが、精霊よりも高位の存在。聖霊と契約し、大量

の魔力を対価に力を借りる聖霊魔法」

今度は、「精霊魔法」と書いた文字の隣に、「聖霊魔法」と描く。

「あ、もしかしてそれがディアスさんの使ってたっていう魔法？」
「そうだ。ただし先ほどモリーシャが言った通り、その聖霊魔法は大量の魔力を対価に必要とする。その上、神に近い存在である聖霊と契約しないといけないため、使用者は世界でも数少ないんだ」

あ、ディアスさん復活した。

「へ〜、じゃあディアスさんって結構凄い人なんだ？」

「そんな事はないさ。俺は聖霊魔法はまだ下位のものしか使えないからな。その点リーシャは、上位の聖霊とも契約している世界に数少ない上位聖霊魔法使いなんだぞ」

「え！ リーシャさんってそんな凄い魔法使えたの!？」

俺はその言葉に驚いて、リーシャさんの顔をマジマジと見つめる。

「あ、あの…、私は別にそんなつ、大した者では…」

頬を赤くし、ワタワタと慌てるリーシャさん。

「そんな謙遜しなくても。流麗の魔女の二つ名の通り、美しく聡明な立派な魔法使いじゃないか」

「へえ〜、スゲー…」

マーカスさんのその言葉を聞いた俺は、尊敬と憧れを抱いた眼差しでリーシャさんを見つめる。

「いえ、そのつ、はう………」

とうとう耳まで真っ赤にし、俯いてしまったリーシャさん。

誉められたりするのに慣れてないから恥ずかしいのかな？
それとも二つ名が恥ずかしいとか？

ん？そういえば…

「リーシャさんってそんな凄い魔法使いなのに、首輪の魔法は解除出来なかったんですか？」

「それが、あの奴隷の首輪には様々な制約があって、私や兄さんの様な魔法や武術で腕の立つ者は、その力を半分以下に制限されてしまっんです」

「ただし、剣闘の試合の時はその制限も解除されるかな」
「なるほど…。じゃあ今は二人とも全力で戦えるんだ？」

「はい」

「ああ」

自信満々に頷く二人。

「えっと、自分で話を逸らしといてなんだけど、話を元に戻しまし
ようか」

なんか今日はみんな驚いてばかりだな…

「ああ、そうだな」

そう言って、ディアスさんはソファに深く座り直す。

「ディアスさん、その騎士団がこの屋敷に攻めて来るまで、あとのくらい時間がかかるか分かりますか？」

「うむ、そうだな。細かくは分からんが、恐らく明日中には攻めて来るだろう。さすがに今日中と言う事はないだろうな」

「なるほど、じゃあある程度準備する時間はありますね」

「騎士団が攻めて来るとしたら、屋敷の正門からの正面突破しかないだろうね。この屋敷は奴隷の脱走防止のために、出入り口はそこしかないから」

マーカスさんが付け足すようにそう言った。

「じゃあ、正門さえ押さえ切ればなんとかなるか………よしっ！」

俺はこの屋敷の構造、こちらの戦える人数、ディアスさんとリーシャさんの実力を考慮し、一つの作戦を考えついた。

「これから皆に、俺の考えついた作戦を説明します。これが上手くいけば、ヤツらに一泡どころか三つも四つも泡を吹かせてやれますよ」

そう言っただけで俺はディアスさん、リーシャさん、マーカスさんの顔を順に見て、ニヤリと笑った。

「この世界に、革命を起こしてやりましょう」

第14話(前書き)

日間ランキングを見てみたら、なんとベスト50位に入っていました！
わたくし豚割としては、嬉しい快挙です。

これも日頃見て下さってる皆さんののおかげです！

第14話

「ふう〜、疲れた…」

ディアスさん達との話し合いを終えた俺は、自分に宛がわれた部屋にやってきた。

話し合いは無駄話も多様に含まれてはいたが、後半はしっかりと作戦内容の確認とかもしていた。

まあぶつ通しでやっていたわけではなく、ちゃんと昼飯休憩とかも挟んでたけど。

おかげでいつの間にか日が沈みかけていた。

本当はこの後、明日のための準備やら何やらが色々あるんだけど、「ルイは明日の作戦の要なのだから、後は俺達に任せて休んでくれ」とディアスさんに言われたため、お言葉に甘える事にした。

なんか珍しく頭を使いまくったせいかな、やたら疲れたし…

俺ってば肉体労働派だから、頭脳労働とか向かないからね！。

あ、ちなみにこの部屋、俺がアルネオに剣闘士として雇われる事を想定して（第6話参照）、アルネオが用意していた部屋だそうだな。用意周到なこつた。

「ふわぁ〜…。とりあえず、風呂にでも入るか〜」

俺は欠伸を噛み殺し、重い体を引きずりながら部屋に設置してあ

る浴室の扉に手をかけた。

「キヤツ！」

…ん？

キヤツ！ つてなに？

ボーっとした思考回路のまま、声のした方に顔を上げてみる。

つていうか、俺は相当疲れてたんだな。

疲れた、風呂 脱衣場 女性の悲鳴と言ったら、もうアレしかないよね？

「……………」

「……………」

でも俺の脳はそんな単純な思考さえ出来ないほど疲れていたワケです。

何も考えずに声のした方を見たワケです。

「えーと……………」

「あ……………」

別に目の前にいる、金髪紅眼の幼女、現代っ娘ミィハー変態神様の裸を見ようとしたワケではないんですよ？

「…これは事故だ」

「言いたいたことは…それだけ？」

タオルで身体を隠し、プルプルと震えながら顔を俯かせてそう言ったイオ。

「久しぶり、イオ！　じゃっ！」

俺はシュタツと手を上げ、爽やかな笑顔で何事もなかったようにその場を去ろうとする。

「天誅————！！」

「あぎゃ————！！」

「スイマセンデシタ」

The DOGEZA!

「許さない！」

地面に顔を擦り付ける俺の前で、不機嫌そうに頬を膨らませて椅子に座っているイオ。

「いやホントすいません」
「フンッ！」

今度はそのままプイツと横を向いてしまった。
いや、その容姿でそれをやられても可愛いだけなんだけど。

「っ!? か、可愛いって! そんな事言っても許したりしないんだからね!」

「言ってない。思っただけ」

「なに?」

「なんでもございませぬ、はい。ごめんなさい」

……いや、っていうかさ。

「なんでイオがいるの?」

うん、これは最初にぶつけるべき質問だよね。

「なに? 私がいたら悪いの?」

「いやいや、そうじゃなくてさ。なんでイオが俺の部屋に、しかも部屋主の俺を差し置いて風呂に入ろうとしたのさ?」

そう聞くと、イオをはちよつとバツの悪そうな顔で答えた。

「…キミの様子を見に来ただけど…」

「で、なぜに風呂?」

「その…、キミがなんか大事な話してるみたいだったから、キミの部屋で待ってよっかなー、って思って…」

「思ってた？」

「でもキミ帰って来るの遅いし、私昨日忙しくてお風呂入ってなかったから…」

「なかつたから？」

「ちよつとお風呂入って、サッパリしてからにしようかなーって…」

ああ、なるほど。

「おかしくね？」

「うっ…、そこは否定出来ない…」

これってむしろ、俺が被害者なんじゃね？ という思いをイオに抗議してみる。

だってさあ、普通考えないって。

疲れて自分の部屋に帰って来て、風呂に入ろうとしたら神様が全裸で待ってるなんて。

「そ、その言い方はなんか語弊があるかも！」

「言っていない、思っただけ。っていうかそもそも、俺は見たくて見たワケじゃないのにさー。ロリ属性でもなけりゃ、貧乳属性でもないんだから」

「ひん…！ また胸のことバカにした！」

「バカにしてませんー。俺はただ、イオの胸が小さいと言っただけですー」

「ムキー！ それがバカにしてるんでよー！ だいたい、あんな年とつたら垂れるだけの脂肪の塊のどこがいいのさキミはー！」

「脂肪の塊だとう！？ 夢と浪漫の詰まった、奇跡の塊だぞあれはー！」

「だいたいキミは！(以下略)」

「へへーん、そんな事言っつて(以下略)」

やいのやいの!!

累V S イオ

乳討論戦争(大人気ない喧嘩) 勃発

…30分後(´・`・´)

「ハアハア…」

「ハアハア…」

ふ、不毛だ…

ってゆうか、なんでいつの間に乳の討論してんだろ俺達。

「そ、それもそうかも…」

「あっ、また俺の心を…って、もういいや」

なんかもうツッコむのも疲れた…。

あゝ、喉渴いた。

「あ、そうそうキミさあ、ちょっと前にこの世界の神様と会わなかった？」

「ん？」

テーブルにある水差しからコップに水を注いでいると、不意にイオがそう聞いてきた。

「会ったよ。ヒカードとかいう、なんか渋いスーツのオッサンに「オッサンって…。で、何か言われた？」

そう言っつて、イオは部屋の隅に置いてあるベッドにジャンプしてボフツと座った。

「ん〜、特に大した事は…。ただ神様がどうやって生まれるかとか、この世界の神様の性格？とか」

「ふ〜ん、ホントに特に大した事は言っつてないね」

そう言いながら、今度はベッドにうつ伏せに寝て、枕を抱いて足をパタパタさせてる。
お行儀が悪いよー。

「あ、あと、この世界と契約するための仲介を行ったのは自分だっつて言っつた」

「はあっ!？」

抱いていた枕を投げ捨て、ガバツと起き上がるイオ。
あー、俺の枕がー。

「なにそれ!？」

「な、なにそれっつて…。何が？」

「世界と契約するための仲介を行ったって…、それってつまり世界に干渉出来る力を持った神様って事だよ？ そんな凄い神様と会ったの！？」

「う、うん、そうだけど…。あのオッサンってそんな凄い神様なん？」

たしかにダンディズムオーラはばしばし出てたけど。

「そりゃ凄いよ！ 世界に干渉出来るレベルの神様なんてそうそういないよ！ もはや最高神クラスだよ！？」

おう、そうやって聞くと確かに凄いかも。

「でもさあ、そんな凄い神様なら、なんで自分でこの世界の事何とかわからないんだ？ 奴隷とか反対派だつて言ってたけど」

「ん〜、流石に最高神クラスの神様でもそれは出来ないんだよね。

私達神様は人の運命をちよつといじる事は出来るけど、世界の運命をいじる事は出来ないんだよね。世界の運命を変えられるのは、その世界に住む生物だけだもの」

「運命ねえ…。」

なんか壮大な話だなあ。

俺はイオがさつき投げ捨てた枕を拾って、イオにぽいつと投げた。

「じゃあ俺がこの世界に来たのも、その運命ってやつなの？ どの神様だよ俺にこんな運命背負わせたの」

「え？ キミは違つよ？」

「へ？」

違っつて、何が？

「言わなかったけ？ キミがこの世界に飛んで来ちゃったのはイレギュラーだったって」

「……聞いてませんが」

「あれ？」

あれ？つてなんだ、あれ？つて。

でも何か、そんな雰囲気の話は言ってた様な。

つか俺、一番大事な事を今まで聞いてなかった気がするんだけど…

「ねえ、俺つてなんでこつちの世界に飛ばされちゃったの？」

「え？ それは、え〜つと…」

「なぜ目を逸らす？」

「そ、逸らしてないよー」

「なあなあ、そういえば何でイオが俺のところに派遣されてるの？」

たしかこの指輪貰った時にイオ言ってたけど、能力を付加するよう
に言われたけど、やり方知らないから変わりに持って来たって言う
てたよな？ なんでその時に別の神様に頼まなかったんだ？」

「そ、それはそのー…」

いつの間にかベッドの上で正座状態になっているイオ。
どー見ても後ろめたい事がある感じだ。

まさか。

「…イオ、俺に何か隠してるだろ？」

「隠してないよ〜」

おい、声が裏返ったぞ。

「イーオー？」

「あはっ、あはははは〜」

イオの目をジッと睨んで圧力をかけると、イオは乾いた笑いを発して、急にガバツと土下座をした。

「ゴメンナサイ」

「うむ、理由を聞こう」

ついに観念したイオは、事のあらましを説明し始めた。

曰く、俺が異世界に飛ばされたのは、運悪く次元の歪みに飛び込んでしまったからだとか。

更に、その次元の歪みが発生した原因は、当時その地区の管理を任されていたイオが、次元演算何チャラ機とか言う機械の操作をミスってしまったせいだとか。

今まで、異世界から召喚され次元を渡って行った人は居るが、こんなケースは初めて、前代未聞らしい。

「…というワケです」

「お、おまつ、おまえ…」

ふははっ、チクシヨウ。

あまりの事実にも口の端の筋肉がピクピクいつてるぜ。

きつと俺は今、そうとう引き攣った笑顔をしているだろう。

「だから上司に、『お前が責任を持って死ぬまで管理しろ』って言

われて、私が来た次第なのです……」

「はぁー……。まあ、やっちゃったもんは仕方ないか。もう取り返しがつかない事だしな」

大きな溜め息を吐いて、頭をポリポリ掻きながら言う。

諦めが早い性格ってよく言われます。良い意味でね！

「…許してくれる？」

恐る恐るという風に此方を窺い、涙目でそう聞いてくるイオ。

うっ…、何か俺がイジメてるみたいじゃんか。

「分ぁーかった、分かったから！ そんな目で俺を見ないでくれ。

許す！ 許すから」

「ふえええ〜」

ああもう、完全に泣いちゃったよ。

男の部屋のベッドの上で幼女が泣いてるとか、こんな所誰かに見られたら完全に誤解されるって。

あれ？

こつゆつ事考えると、フラグ立つんじゃないか？

あ、なんか嫌な予感…

ガチャ

「ルイさん、夕食の準備……が……」

「……………」

「ふえええ〜ん」

オレ、オワタ。

第14話（後書き）

ルイ君ってば最近女の子と絡んでばかりのような…

バランス考えないとな

第15話（前書き）

長いこと投稿休止してて申し訳ありませんでした。

とりあえず、豚割は生きています。

ただ軽いスランプに陥っていただけです。

さて、15話です。

今回はなんか書きたい事をツラツラと書いていたらこんな長さで…
ホント、安定しないヤツでスイマセンデス。

感想、誤字脱字等ありましたら、遠慮なくお願いします。

第15話

「……………」

「あ、リーシャさん。これは、あの…え」と

「ふええええ…」

ハイツ、嫌な予感的中う！

なんかこの世界に来てから、俺の嫌な予感ってワリと当たってる気がするんだけど、気のせいだよな？

リーシャさんが汚物を見るような目で俺の事を見てるんだけど、気のせいだよな？

「……………」

…気のせいじゃなかった。

ものっ凄い見えます。

「…ルイさん？」

「ハイ」

ヒイッ！

その目で口だけ笑顔とか、めっさ怖いんですけどリーシャさん!?

「誰ですか、その子？」
「え、え〜と…その…」

せ、説明のしようが無い。
どないせいつちゆうねん。
実はこの娘、神様なんだあ！ とか？

いやいや、ないって。
ちっちゃい娘を自分の部屋に連れ込んで、ベッドの上で神様プレイ
かよ！

危険人物だよ！

ってというか神様プレイってなんだよオレ！
あまりの危機的状況に脳内イカレたか？
落ち着け、オレ。
クールに、クールにいこう。
イツクール。

ヒッヒッファー、ヒッヒッファー…。

「さあ？ 誰でしょうね？」

何だそれえええええ！

なに言ってるの俺のクチ！
脳とリンクしてませんよー！

ビキッ

ドアノブに手を掛けたままのリーシャさんの手元から、不穏な音がした。

そのドアノブ、鉄製なんですけど？

「何で知らない娘がルイさんのベッドの上で泣いてるんですか？何でベッドが乱れているんですか？」

そ、それはイオが自分でグチャグチャにただけであって。

「その、これは…」

「説明して下さい」

リーシャさんが見た事ない顔になってるよう。

助けて神様あ。

っていうかイオ、いつまでも泣いてないで何とかしなさいな！

「ふえええん…」

…ダメだこりゃ。

この状況を打開するには、え〜と、え〜と！

「ち……」
「ち？」

「ちやうねん」
「……」

「………テヘッ」
「死んで下さい」
「チヨツ、落ち着いてリーシャさん！ とりあえず殺意むき出しの
目と、その右手の水で出来た剣みたいなの仕舞って！」
「大丈夫です。ルイさんだけに責任を負わせません。後で私も
「正気に戻ってリーシャさん！」

ああもう！
早く戻って来てイオー！
もうお前に頼るしかないんだからー！！

「ふえ？」

あ、泣き止んだ。
俺の心の叫びが聞こえた？

「…聞こえた」

未だ涙の浮かぶ目をゴシゴシと擦り、コクリと頷くイオ。

「と、とりあえず、リーシャさんに説明を」

「何をブツブツ独り言を言っているんですか？ 天からのお迎えでも来ましたか？」

「っていうかりーシャさん性格変わり過ぎ！」

「ダークリーシャさん怖過ぎです！」

「ふ〜ふ〜ふ〜、今息の根を止めてあげますからね」

「某青狸のような笑い声をあげて此方にニジリ寄って来るリーシャさん。
殺られる！

「魔法が効かないのは分かっているけど、なぜだろう、殺される予感！」

「ちよつ、ちよつと待つてお姉さん！」

「イオが俺とリーシャさんの間に慌てて入り、リーシャさんを止めにかかる。」

「あら、泣き止んだのね。大丈夫よ、変態のお兄さんは私が退治してあげるから。だから貴女は暫く目を瞑って耳を塞いでて」

「いや、そうじゃなくて！ この人は何も悪い事してないから。悪いのは私なの！ 私がちゃんと累にシて（・・・）あげられなかったのがいけないの！」

「……イオさんや、それは火に油どころか灯油ですよ？」

「こんな年端もいかない少女にナニをやらせようとしたんですか！？」

「ち、違うつ、俺は何も！ イオ、言い方が悪過ぎるって！ それじゃあ逆効果だって！」

「え？ えと、累が（異世界に）跳んじゃったのは私のせいなのっ」
「なるほど、あどけない美少女を前にして理性が跳んでしまったと。獣ですかルイさんは？」

「ちがー！ 俺は正常ですー！」

「分かっていますよ。ええ、分かっていますとも。ルイさんは私くらの年代の女性には興味が無いんですよね？ 小さな女の子にしか興味が無いんですよね？ だから私なんかには目もくれないんですよね!？」

言葉の後になるにつれて、段々と語気が強くなるリーシャさん。

「ルイさんがこれ以上罪を重ねる前に、私が全てを終わらせてあげます。大丈夫、ルイさん1人では逝かせませんよ。後で私も後を追います」

「ちよつと待つてリーシャさん！ 色々と待つて！ とりあえず、

俺の話を聞いて。ヤンデレないで！」

「さよならルイさん！」

「ちよツ、ギャー！」

リーシャさんが、手に持った水剣を振りかぶる。

「……」

瞬間、金色の影がフワリと俺の前に現れる。

「滅っ」

イオが、俺とリーシャさんの間に滑り込んで来たのだ。

それはどこか緩慢な動きに見えたが、一瞬で俺とリーシャさんの間

に入るほどの速さだった。

そのイオは、リーシャさんに向け手を翳した状態で凜と立っている。そしてリーシャさんの手に握られていた水剣は、いつの間にか消滅していた。

「……………え？」

「貴女ちよつと落ち着きなさい」

あまりに突然の出来事に目を点にしているリーシャさんに対しそう言っ、リーシャさんの額に手をスツと置く。

「……………っ!？」

するとリーシャさんは突然気が抜けた様に地面にペタンと座り込み、再び目を点にしている。

「え？　いま…あれ？」

「落ち着いた？」

ニツコリと微笑み、リーシャさんにそう語り掛けるイオ。

「あ、貴女はいつたい…」

「それはこれから説明するから、とりあえず椅子に座らない？　そのキミも、ポケツとしてないでお茶でも淹れてっ」

「うえ？　おれ？」

いかんいかん、ついポケーっとしてしまった。

「他に誰がいるのよ。ほら、二人とも動いた動いた！」

そう言っつてパンパンと手を叩き俺たちを促すイオ。

「は、はい！」

異口同音に同時に返事をし、ワタワタと動き出す。

「…で、少しは落ち着いた？」

ソファに浅く腰掛けたイオが紅茶を一口含み、手にカップを持っ
たままりーシャさんに話し掛けた。

「は、はい…」

確かに落ち着いてきてはいるようだが、未だに当惑の眼差しをイ
オに向けるりーシャさん。そりゃそうだ。

なにせ見た目は14かそこらの少女が、魔法力で定評のあるりーシ
ヤさんの魔法をいとも簡単に無力化して見せたのだから。

そして、幼さを感じさせないその落ち着き。

見た目と中身が相反しているイオに対し、りーシャさんはどう接し
ていいのか分からずにいた。

「まあ、私みたいな子供が精霊の強制解除やこんな喋り方をしてくれ

ば、普通は驚くよね」

「ッ!? い、いえそんなんっ…」

苦笑しながらイオがそう言つと、一瞬ビクツと肩を震わせ慌てて否定するリーシャさん。

つていうか

「おいイオ、リーシャさんの心読むなよ…」

「仕方ないでしょ。私のこのチカラは常に解放状態なんだから。まあどうしてもって言うんなら、常にキミの深層意識を読んでれば、他の人の心を読む余裕は無くなるけど?」

「すみません、勘弁して下さい」

深層意識まで読まれてたまるか。

「はいはい、じゃあキミはもう少し静かにしててね」

「うん」

子供に言い聞かせる様に言われてしまった。

「さて、あんだだけバタバタしててなんだけど、一応こう言わせてもらつわ。はじめまして、私の名前はイオ。まあ偽名だけど、本当の名前を言つとその人が驚くだろうし、貴女は何も分からないだろうから、敬愛と尊敬の念を込めて、イオと読んでちょうだい」

「偉そうだなおい。…つていうか、偽名!?!」

神様って偽名使う必要あるのか?

「偉そうじゃないの、偉いの。そしてキミ、次私が話してる最中に茶々を入れたら、幼少時の恥ずかしい過去を暴露するよ」

「ふん！俺に恥ずべき過去などないわ！」

「あれは小学3年の頃。クラスメイトと教室内で遊んでたら、誤って女子生徒のスカートを全開に捲ってしまったって、クラス中から変態のレッテルを…」

「スイマセン、ユルシテクダサイ」

ソファから飛び降りて、床に額をこすりつけて謝罪する俺。

違うんだよ、あれは本当に事故だったんだよ。

知ってる？

小さい子供って意外に残酷なんだぜ？

「何故イオさんがルイさんの小さい頃の事を知っているか気になるところですが、先に私の自己紹介ですね」

そう言っつて、リーシャさんは自分の胸に手を当てる。

「私の名はリーシャ。リーシャ・ハーネスです。この大陸では流麗の魔法の二つ名で知られています」

「そう、よろしくねリーシャさん」

ニッコリと微笑み、右手を差し出すイオ。

しかしリーシャさんはその手を取らずに、訝しげな目でイオを見る。

こっちの世界には握手はないのかな？

「…貴女の名は分かりました。そして何となくですが、悪い人では

ないというのも分かります。しかし、貴女はいつたい何者ですか？
先程の私の精霊魔法を一瞬で解除したあの技。そして、興奮状態
にあった私の体の力と、精神の力を奪った技。どちらも、貴女のよ
うな小さな子供が使える技術ではないはずです。それをあんないと
も簡単に……」

「ん……、やっぱりそう来たかー」

所在なさげだった右手で、ポリポリと頭を搔いて困った顔をするイ
オ。

一瞬チラツと此方を見て、「どうしよつか？」と視線で聞いてくる。

俺に聞くなよ。

「（私は神様だー、って堂々と正体明かせばいいじゃん）」

とりあえず、俺も視線でそう返してみる。

「（そうなんだけどねー。でも、そう簡単に信じてくれる人なんて
普通いないって）」

「（俺は信じたけど？）」

「（キミと一緒にしちゃダメでしょ）」

なんだそら。

褒められてる？ 貶されてる？

「（両方と言う事で。あ、ちなみにこれ、私の力で思念会話してる
から。目と目で通じ合ってるわけではないので、変な勘違いをしな
いように）」

「（……………）」

「……あのー、それで、私の質問には答えて頂けるんでしょうか？」
「あ、ごめんなさいね」

自分の質問そつちのけで見つめ合っていた俺達に、リーシャさんが若干機嫌の悪い顔で話し掛けてきた。

なんか背後に黒いオーラが…

「え〜と……、ん〜、なんて説明すればいいのかな」

こめかみに人差し指を当て、ん〜ん〜唸るイオ。

そしてリーシャさんの方をチラツと見て「ま、いつか」と呟き、リーシャさんに向き直る。

「リーシャさん、これから私が言う事は全部本当の事。だから落ち着いて聞いてね？」

「…？ はい」

リーシャさんは一緒キョトンとしたが、直ぐに姿勢を正して頷いた。

「私は、この世界の人間ではありません」

「この世界……え？」

「更に言えば、そこに居る彼もこの世界の人間ではないの」

「ルイさんも？ ……え？ あの、この世界の人間ではないって、どうゆう事ですか？」

明らかに動揺しているリーシャさん。

まあ普通は動揺するよね。

おかしな人だと思われただけマシだ。

「私と彼は、ここではない世界、異世界からやって来たの」

俺はやって来たって言うより、誰かさんの過失で跳ばされたんだけどね。

イッテ！ 向こう臍を蹴るな！

「異世界……。えっと、国でもなく大陸でもなく、世界？ この世界とは異なる世界からですか？」

「その通りよ」

「そんな、まさか……」

信じられない、といった顔をするリーシャさん。

イオから俺に視線を移す。

「信じられないかもしれないけど、これは事実です。俺とイオはこの世界の人間じゃあない」

「……………」

沈黙が場を支配する。

どれくらい時間がたっただろうか、徐にリーシャさんが口を開いた。

「なぜ……」

「ん？」

「もしルイさんやイオさんが、本当に異世界からこの世界にやって来たのだとしたら、なぜお二人はこの世界に来たのですか？ この世界には奴隷が、死が、哀しみが、苦しみが溢れています。なぜ、わざわざこのような世界に？」

「……」

その言葉に、俺とイオは無言で目を合わせる。

それこそ、どう説明しよう。

只単に「こいつのミスでこの世界に跳ばされちゃっただけで、選んでこの世界来たワケじゃないんだ（テヘツ）」と言ってもいいのかもしれないけど、その場合、イオが神様だという事をバラさなければならぬ。

まあ他に誤魔化しようはあるのかもしれないが、リーシャさんにはあまり嘘をつきたくないしなあ……。

「……」
「……」

再びの沈黙。

「ん~~~~、だばらあっ!?!」
「うわっ!?!」

イオがポンコツになった!?

難しい顔をして唸ってたと思ったら、急に立ち上がって雄叫びをあげたのだ。

「面倒くさい面倒くさいめんどくさーい！ あーもうメンドクサイー！！ これだから神様なんてやってらんないのよ！」

ちよっ、おま！いま神様って！

さらっ！と自分の正体明かしたよね！？

「それがなに！ 私はサラリーマンですって言ってるのと同じようなもんでしょっ」

「いやいやいやいや、全然同じじゃないし。サラリーマンと神様とか、規模が違いすぎるだろ。月とスツポンドころか、太陽とアリンコだよ」

全国のサラリーマンの方ごめんなさい。

「えっと……、あの、神様とは？ なぜイオさんは急に叫び出したのですか？」

「あー、その、イオが叫び出したのについては、ただ単にコヤツに責任感とか忍耐とかいうものが不足している如何しようもないヤツだからとか、そんな本当にどーしようもない理由ですけど、神様っていうのは……」

「いい、それは私が言うっ！」

俺がそこで言葉を濁すと、イオがビシッと手を出してそう言った。

「リーシャさん！」

「は、はい……」

キッと視線をリーシャさんに向け、リーシャさんの名前を呼ぶイオ。リーシャさんがその声に反応し、ビクッと肩を震わせ返事をした。

「これから私が話す事は、貴女の事を秘密の守れる人だと信用して明かす、とても重要で秘密シークレットなお話です。

貴女はこの会話の内容を、誰にも話さないと誓いますか？」

”信用して”って……、勢いで言っちゃったくせに何を今さ
いたいっ！ だから向こう臍を蹴るな！

「あ…、ええと」

急にそんな事を言われたリーシャさんは、困った顔でこちらを助けを求めてきた。

ん〜…

「こんなワケの分からない事に巻き込んですみません、リーシャさん。でももし、リーシャさんが真実を知りたいなら、俺(+)の事を知りたいなら、ここはイオの話聞いてほしい。まあでも…」

そこまで言っつて、俺は頬を人差し指でポリポリと掻きながら続ける。

「俺としてはリーシャさんには全部知っておいてもらいたいと言っつか、リーシャさんに嘘はつきたくないの、聞いて欲しいと…言っつか…」

だんだん尻すぼみになっていく俺の声。

「…へタレ」

るさい、ポンコツ神様。

とりあえず言いたい事は言ったので、リーシャさんの反応を見ている。

「……………／／／」

何故か顔を若干赤くして俯いてしまっている。

知恵熱？

「…朴念仁」

「？」

イオが何かポソつと言ったが、何を言ったのかは聞こえなかった。まあいつか、どうせイオだからロクでもない事だろ。今はそれより…

「リーシャさん？」

「は、はい！ ええと、その、ルイさんがそう仰るのなら…」

一瞬ワタワタとしたが、直ぐにキリツとした顔に戻りイオの顔を見る。

「お願いします。私に、あなた方の秘密を教えてください。私リーシャ・ハーネスはこれからの話を一切他言しない事を聖霊に誓います」

それを聞いたイオは、むふんつと満足そうな笑みを浮かべ、椅子に座り直した。

第15話（後書き）

なんか踏んだり蹴ったりなルイですが、やるときゃやる漢なんです。
生暖かい目で見守ってやって下さい。

第16話(前書き)

微調整のお話ですので、だいぶ短いです。

m 感想、誤字脱字等ありましたら、遠慮なくお願いしますm ((

第16話

「と、言うワケなのよ」

何が” と、言うワケ”なのか、いくら何でも端折り過ぎなの会話の内容を説明しよう。

まあそんな難しい話でもないのだが。

要はリーシャさんに、俺がこの世界に跳ばされた経緯（海で叫んだとか、女の子にフラれたとかの話は省いて）とか、イオが神様っていう事とか、イオが俺の部屋で泣いてた理由とか、元の世界の大まかな概要を説明したのだ。

プレゼンテット byイオで。

あれ？ コレって難しい話かな？

まあいいや、テキストバンザイ。

というワケなんです。

「……はあ、俄には信じがたい話ですがその、見た事も聞いた事もない、引き手がいないのに走るジドウシャですとか、空を飛ぶヒコウキ等のお話を聞くと、やはり、異世界なんだという気はします」
「まあ、どの世界の人も皆そうよ。普通は異世界から来たなんて話す人間がいたら、戯れ言と無視するか、頭がおかしい人と思って憐れむかだからね。その点リーシャさんは素直だし、理解力も良いから助かるわ」

「はあ、ありがとございます。でも私が一番驚いたのは、イオ様が神様だという事です」

「まあ、どの世界の人も皆そうですね。普通はこんなチンチクリンが神様なんて名乗ったら、戯れ言と無視するか、頭のおかしい人とおもぶへあっ……!!」

神罰と言う名のドロップキックが俺の横っ面に直撃した。

「失礼な事を言う類人猿は置いて、別にイオ様なんて畏まった呼び方しなくていいよ。普通に呼び捨てで構わないから、私あんまり堅いの苦手なのよね」

「いえ、しかし……」

そこは譲れないのか、食い下がるリーシャさん。

「そうですねリーシャさん。だいたい神様なんて言っただって、中身も外見も見た目通りのチンチクリンなんですから、畏まったところでばぴゃあ……!」

天誅と言う名のフランケンシュタイナーが俺の脳髓を揺さぶる。

「それにほら、私としてもリーシャさんとは友達として接したいというか、まあそんな感じだから、呼び捨てでお願い。ね、リーちゃん?」

「り、リーちゃんなんてそんな……。えと、それじゃあ。い、イオちゃん?」

恥ずかしそうに頬を若干紅潮させ、上目遣いにイオを見てそう言うリーシャさん。

うむ、もし俺があれをやられたら悶死してるな。

それはそうと、体が動かないぜ。

「キヤー！ もう可愛い！」

そんなリーシャさんを見て、リーシャさんに抱き付き頬擦りするイオ。

「はわわ、あの、い、イオさん!？」

「もう、違うでしょ？ さんじゃなくて…」

「……イオちゃん」

「ああもう可愛い過ぎる！ お持ち帰りしていい？」

どこの危ないオッサンか。

前言を撤回しよう。

外見はともかく、中身は変態のロクデナシだなああたたたたっ！
背骨が折れる！！

ロメロスペシャルって普通こんな痛くないだろ！！

数分後、部屋の隅に一つの粗大ゴミができた。

「さてと、じゃあ私はそろそろ戻るかな」

暫く三人で談笑した後、イオはソファから立ち上がってそう言った。

「え、もう帰るの?」

「うん、まだ仕事も残ってるし、見たいテレビもあるし(こっちは重要)」

ちなみに今話し掛けたのはリーシャさん。

この数十分の間にだいぶイオと打ち解けたみたいで、端から見れば普通の友達だ。

「そう、残念ね。またこっちに来た時は、私にも会いに来てね」

「うん。むしろリーちゃんに会いにくるよ」

「こらこら、俺と言う名の仕事は放棄するなよ」

「そっちはついでで」

「ついで!?!」

いやホントどうしようもない神様だな。

仕事くらいきつちりやりなさいな。

仕事キツチリ!(古いか)

「それじゃ、またね。明日の成功を祈ってるわ。まあ状況を見た限り、今回はルイ一人いれば簡単そうだけど」

「うん。それじゃあ、また」

笑顔で見送るリーシャさんに、手を振りながら光の扉に走り去るイオ。

そして去り際にリアットを喰らわされる俺。

うむ、学習した。

イオに口答えすれば、プロレス技がとんでくる。

イオが去ったあとの部屋は、どこか閑散として、リーシャさんは少し物悲しそうな顔をしていた。

「行っちゃいましたね。ホント、神様とは思えないような天真爛漫なコでしたね。それはそうと、ルイさん大丈夫ですか？」

「作戦の前に死ぬかも……」

第16話(後書き)

なんかおふざけな話が続きましたが、次回からは真面目にやります。
やらせていただきます。

第17話（前書き）

感想、誤字脱字等ありましたら遠慮なくお願いします。

第17話

「……………ええと、もしかしてお前、ルイか？」

ディアスさんが目を点にして、額に若干の汗を垂らしながら訊ねてくる。

『そうですよ。それ以外の誰に見えるっていうんです？』

俺はその質問に対し、首を傾げて真面目に答える。

「……………よろい」

『ん？』

ボソツと呟くディアスさん。

俺はその言葉が聞こえなくて、つい聞き返した。

「いや、と言うかお前、いま自分がどんな格好をしてるか考えてみる。そんな全身鎧の姿で見えるとか聞かれても、そうそう答えられるワケがないだろう」

先ほどの固まった姿勢から一転して、ディアスさんは「はあ〜っ」

と息を吐いて肩を落とし、額に手を当ててそう言った。

『……え？ あ、そうか。そういえばそうだった』

ディアスさんの言葉を聞き、漸く自分の今の格好を思い出した俺は、自分が全身に纏っていた鎧の兜だけを外し、ディアスさんに顔を見せた。

「いやあ、あんまり着心地が良いもんだから、鎧を着けてるって事を忘れてましたよ」

「まず兜の視界で気づくだろ」

「いやいや、信じられないでしょうけど、コレ普通の時と視界変わらないんですよ」

俺はそう言いながら、小脇に抱えていた兜をヒョイと持ち上げ、ディアスさんの前に出してみせた。

「そんなに良い鎧なのか？」

「ええまあ、完成系と言われるほどのモノですからね」

ちなみに今現在俺が身に着けている鎧は、某小説の五話目に出てくる刀的な鎧さんだ。

さて、今更だが、なぜ俺がこんな版權ギリギリな行為をするに至ったのか、少し説明しよう。

まず昨日みんなで話し合った作戦だが…、いやまあ、作戦と呼ぶのもおこがましい内容なんだがね……

作戦そのいち。

端的に言つと、皆を安全な場所に避難させて、俺1人で敵陣に突撃というものだ。

まあ俺には武器も魔法も効かないし、普通の人間の身体能力を軽く凌駕しているからこそ、そんなムチャな作戦を提案したのだが。しかしいくら武器も魔法も効かないとは言え、素手で殴られたら痛い。

それに数の差を利用され、抑えこまれたら一卷の終わりだろう。

というワケで、千刃の指輪より創りだした、この鎧の出番である。

この鉄壁の鎧さえあれば、殴られても蹴られても痛くない。

俺はただ戦場を文字通り、縦横無尽に駆け回るだけで敵を掃討できるしね。

それにこの鎧、俺のアイデアでちよつとした能力を付加している。

ホント、イメージ通りの武器を具現化するとか反則^{チート}過ぎるよね。

そういえばガン〇ムって武器に入るのかな？

まあ今はその話は置いていて。

その付加した能力とは、鎧の全身に雷を纏う（オン・オフ可）というものだ。

これで、大勢の敵に無理やり抑えこまれるという心配がなくなる。

ちなみにこの雷。雷みたいなくとかの比喩ではなく、マジで雷です。ポルト数はんぱないです。

まあ騎士の人達は属性魔法耐性の付いてる鎧を着ているらしいから死にはしないでしょ。

まあ下手したら、とかあるかもしれないけど、そんなん知らん。いちいち他人の生死なぞ心配してられるか。

さて、長くなつたが…

作戦そのに。

いくら俺が1人で騎士団一個中隊を相手取るといっても、やはり限界はある。

一度に全部の敵を相手には出来ないからだ。

そうなれば、打ち漏れた敵が俺をすり抜け、皆のところまで行くという心配がある。まあ2人や3人なら、ディアスさんやリーシャさんがいれば問題ないだろうが、もしもという事もある。

そのため皆が避難するのは、高い塀で囲まれた屋敷の中だ。

しかも塀を越えたとして、屋敷に入るには様々なトラップを掻い潜らなければならぬ。

そして敷地内への唯一の侵入経路である正門は、昨日のウチに木やら鉄板やらで補強しており、更に正門の外側には、土魔法で積み上げた頑丈な土壁がある。

とまあ、これが作戦の内容である。

んで、あと数時間もすれば作戦開始、というか敵が攻めてくるので、俺は鎧を着て準備をしていたのだ。

「そうか、しかしそれが優れた鎧だというのは分かったが……。ルイ、一つ聞いていいか？」

「はい？ なんですか？」

「せっかく鎧を着て準備をしてくれたのはいいが、どうやってそれを着たまま門を越えるんだ？」

「……………あ」

うん。今の俺の身体能力なら、身一つでならあの門をなんとか飛び越える事は出来るだろうけど、この重い鎧を装着したままじゃ……………

「向こうで着け直します」

そう言っつて、俺は鎧を指輪の状態に戻した。

「うむ、それがいいだろう」

「兄さん、ルイさん、食事です」

とそこへ、リーシャさんが大きめのカゴにパンとスूपを入れて持って来てくれた。

「ああ、ありがとうリーシャ」

「いただきます」

パンはいつぞやのボソボソのやつとは違って、焼きたての香りが食欲をそそる、ふかふかのパンだった。

スープは、シンプルな豆のスープだが塩加減が絶妙で、パンを浸して食べても美味しい。

「うまうま!」

「うむ、スープも美味しいな。流石リーシャだ」

「ほえ? もめみーみやまんまむむつまも?」

「……飲み込んでから喋れ」

ディアスさんに窘められてしまった。

「……んぐつ、これリーシャさんが作ったの?」

リーシャさんって料理上手だったのか。

「ええ、パンは他の方達と作りましたが、スープは私が作らせていただきました。お口に合いますか?」

「凄く美味しいですよ。毎日食べたいくらいです」

「ま、毎日だなんて、そんな……/ / /」

リーシャさんは両頬に手を添え、何故か嬉しそうな顔をしている。

「る、ルイさんさえよけれ「許さん」」

リーシャさんが何かを言おうとしたところに、ディアスさんが割って入った。

「……………」

無言でディアスさんを睨み付けるリーシャさん。

「許さん」

とつか、ディアスさんはさっきから何の事を許さんと言っているのだろうか？

「……………これから兄さんにはご飯を作つてあげませんっ」
「……………!!!」

ちよつと拗ねた様にそう言つて、横をプイツと向いたリーシャさん。端から見たら可愛い仕草なのだが、どうやらディアスさんには効果は絶大だったようだ。

両手をつきガツクリと頂垂れて、OTLのポーズになっている。

「お兄ちゃんはな……………お兄ちゃんはな……………」

そしてワナワナと震え、小さい声で呟き、急にバツと立ち上がると…

「寂しいと死んじゃう生き物なんだ—————!!」

と言つて、右腕で目の部分を抑えながら走つて行つてしまった。

「……………」

「……………」

……え〜と、あれは確かにディアスさんだよな？

うん、見なかったことにしよう。

「いまディアス君が泣きながら走り去って行ったけど、何かあったのかい？」

そう言いながら近づいて来たのは、マーカスさんだ。

「いえ、ちよつとした病気のようなものです」

シス魂という名のな。

リーシャさんの言葉に、心の中でそう付け足す。

「それはそうと、何か御用ですか？ マーカスさん」

リーシャさんが話を切り替え、マーカスさんに尋ねる。

「ああ、いま街に出た仲間から連絡があつてね、あと1時間ほどで騎士団が到着するそうだ」

いよいよか。

「……………」

俺は息を飲み、自らの身体を奮い立たせる。

大丈夫、やれる。

「分かっていると思うが、くれぐれも無茶はしないようにね。我々は君1人を犠牲にして助かろうなんて、誰1人思っていないのだから」

「ありがとうございます、マーカスさん」

「まあ、君1人を戦地に送り出して、安全な場所に避難するような人間の言えた事ではないがね」

そう言って苦笑するマーカスさん。

その顔はどこか悔しそうであり悲しそうであり、また自身に対する苛立たしさをも感じさせた。

「この作戦を考えたのは自分です。ですから、マーカスさんがそんなに気にする事じゃないですよ」

俺は少し笑ってそう言ってみせる。

しかしマーカスさんは、さらに悲しそうな顔をするのだった。

「君は優しいなあ、それにとてもしっかりしている。私の子供も、君のような人間に育ってくれるといいのだが…」

そしてどこか遠くを見る様な顔をした。

「お子さんが…いるんですか？」

そう聞いたのはリーシャさんだ。

「ああ、すまないねえ。つい関係ない話をしてしまった」

「いえ、よろしければ、その…お子さんの話を聞いても？」

俺はつい気になって聞いてしまった。

もしかしたら本人にも辛い話になるかもしれないのだ。

「そうだねえ……。」

私には子供が二人いてね。双子の子供だ。本当に可愛い子供達だった。親バカかもしれんが、目に入れても痛くないとも思っていたよ。だが1年ほど前の話だ。

ある日の夜、私が不甲斐ないばかりに、その二人の子供を奴隷商に連れて行かれてしまつてね。

もちろん私も妻も抗つた。

自分達はどうなつても構わない。家の物も自由に持つて行つてくれ。だがどうか子供達だけは……と。しかし、子供達は連れて行かれた。男達に引つ張られながらも、助けて、お父さん、お母さん！ と、何度も泣き叫んでいたよ。

私は未だに……あの時の子供達の声が耳から離れない……」

話していくにつれて、マーカスさんの両の目からは涙が溢れてきていた。

「……それからすぐに、もともと身体の弱かつた妻は、その時のシ

ヨックで寝込んでしまつてね、1ヶ月と保たずに、妻は聖霊の下へと旅立つた。

そして私は、奴隷商からなんとか子供達を取り返すために、死に物狂いでお金を集めた。

だがそのお金も、領主の理不尽な徴税により、すぐに底をつき、またさらに借金。

そして、今に至るといわけだ」

「……………」

「……………」

言葉が出ない。

なんていう世界だ、なんていう国だ、なんていう人間達だ！

俺は徐々に腹の底から、怒りが沸いてきた。

「だから私は、これからの世にそんな子供達が生まれないように、この世界を変えたい。

この革命を気にそう決意した。

……………弱い決意かもしれんがね」

そう言つて、再び苦笑するマーカスさん。

「……………確かに、弱い決意ですね」

「…っ！？ ルイさん！」

俺の言葉にリーシャさんが反応し、諫めようとする。

しかし俺はリーシャさんを手で制し、次の言葉を続ける。

「これからじゃない、今まで被害に合ってきた人達、今も尚奴隷と
なつて苦しんでいる人達、あなたの…マーカスさんのお子さん達も
助けるんです！」

「……ルイさん」
「ルイ君」

リーシャさんとマーカスさんが、驚いた顔で俺を見る。

「し、しかし…」

「しかしも案山子もない！ 助けるって言ったら助けるんです！」

マーカスさんが何か話そうとするが、それを遮る。

「だってそれが、マーカスさんの一番やりたい事でしょう？」

そう言つて俺は、ニッとマーカスさんに笑いかける。

「ルイ君……、ありがとう……、ありがとう……！」

泣きながら、何度も俺にありがとうと言うマーカスさん。

「お礼はまだ早いですよ、マーカスさん。それはマーカスさんの子供達を助け出してからです」

すると不意に、遠くの方から闘気を纏った集団が近づいて来るのが感じられた。

昔から人の気配などには敏感だったけど、この世界に来てからはそれが更に強化されたようだ。

これも異世界補正の影響だろうか。

「そんでもってこの戦いが……」

俺は正門の方へ身体を向け、歩きながら首だけマーカスさんへ向ける。

「その革命への出発点です」

そして俺は正門の上を颯爽と飛び越え、戦地へと赴くのだった。

第17話（後書き）

今更ですが、マーカスさんのプロフィール。

マーカス・ワグナー（45）男

赤髪、翠眼、若干垂れ目。

会ったばかりのルイに、親切にしてくれた優しいオジサン。
二児の父。

声のイメージは、大塚芳忠さんです。

次回はいよいよ決戦です！

第18話(前書き)

遅くなりましたm(|) m
久しぶりの投稿です。

今回は主人公が薄味？

第18話

outside

「マグナス隊長、全部隊の配置完了しやした。後はただ突入の指示を待つだけですぜ」

私の腹心でもあり、この隊の副隊長でもある男、ガリウスが報告してきた。

「……………」

ただ私はその時物思いに耽っており、ガリウスの報告を聞き逃していた。

「あの…、マグナス隊長？」

「……………ん？」

報告をしても全く反応しない私を心配したのか、ガリウスが私の顔を覗き込みながら私の名を呼ぶ。

というか、顔が近すぎるわバカモノ。その傷だらけの蔽つい顔をあまり近づけるな。

私は無言でガリウスの顔を押し退け、空を見やる。

「なあガリウスよ、この度の戦い、わざわざ私達が出張る必要があったと思うか？」

そして徐おもむきにそう呟く。

「またその話ですか隊長。もう5回目ですぜ？」

なに？

私はこの話題を振るのは初めての気がするのだが。

「なに驚いた顔してるんですか。もしかして、今初めて話したか思ってるんですかい？」

どこか呆れた様な顔で言うガリウス。

「コホンッ、そうだな、すまん。5回目だな。

いやなに、ガリウスがわざわざ回数を数えていた事に驚いただけだ」

「そうですかい」

やれやれといった風に両手を上げ、そう言うガリウス。

なんだその呆れた顔は。

「しかし隊長、よっぽどこの戦いに乗り気じゃねえみたいですね。と言っても、それは俺も同じですが」

そう言っって屋敷に目を向けるガリウス。

事の発端は、2日前。

奴隷商アルネオが管理する奴隷達が、奴隷主であるアルネオに逆らい、その屋敷を占拠した。

この知らせを聞いたクルジア王国国民は、恐らくみな驚愕した事だろう。

奴隷が奴隷主に逆らうと言う事だけでも珍しいと言うのに、その目論見が成功し、あまつさえ屋敷すら奪ってみせたのだ。

しかも聞いたところによれば、奴隷側には1人の死傷者もいなかったと言う。

全くもって、不可解な話だ。

不可解と言えどもう一つ気になる話がある。どうやらその事件の発起人は遠い異国から来た、世にも珍しい黒髪黒眼の少年らしく、しかもその少年には武器も魔法も効かないと言うのだ。

なんだその御伽噺のような存在は。

まあしかし、私には関係のない話だ。

そのアルネオとか言う奴隷商には気の毒だが、自力で頑張ってなんとかしてくれ。

とか思っていたのも束の間。

翌日、国家正規騎士団中隊長、誉れ高きマグナス中隊長の隊長である私の下に、その奴隷達の討伐命令の書状が届いた。

しかも、王国特務騎士隊の隊長からの特命でだ。

王国特務騎士隊は、このクルジア王国国王直属の騎士。

つまりその隊長からの命令とは、延いては国王からの勅命と言うことになる。

なぜ奴隷の討伐に、わざわざ我ら正規騎士団が動かねばならんのだ。そんなもの、街の騎士団に任せておけばいいだろうに。

しかもなぜ、百戦錬磨で知られる我がマグナス中隊長にその命令を下したのか。

そういえば特務騎士隊の隊長であり、王国天剣四騎士であるあの男も、事件の発起人である少年と同じ黒髪黒眼だったはず。何か関係があるのか？

考えれば考えるほど分からなくなってくる。

目の前で暢気に欠伸をしているガリウスが恨めしい。

とりあえず、頭をひっ叩いておく。

「痛っ！いきなり何するんですかい隊長!？」

まあ、いくら考えた所で仕方がない。

戦いこそが我らの本分。

考える事はどこぞの腹黒い文官にでもやらせておけばいいのだ。

「マグナス中隊長、マリア・マグナスより全隊員に通達。明日正

午、奴隷商アルネオの屋敷を占拠した奴隷共を討伐する！」

「…………お？」

ガリウスが頭をさすりながら素っ頓狂な声を上げる。

「仕事だ、バカモノ！ とつとと全隊員に知らせてこい！」

「お、おう！」

バタバタと走って行くガリウス。

…まったく。

とまあこんな事があって、現在ここに至る。

「む？ ガリウス、全隊戦闘準備だ。どうやら向こうも出てくるみたいだぞ」

屋敷の方から鬨気が伝わってきたので、ガリウスに命令を出す。

「了解……お？　なんか1人門を飛び越えて来やしたぜ」

ガリウスの言葉を聞き、門の方に目を向ける。

すると、黒髪の男（恐らく少年だろう）が3mはある門を軽々と飛び越え、地面に片膝を着くように着地していた。

そしてその伏せていた顔をゆっくりと上げ、漆黒の双眸をこちらに向ける。

「　　ッ！」

そして少年と目が合い、その目に一瞬ゾツとした。

なんだアレは？

あんなものが人に出せる鬨気なのか？

そして少年が一瞬見せたあの表情、あれは歓喜か？

たった1人の少年が、この数の騎士を目の前にして歓喜するだと？

あれは……マズい。

黒髪黒眼といい、あの闘気といい、あの少年はどこか特務騎士隊の隊長に似ている。

もしあの少年が、あの男と同じ人種だとしたら…

「ガリウス！ 先頭の兵を下がらせる！」

「え？ ……っ！」

呆けた返事を返すガリウス。

その直後、少年が全身に光を纏ったかと思ったら、全身重装備の鎧を着けていた。

そして少年が…いや、暴力と言う名の鉄の塊が、先頭の兵に向け突進して来た。

s i d e ルイ

門と土壁を飛び越え、膝を曲げた体勢で地面に危なげなく着地する。そして顔を上げて前を見た瞬間、隊の後ろで馬に乗っている、なにやら偉そうな女の人と目が合った。

その人は、肩甲骨くらしいの長さの黄色の強い金髪と、澄んだエメラルドの様な目をしていて、くっきりとした目鼻立ちのものっそい美人だった。

「うわっ、チヨ―美人…って、イカンイカン！」

そんな美人と目が合ったことで、一瞬気分が浮かれそうになるが、これは戦いだ、しっかりと気を引き締めなければ。

美人は忘れる美人は忘れる美人は忘れる美人は忘れる美人は忘れる。
とりあえず、頭の中で出来るだけ憎いやつの顔を思い浮かべる。

…アルネオが出てきた。
しかも全裸の体付きで。

何故かやたらムカついた。

(地面に着地してからこの間約3秒)

「まあ、やる気は出たからいいかな」

そう呟き、俺は千刃の指輪を例の鎧に変えると、敵陣へと向け走り出した。

なにやら例の女の人が叫んでいたが、気にせず敵の中央に突っ込む。

o u t s i d e

なんだあれは？

「中央の隊は引けえ！ 両翼つ、前に出て敵を包み込め！ 相手は1人だ！」

目の前で我が精鋭の騎士達が、強馬にでも跳ねられた様にポンポン宙を舞っている。

「なんですかい、ありゃあ……！」

隣でガリウスが頬に汗を垂らしながら、あきれ気味にそう言った。

こちらが聞きだいくらいだ。

「なんだコイツ！ 剣が効かないぞ！」

「クソツ、俺の剣が折れやがった！」

「剣が駄目なら取り押さえろ！」

「無理です！ 鎧に強力な雷系の魔術を付与しています！」

何とか敵を囲みはしたものの、部下達の四苦八苦する声が聞こえてくる。

「クソツ、止まれっ、とまれえー！」

「ぎゃあああ！」

「畜生つ、俺の剣が！」

「馬鹿、前を見る！」

「ぐっ、がああああ！」

しかし、それでも敵は止まらない。
止められない。

まるで雑草を薙ぎ倒すかの様に突き進み、敵は我が隊を蹂躪して行く。

まるで相手にならない。

あんな化け物が、アイツ等以外にまだこの世にいたとは。

「隊長、こりゃ部下共には無理ですぜ。ここは俺が行きます」

目の前の惨状を見かねてか、ガリウスが自信なさげながらも出て行くとする。

「いや……」

しかし私はそれを手で制し、ガリウスを止める。

「私が行く。…槍を持って来い！」

あんな化け物、ガリウスでも無理だろう。
ならば、ここは私が自ら行くしかあるまい。

私は部下に自分愛用の武器　鍛冶屋に特注で造らせた、3m近くある馬上用ランス　を持って来させる。

「隊長、どうぞ」

頑丈な体躯の部下が、両腕で抱えながらそれを差し出す。

「うむ、ありがとう」

私はそれを片手で持ち上げ、軽く回してから構える。

「ひええ、相変わらず馬鹿力で……」

「何か言ったかガリウス？」

ガリウスが何か呟いたので、槍を鼻先に突き付けて聞いてみる。

「いえ、なにも」

「そうか、ならよし」

うむ、私のそら耳だったか。

では、行くか。

正直、あんな化け物に勝てる気はしないが…

まあ、一矢報いるくらいは出来るだろう。

「マリア・マグナス、出るぞ！　道をあける！」

第18話（後書き）

またまた新キャラ登場です。

マリアさんと、ガリウス兄さん。

さてさて、これからどんな風に物語に絡んでいくのか。

作者も知らない！（こら

近いうちキャラ設定等をUPしようと思います。

あ、先日アキバでパソコン買いました。

GW前にはネットを繋ぐ予定ですので、これでようやく章編成とかができそうです。

まあ、まだ章分けするほど話が無いですけどね…

第19話

「クソッ、止まれっ、とまれえー！」

2 m近くある体躯の敵が、俺を必死で止めようと、武器を捨てて両手で抑えにかかる。しかし俺はそれを全く意に介さず、右肘を突き出した体制で、ひたすらに突っ走る。

「ぎゃあああ！」

俺のタックルを受けた敵は、例え誰であろうと問答無用にふっ飛ぶ。勢い良く走る俺に、タイミングを合わせてバットのフルスイングの様に剣を振る敵。しかし、それも効かない。

むしろ、相手の剣の方が折れてしまう。

「畜生っ、俺の剣が！」

よほど自分の剣が大事だったのだろう。剣を折られた相手は、自分の折れた剣を悔しそうに見る。…けど、それは敵の前でやる事じゃないなあ。

「馬鹿っ、前を見る！」

「ぐっ、がああああ！」

仲間の忠告も虚しく、そいつは俺に体当たりされて宙を舞った。

「クソツ、化け物がああ！」

そう叫んで、鎧の兜の目の部分を正確に突きで狙ってくる敵。うむ、狙いは悪くないなあ。

…でも。

「っ！」

俺はその剣を易々と躲し、相手の顔に文字通り、鉄拳を叩き込む。

「ぐはっ！」

綺麗に放物線を描いて跳んで行く敵。

というか、この戦いで何人が初の空中浮遊体験をしていることやら。

ってか、この鎧チートにしすぎたかな？

いやいや、やっぱりここは自分の体第一でしょ。

なんか端の方で、自分のあまりの不甲斐なさに泣いてる人とかいたけど、気にしない気にしない。

「百戦錬磨の我が隊が…」とか言ってるけど、気にしない気にしない。

みんなのためならエンヤコラ！

俺は敵のメンタルなんか気にせず、ただひたすらに突っ走る。

っていうか、走ってる俺を敵さんが追っかけたり、前からタックルで止めようとしてるから、だんだんアメフトやってる様な絵になってきた…

………

俺はつい倒れてる敵の鎧兜を引ったくり、そのまま敵陣の後ろの方に向けて走る。

「あ、貴様っ返せ！」

兜を盗まれて激怒した髭面のオッサンは、走って俺を追っかけてきた。

そしてなぜか、兜を取り返そうとする周りの仲間。

うむ、アメフトだ。

人数違い過ぎるけどな。

走る俺。

追い掛ける敵。

逃げる俺。

数人で壁を作って立ちふさがる敵。

タツクルする俺。

吹っ飛ぶ敵。

「シューーッ!!」

持っていた敵の兜を、高く掲げられていた敵の二本の軍旗の間にシユートする。

「ウイイイー!!!!」

両手を天高く上げ、意味もなくガッツポーズする俺。

「ああ……」

「ちくしょう……」

そしてなぜか頂垂れる敵。

ノリ良いなおい。

「って、何やっとなるかお前等!」

「はっ！？ 小隊長っ」

「お、俺は何を？」

「何故か凄く負けた気分になってた……」

「さっさとあいつを仕留めろ！」

「はっ！」「はっ！」

む、来るか。

さて、じゃあもうひとつ走りするか。

そう思って俺が走り出そうとした瞬間

ドンッ！！

目の前に、3mはある馬鹿デカイランスが落ちてきて、地面に突き刺さった。

今のは危なかった。

あと一瞬後ろへ飛ぶのが遅かったら、確実に直撃してた。

しかもこれは俺の勘だが、今の一撃、恐らくこの鎧では防ぎきれなかった。

「誰だっ！」

槍の飛んできた方向へ叫ぶ。

「よく今のを避けたな。やはり、一筋縄ではいかない相手か」

すると、蒼いマントを付けた白銀の鎧を纏い、馬に乗った金髪の女性が、此方に近づきながらそう言った。

あの人は…、さっき目が合った人？

「私は、この国家正規騎士団マグナス中隊の隊長、マリア・マグナス。

貴殿に、尋常の勝負を申し込む！」

そう言いながら自らの投げた槍を拾う、マリアと名乗る女性。

なるほど、この人が隊長か。

なら、この人さえ倒せば終わる…のかな？

「……受けよう」

嘗められないよう、なるべく低い声で答える。

「……………」

馬から降りずに、そのまま槍を構える相手。

「……………」

俺も先ほどまでの突っ走るだけの戦い方とは違い、構えをとる。

周りの敵が巻き添えを恐れてか、段々と離れていく。

「……………」

俺を中心にして円を描く様に、カッポカッポと馬を歩かせる相手。

俺はそれに合わせて体を動かすなどという事はせず、先ほどの構えを崩さないで、岩の様にどっしりとしている。

なにせこれだけの闘気を隠しめせず、さらに馬の歩く音まで聞こえるのだ。わざわざ目で追う必要は無い。

それに下手に体を動かせば、逆にその隙を狙われる、という事もある。

「……………」

「……………」

どれくらいの間そうしていただろうか。

5分は経ったように感じるが、実際には1分も経っていないかもしれない。

「 シッ! 」

不意に、相手が右側から攻撃を仕掛けてきた。

地上と高低差のある、馬上からによるランスの重い刺突。

俺はそれを右腕で往なそうとして

「 ガアッ! 」

後ろに大きく吹っ飛ばされた。

「 なん…だ、いまの…! 」

尻餅をついた俺に、再び刺突で追い討ちを掛ける相手。

「 クッ 」

今度は往なさずに、紙一重で躲す。

「 グアッ 」

しかし、躲したはずの攻撃をまたくらう。

「 クソッ、一体どうなってるんだ! 」

俺は再び追い討ちを掛けられないように、地面を転がって離れてか

ら立ち上がる。

「ふむ、どうやら私の攻撃は通じるようだな。先ほどの戦いを見た限り、化け物の様なやつだとは思っていたが……まだ化け物としては成長途中と言っやつか？」

そう言っつて、槍の切っ先を向けてくる。

「化け物化け物っつて、俺は立派な人間だつてーの！」

向けてられた切っ先を払いのけ、相手に向かって突進する。

「あまいつ！」

が、絶妙な手綱さばきと、人馬一体とも言うような動きにより、躲かれてしまう。

そして躲しぎまに、再び槍を突いてくる。

俺は今度こそこの攻撃のクラクリを突き止めるため、自身の胴体視力をフルに活用し、突きを躲しながらも、槍を凝視していた。

そして

「ッ！？ ゲアッ！」

躲したはずの槍によって、宙を舞わされた。

俺はなんとか受け身を取り、隙を作らないように、直ぐに立ち上がる。

なるほど、そういう事か。

全く、デタラメにも程があるぞ。

まさか…

「まさか、突いた槍の軌道を瞬時に変えて、横風の攻撃に変化させていたとはね。

ただでさえ難しいっていうのに、その重い槍で軽々とやってのけるってのは正直驚いたよ」

そう。

彼女がやっていたのは、俺が突きを躲した瞬間に、その槍を俺が避けた方に風ぐ。ただそれだけだ。

武術なんかを余りよく知らない人とかは、漫画やアニメなんかのキャラクター達はよくそんな事を平然とやってのけているので、出来るんじゃない？

とか思うかもしれない。

いやいや、実はあれ、単純そうに見えて相当に難しい。

特にスポーツなどとは違い、こういった真剣勝負になると特にだ。

なにせ相手は、俺を殺すために、必殺の突きをもって攻撃してきている。

必殺技とかの必殺ではない。

この一撃で敵を屠ると、覚悟を以て放つ事だ。

そんな一撃を放ってる最中に、瞬時に軌道を変えるなんてやってみる。しかもこんな重たい槍で。

下手をすれば腕の筋どころか、腱が切れる。

それを俺の目の前にいるこの人は、いとも容易くやってのけているのだ。

デタラメ過ぎる。

「なるほど、私の攻撃に気付いたか。

しかし驚いたのは此方の方だ、少年。

まさかこの技を三度も喰らい、平然としているとはな。

今まで戦った敵は全て、一撃当たっただけで屠ってきたのだがな。

敢えてもう一度言わせてもらおう。まったく、化け物め」

「だから人間だったの。

つていうか、それはお互い様でしょうに。

一体どんな骨格と筋肉してるんですかマジで。

あんなデタラメな攻撃見た事ないですよ」

「失礼な。この私の様なうら若き乙女を前にして化け物だと？

そんな冗談、寝てからでも言うものではないぞ」

……うら若き乙女とか、自分で言うか。

しかも言い終わった後に若干顔赤くなってるし。恥ずかしけりや言わなきゃいいのに。

「というか、平然としてるワケでもないけどね。見てこれ、鎧に罅ヒビが入ってる」

そう言っつて、鎧の腹の辺りを指差す。

そこには、1センチ程の小さな罅が入っていた。

「私としては、そんな小さな罅で済んでいるその鎧に驚きだ。しかもその鎧、強力な雷系魔法が付与されているだろう？」

もし私に雷系の魔法に耐性が無ければ、一撃当てた瞬間に負けていたところだ」

あ、忘れてた。

そっぴやそんな効果付けてたな。

っつていうか、耐性ってなんだ？
雷系の魔法が得意とかなのかな？

「さて、お喋りはここまでだ。

そろそろ決着といこうか」

そっぴ言っつて槍を構え直し、切っ先を此方に向ける。

「行くぞ！」

第20話（前書き）

遅くなりました。

久しぶりの投稿です。

第20話

今までとは桁の違う、素早く重い一撃が正面から繰り出された。

この一撃が当たれば、喻えこの鎧を身に着けていたとしても、絶命は免れないだろう。

けどまあ、これを止めるには …

「やるしかないよな！」

「なに！」

俺はその一撃を、避けることも往なすこともせず、正面に立つ。

「オオオオオオオオ！」

そして槍が胸に当たる直前に身を逸らし、右脇に抱えて腕でがっしりと抑えた。

「なるほど、そうきたか！ だが！」

そう言って相手は、槍を持つ手に力を込め、俺を振り払おうとする。

「なんの！」

だが俺は更に力を込め、それに抗う。

「ぐっ、ぬうう……」
「ぬうおおお……」

お互いに一步も譲らない力の均衡が続く。

「この力、流石と言ったところか。しかしまだまだ！」

そう言つて、向こうも更に力を込める。

「むお！？」

それによつて、踵が若干浮かされる。

本当に凄い力だ。

並の人間なら吹っ飛ばされているだろう。

でも、俺は並の人間ではない。

「ウ……オオオオオオオ！」
「な………に?!」

全身に力を込め、相手の身体ごと槍を持ち上げる。

そしてそのまま槍を振り下ろし、相手の身体を地面に叩きつけた。

「カハッ！」

肺から空気の抜けるような音をさせ、相手は…

相手は……

って、この人の名前なんて言っただけ？
確か聖母様のな…

そう、マリア様だ。

ってあれ？

なんで様付けしてるんだ俺？

せめて、さんでいいじゃん敵なんだし。
うん、マリアさん。

よし。

「くっ、なん…だ今のチカ…ラは。
このわた…ゲホッ…わたしを、槍…ごと、持ち上げるとは…」

そう言いながら、マリアさんは槍の持ち手を地面に付いて立ち上が

る。

あ、槍：

名前に気を取られて、つい手を離してしまっただ。

しかし、勢い余ってつい思いっきり叩き付けてしまったのだが、それでもまだ立ち上がるうとするのか。

「ゲホツゴホツ！

クツ、身体が痺れて…」

やはり先ほどの攻撃がかなり効いているのか、満足に立ち上がれずにいる。

「退いて下さい。

この戦、あなた方の負けです。

これ以上の戦いは、何の意味もなさない」

「まだ……まだだ！

まだ私は……戦えるっ。

ゲホツ、ワタシの…四肢はある！

私の命は…魂は生きている…！」

立ち上がり、俺に襲いかかるマリアさん。

しかし、俺は槍の切っ先を、今度は片手で受け止める。

「貴女の方では、俺には勝てません。

退いて下さい」

「まだだと言っている…！」

そう言って、槍を俺の手から無理やり引き抜くマリアさん。

…仕方がない。

本当はこんなやり方は嫌だが。

「なら、完膚無きまでに叩きのめすだけです」
「やってみるがいい！」

声と共に、マリアさんの重い突きが放たれる。
が、その突きには先ほどまでの威力はなく、またもや片手で受け止められる程のものだった。

「……………」
「おのれっ……………ぐっ！」

俺は片手で受け止めた槍を、マリアさんの方に押し返し、槍の柄でマリアさんの水月（鳩尾のこと）を突いた。

「ゲホッ、……………く、まだまだ！」

しかし、彼女はそれでも立ち上がる。

今の一撃で、既に鎧の水月の辺りが拉げており、端正な顔は土にまみれ、見るも無惨な姿になっている。

「ウオオオ!!」

またも愚直に突きを繰り出してくるマリアさん。

「ぬるい!!」

それを右の回し蹴りで弾き、そのまま遠心力を生かし、左の後ろ回し蹴りを喰らわせる。

「ッ!!」

俺の蹴りをモロに喰らい、またも地面に転がるマリアさん。

しかし、その闘士は全く潰えず、不屈の眼差しを向けてくる。

いったい何が彼女を立ち上がらせるのか。

騎士としての誇りか？

隊長としての矜持か？

あるいは違う何かか？

いずれにせよ、そんな事で命を捨てようとするのは馬鹿げている。

もし、そんな馬鹿げた事を生き甲斐とするのが、騎士というものなのだとしたら、俺には理解出来ない。

何事も命あつての物種だろうに。

「……退いて下さい。」

俺は貴女に死んで欲しくなんか無いし、殺したくもない。何より、これ以上の戦いは無意味だ」

「無意味…だと？ ふざ…けるな。」

貴様も奴隷なら、分かるだろう。

戦いに敗れた、騎士の末路を」

敗れた騎士の末路…

つて、なんだ？

奴隷なら分かるだろうって

「まさか、敗残兵は奴隷になる。という事ですか？」

「まさか…とは、貴様もしや知らなかったのか？」

なるほど、その力、その容姿、何よりこの世界の常識に対する知識の無さ。やはり貴様も（・・・）異世界人か」

…え？

いま、なんて？

「だが、相手が異世界から来た化け物だろうと、我々に敗北は許されない！」

例えこの身が滅びようと、負けるワケにはいかないのだ！」

そう叫び、槍を構えるマリアさん。

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！」

なんで貴女が、俺が異世界人っていう事を知っているんです？

それに貴様もって、俺以外の異世界人を知っているんですか?!」

俺はマリアさんの衝撃的な言葉に、冷静さを忘れてマリアさんに近づこうとした。

しかしマリアさんは槍の切っ先を俺に向け、俺の動きを制する。そして、不敵に笑い言った。

「知りたければ、私を倒す事だ。」

先ほど貴様が言った通り、完膚無きまでにな

「く……」

確かに、今のことは気になる。

でも、ここでマリアさんが俺に負ければ、ここにいる騎士はみな奴隷にされてしまう。

「何を戸惑っている少年。」

まさか、我々に同情でもしてくれているのか？」

そんな俺の心中を察したのか、マリアさんは優しげな顔で問いかけてきた。

「……………」

俺は無言のまま頷いた。

「……そうか」

俺の思いが通じたのか、構えていた槍を下げるマリアさん。

しかし次の瞬間、俺の右頬に強い衝撃が走った。

「なめるな!!」

「グッ!？」

マリアさんの拳を受け、地面に尻餅をつく俺。

「立て少年! そして構えろ!」

そして再び槍の切っ先を俺に向けて叫ぶ。

「同情だと? ぶざけるな!

我々は皆、自ら望んで騎士になった!

民を守るため、国を守るため、家族を守るため!

無様な敗戦を晒せば、この身を奴隷という身分に落とす事も覚悟してだ!

そんなもの、我ら騎士に対する最大限の侮辱だと知れ!」

「……………」

俺は鎧の兜を脱いで立ち上がると、真っ直ぐにマリアさんを見据える。

「しかしそれでも尚、少年が戦いを拒むというならば、そうすればいい。」

むぎむぎ我らに殺され、守るべき者も守れずに死にゆくがいい！」「ッ！」

そんなのダメだ。

俺は負けるワケにはいかない。

ここで俺が負ければ、リーシャさんやディアスさん、それにマーカスさんや皆を守れない。

それだけは…

「それだけは、させない…！」

俺は皆を守る！」

「ならば戦え少年！」

守る覚悟を背負い、その拳に思いをのせて戦え！」

「俺は皆を守る！」

あんた達に、この国に負けるワケにはいかないんだ！」

俺は持っていた兜を投げ捨て、ゆっくりと構える。

呼吸を落ち着け、マリアさんの目を見て、全身を視界に収める。

まだ呼吸が荒い。

ゆっくりと深呼吸をし、身体のを抜く。

自分の身体の中を血液がめぐっていくのが分かる。

身体が重い。
鎧が邪魔だ。

「……武装解除」

鎧を指輪の状態に戻す。

「ゆくぞ、少年」

マリアさんが地を蹴り、もの凄いスピードで迫ってくる。
あんな重い槍を持っているのに、信じられない程のスピードだ。

しかし今の俺には、それがスローモーションのように視界に写る。

「ハアアアアア！」

マリアさんの鋭い突きが俺の頬を掠める。

「まだだ！」

避けた俺を追撃するように、横凧に迫ってくる槍。

それを右に回転しながら身体を沈み込ませて、躲しざまに右回し蹴りをマリアさんの足に叩き込む。

「なに!？」

「終わりです」

足を払われ地面と垂直に浮いたマリアさんの身体に、地面に叩き付けるように拳を放つ。

「グッ！」

「オオオオオオオオオオ！！！」

ズン！

辺りに砂煙が舞い、視界を奪う。

「ハア…ハア…ハア…」

ゆっくりと立ち上がる俺。

ゴクリ

どこからともなく、唾を呑み込む音が聞こえる
恐らく、マリアさんの部下の騎士の誰かだろう。

そして、徐々に砂煙が晴れていく。

俺の足下には、地面にマリアさんが大の字に転がっていた。

「少年、キミの…勝ちだ」

そう告げたマリアさんの口元にはつつすらとだが、確かに、笑みが
見て取れた。

第21話

「少年、君の…勝ちだ」

マリアさんの口から告げられた、勝者への言葉。

「勝つ…た？」

俺は乱れた息を整えながら、呆けた顔で呟いた。

本当に勝ったのか？

あんなに強い人に？

そう考えて、俺は倒れたマリアさんの顔をそーっと覗いてみた。

「……………」

「気絶、してる？」

先ほどマリアさんが言った言葉を思い出す。

『君の勝ちだ』

つまり、そういうことだ。
辛くもではあるが

「か、勝った…」

瞬間、俺は全身から力が抜け、へにゃへにゃと地面に座りこんだ。

「はは、勝った。

やってやったぜコンチクショウ」

色々考える事は山積みだが、今この瞬間だけはこうして座り込んでいたかった。

「っていかイオのやつ、今回は俺一人で余裕だみたいな事言いやがって。

めちゃくちゃキツかったぞあんにやろう。次会ったとき覚えとけよ
駄女神め」

そんな風にイオに悪態を吐きつつ、何となく空を見上げてみる。

すると、何だか周りがザワザワと騒がしくなりだしたので、視線をそちらに向ける。

「嘘だろ、隊長が負けた?」「まさか、あんなガキに?」「でもさつき、お前の勝ちだみたいな事を…」「俺も聞いたぞ」

マリアさんの部下の騎士達だった。

「……………あ

忘れてた。

マリアさんとの戦いに集中するあまりに、他の人達を…

と思った瞬間、部下の皆さんが一斉に此方を睨んだ。

あれ、聞こえた？

俺のマインドヴォイス。

「……………」

そして無言のまま、ひたすら睨まれる俺。

「えーと……………」

「うわああああー！」

「え？」

「やめんかつー！ー！」

ドクッ！

「おじっ！ー！」

「っ！？（ビクッ）（

どうしようこの空気。とか思っていたら、急に騎士の1人が雄叫び

をあげて俺に突っ込んできた。
と思ったら横からマリアさんの槍が飛んできて、その人にぶち当たった。

ちなみに槍は横向きで飛んできたため、当たったのは槍の腹の部分だから刺さる事はなかったが、槍が当たったその人は、見事に一瞬で俺の視界から消え失せた。

っていつかマリアさんいつの間にか起きたんですか？

「何をやっている貴様ら！」

戦いは終わりだ。今すぐ退け！」

「し、しかし隊長……」

「このまま撤退したところで、我々のいく先は……」

「ああ、そつだ。」

王の勅命にも等しいとされる、王国特務騎士隊の命令。

その命令を遂行せずにおめおめと逃げ帰ったとあらば、死刑かはたまた奴隷商いきだろつな」

「ならば、なおのこと逃げ帰るわけには」

「貴様らの隊長が、一騎打ちで負けたのだ！！」

騎士として、隊長として、そして1人の武人としてつ、誇りを持って戦った！

そして、負けたのだ……」

自分だって辛いはずなのに、それでも必死に部下達を宥めようとするマリアさん。

しかし、それでも部下の騎士達は諦めない。

「でも隊長……」

「いい加減にしゃがれテメエラ!!」

部下の1人が尚も食い下がろうと、口を開きかけたとき、彼らの後ろの方から、大きな声が聞こえた。

すると、周りの人垣のいつかくが割れ、傷だらけな顔をした、いかにも歴戦の猛者といった風格を纏った男が出てきた。

っていつか、なんかオレ空気になってない？

「あ…、ふ、副隊長よブツ！」

あ、殴られた。

「こんのバカ野郎共が、いい加減にしゃがれ!!」

「ガリウス……」

ポカンとした顔で、副隊長と呼ばれた男の人を見るマリアさん。

「おいテメエ！」

「は、はいっ」

そして近くにいる部下をビシッと指差し、近付いていく。

「テメエの大将は誰だっ、言ってみろ！」

その部下の鼻に人差し指をグリグリと押し付けながら、ヤの人顔負

けのど迫力で質問する。

「隊長です…」

「あ、あん？ 聞こえねえぞ！」

「マグナス隊長です！」

「じゃあテメエの大将は誰だ！」

今度はその隣にいた部下に聞く。

「マグナス隊長です！」

「テメエは！」

「マグナス隊長殿です！」

「テメエは！」

「マグナスだいちょうです！！」

「うるせえ！！」

あ、殴った。ヒドい…

「そうだつ、俺らの大将はこの人だ！」

その大将が、騎士としての誇りを持って、テメエラの隊長として一騎打ちで戦って負けた！

負けを認めた！

なのにテメエラは、いつまでもウジウジとしやがって。

テメエラはうちの大將に恥をかかせるつもりか！

「ガリウス副隊長…」

「副隊長…」

皆一様に、ハツとした顔をした後、キラキラした目で副隊長と言わ

れた男の人を見ている。

…なにこれ？

「ありがとうございます副隊長！！

我々は大事なモノを忘れてたおりました！」

「副隊長おおおー！！」

「ありがとうございます副隊長殿！」

男泣きしながら、副隊長に敬礼？みたいなものをしたり、駆け寄って抱きついたりしている。

ナニコレ

「…ガリウス」

そこでフラッと、足どり覚束なく立ち上がったマリアさんが、副隊長の後姿に呼び掛けた。

「はい、隊長！」

そして爽やかなつもりの（暑苦しい）笑顔で振り向いたその横っ面に、マリアさんの拳がめり込む。

「暑苦しいわ、ばか者め！」

全くもって、その通りで。

見ていて恥ずかしくなったのか、マリアさんの頬が若干赤くなっている。

「あと、あまり負けた負けた連呼するな。なんだか惨めになってくる」

そっちでしたか。

っていうか俺どうすればいいんだろっ？
すっげえ置いてきぼり喰らってる。

「…それから、お前たち！！！」

今度は矛先を部下の皆さんに向けるマリアさん。

ヒッ、と悲鳴を上げ、若干後ずさる皆さん。

「　　済まない！」

「「……………え？」」

怒られると思っていたところに、急にマリアさんの謝罪。部下の皆

は一様に面を喰らっていた。

「先ほどはあのような事を言ったが、いくら隊長が負けたからと言っても、納得できるものでもないだろう。」

私はお前達だけでなく、お前達の家族の命運までこの背に負っているというのに、この無様な結果……

本当に済まない」

「隊長……」

そんな事はない。

そんな感情を込めて、マリアさんを見つめる部下の人達。

マリアさんにもそれが伝わったのか、或いは自嘲か、フツと笑いこちらに振り向いた。

「そういう事だ、少年。済まなかったな」

あ、忘れられてはいなかったんですね。

「……いえ」

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。」

自分に負けた相手に、いつまでも少年と言われるのも癪だろう。

それに私も、自分を倒した相手の名前ぐらい知っておきたい。

良かったら、君の名前を教えてはもらえないだろうか」

そう言っつて、こちらに歩み寄ってくるマリアさん。

なんて言っつか、潔い人だな。

「……るい、有沢累です。」

「マリア・マグナスさん」

「アリサワ・ルイ…か、やはり少々発音が難しいな。ルイが名で、アリサワが姓で間違いないな？」

「え、ええ」

俺の名前を聞いた瞬間、少し難しい顔をするが、すぐに戻ったマリアさん。

しかしそれよりも、やはり気になる事があった。

「マグナスさん、ひとつ聞かせて下さい。

先ほどの鬪いの最中の事、普通の人なら発音出来ない俺の名前を言えた事。

…マグナスさん、この世界には、俺以外に異世界から来た人間がいますね？

更に貴女は、その人を知っている」

「……………」

そう問う俺に対し、マリアさんは無言で頷いた。

「っ！やつぱり。

教えて下さいマグナスさん。

その人はいつたい……」

「そう急くな、少年…っと、ルイだったな。

というか、私の事もマリアでいいぞ」

そう言いながら、とろとろと、手で窘められる。

「すみません、マグ…あ、えっと、ま、マリアさん」

確かに心の中ではマリアさんとは呼んでいたけど、いざ声に出すと

なると、どこことなく恥ずかしいな。

「っ！」

すると何故かマリアさんが、右手で口を抑え、顔を俺から背けさせながら肩をプルプル震えさせている。しかも若干耳が赤い。

俺何か面白い事でも言ったのかな？

「えっと、あの、マリアさん。

どうしました？」

「発作みたいなもんだ、気にするな」

すると後ろにいたガリウスさんが、少し呆れた顔でそう言った。

「はあ…、発作？」

なんの発作だろう？

大丈夫かな？

「ほら、隊長。相手が困ってますぜ」

「ハッ、す、すまん。」

ゴホンッ。ええと、君以外の異世界人を私が知っているかどうかの話だったな」

「はい」

俺は神妙な面持ちで頷いた。

「結論から言うと、肯定だ。」

だがこれは、私だけが知っている事ではない。ここにいる誰もが知っている事だ。

無論、君の仲間たちもな」

「それはいつたいどういう…」

「おいおい、困るなあ隊長さん。

誰が敵と馴れ合えなんて命令出したよ？」

「！？」

突然、俺の後方からそんな科白が聞こえて、俺は咄嗟に声のする方へ振り向いた。

すると目線の先、俺が守っていた屋敷の門の上に、20代半ばほどの、金髪の男が此方を見下ろす様にしゃがみこんでいた。

「ば、ばかな。なぜアナタが此処にいる？」

後ろからマリアさんの動揺した声が聞こえてくる。

振り向けば、この場にいる誰もが驚愕の表情を浮かべていた。

「マリアさん？」

「逃げる、少年。

いくら君が異世界から来た異能者だとしても、あの男には勝てない」

「勝てないって…。」

あの男はいつたい誰なんですか？」

マリアさんは目線を門の上の男に向けたまま、喉をゴクリと鳴らして口を開いた。

「あの男が、そうなんだ」

「え？」

「あの男こそ、4年前、魔王を倒すために異世界から召還された勇者の1人。クルジア王国天剣四騎士にして、王国特務隊の副隊長、
「炎熱の騎士」ダリオ・ガリバルディだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9541o/>

異世界下克上物語

2011年10月28日19時33分発行